

学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学 2020 春

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度との比較から推定できることにも言及しています。

目次

1. 全体概況	3
昨年度春学期との比較	4
回答率の変化等	5
項目間の相関係数一覧	6
目的変数への寄与度	7
2. 領域ごとの集計値にみる過去3回の推移とサマリー	8
3. 項目別集計結果	10
参考資料1 実施率／回収率	21
1-1 アンケート実施率（回収率）科目区分別	22
1-2 アンケート実施率（学部）2005年度春学期～2020年度春学期	23
参考資料2 自由記述回答 頻出キーワード分析	25
自由記述回答 頻出キーワード分析について	26
<集計グラフ>	
【効果点】「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点	29
全学	30
学部別	31
回答人数帯別	32
学年別	33
出現率前回比較 全学	34
出現率前回比較 学部別	35
出現率前回比較 回答人数帯別	39
出現率前回比較 学年別	42
【改善点】改善できる点	45
全学	46
学部別	47
回答人数帯別	48
学年別	49
出現率前回比較 全学	50
出現率前回比較 学部別	51
出現率前回比較 回答人数帯別	55
出現率前回比較 学年別	58

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差¹は下表に示す通りです。無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

「5 そう思う」…5点、 「4 どちらかと言えばそう思う」…4点 「3 どちらともいえない」…3点
「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点 「1 そう思わない」…1点

質問	質問内容	平均					標準偏差			
		年	20	19	18	17	20	19	18	17
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.58	4.54	4.51	4.47	0.39	0.31	0.33	0.33
		秋		4.58	4.54	4.49		0.29	0.31	0.32
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.56	4.55	4.51	4.48	0.43	0.31	0.32	0.33
		秋		4.57	4.53	4.48		0.29	0.32	0.32
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.58	4.53	4.48	4.43	0.37	0.30	0.31	0.33
		秋		4.56	4.50	4.43		0.28	0.30	0.32
Q4	教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した	春	4.54	4.44	4.38	4.35	0.42	0.36	0.38	0.40
		秋		4.50	4.42	4.35		0.34	0.36	0.38
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.57	4.57	4.54	4.51	0.46	0.31	0.32	0.33
		秋		4.60	4.56	4.50		0.30	0.32	0.33
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.44	4.49	4.44	4.40	0.50	0.33	0.35	0.36
		秋		4.52	4.46	4.39		0.31	0.35	0.36
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.53	4.42	4.36	4.31	0.34	0.31	0.31	0.33
		秋		4.45	4.38	4.31		0.30	0.32	0.32
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.31	4.23	4.14	4.07	0.41	0.36	0.37	0.38
		秋		4.26	4.18	4.10		0.37	0.38	0.37
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた(できる)	春	4.17	4.18	4.11	4.05	0.45	0.36	0.35	0.35
		秋		4.21	4.14	4.06		0.34	0.35	0.35
Q10	私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた	春	4.40	4.35			0.45	0.36		
		秋		4.39				0.35		
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.12	4.20	4.16	4.12	0.62	0.45	0.44	0.45
		秋		4.25	4.19	4.12		0.43	0.44	0.45
Q12	私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる	春	4.47	4.42	4.39	4.35	0.42	0.36	0.35	0.36
		秋		4.45	4.40	4.35		0.34	0.36	0.35
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.89	4.55	4.54	4.53	0.20	0.29	0.26	0.29
		秋		4.49	4.45	4.45		0.29	0.30	0.28
Q14	この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか	春	3.35	3.06	2.90	2.86	0.65	0.57	0.59	0.57
		秋		3.14	3.00	2.95		0.63	0.64	0.62
全質問合計(Q13、Q14を除く)		春	4.44	4.41			0.34	0.30		
		秋		4.45				0.29		

※Q10 学生の成長実感は 2019 年度に新設です。これに伴い、全質問合計も昨年度からの表示です。

¹ 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。

コロナ禍で対面授業が行えなかったことによって、授業の到達目標の達成が妨げられることも予想されましたが、前ページの表組に示す通り、Q9 目標達成における授業別集計値の平均（19 春 4.18→20 春 4.17）では昨年度春学期との間に顕著な低下は確認されません。統計的にみても授業別集計値の平均に「有意差なし」です。t 検定片側 P 値は 0.243（ ≥ 0.05 ）でした。

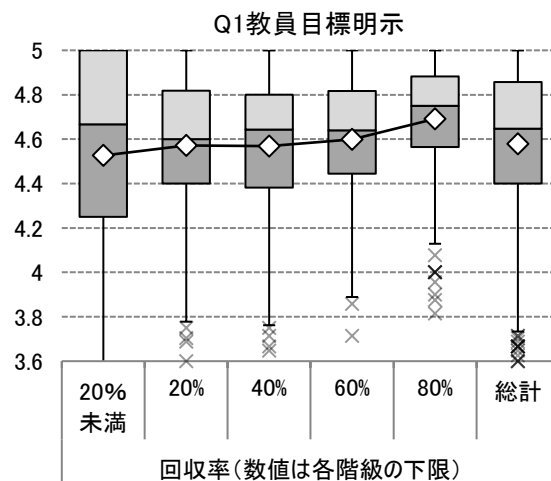
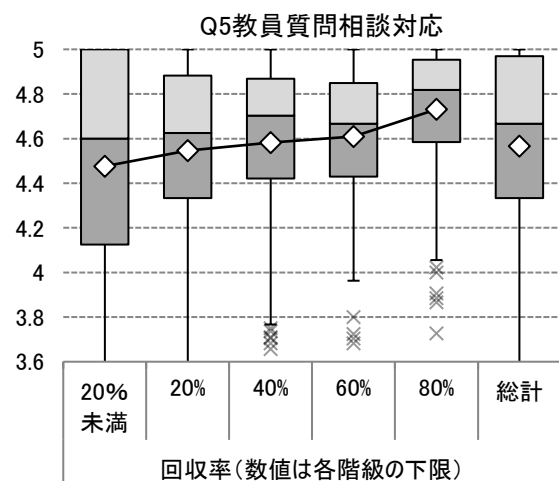
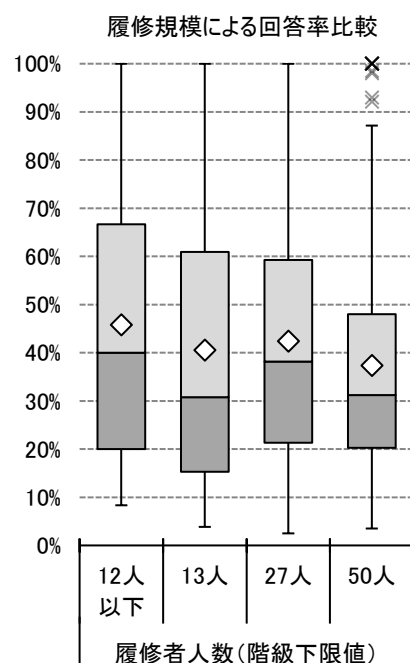
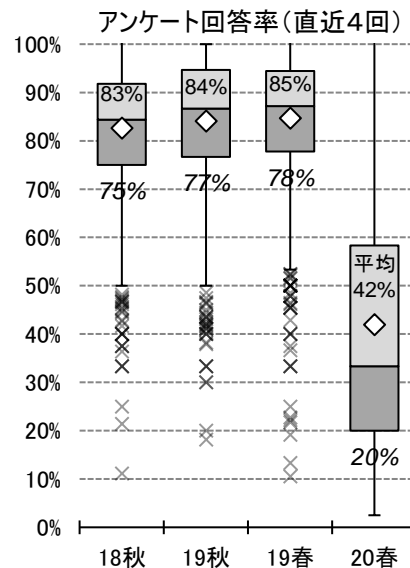
他項目も含めて、昨年度同時期との比較をまとめ直したのが下表です。詳細は後掲の項目別の分析に譲りますが、これまでに重ねた授業改善の成果を後退させるほどの影響を受けた（＝低下した）のは、Q11 興味関心の向上と Q6 教材・教具効果だけです。前者は対面でなら学生間の気づきの交換や先生からのコメントやフィードバックによって知的興味が刺激されたであろう場面が持てなかったことが、後者は使い慣れたのと違う教具を使わざるを得ない状況にあったことが、それぞれの低下の主因と思われます。一方で、Q14 平均学修時間は大きく伸びたほか、Q7 授業に臨む姿勢、Q8 質問・調査努力といった学生の取り組みも、Q4 事前・事後学修指示の改善に刺激されたかのように上昇しています。（Q13 は「出席」の様態が変わったため評価を保留します。）

項目	実施	n	平均	標準偏差	昨年同時期との平均値の差	
					実測値	t検定P値
Q13出席率	'20春	1,174	4.890	0.202	△.336	5E-196 **
	'19春	1,218	4.554	0.287		
Q14平均学修時間	'20春	1,174	3.353	0.646	△.295	1.5E-31 **
	'19春	1,219	3.058	0.571		
Q7授業に臨む姿勢	'20春	1,174	4.530	0.345	△.112	5.1E-17 **
	'19春	1,219	4.418	0.305		
Q4事前・事後学修指示	'20春	1,174	4.536	0.420	△.092	5.3E-09 **
	'19春	1,219	4.444	0.359		
Q8質問・調査努力	'20春	1,174	4.312	0.413	△.087	2.3E-08 **
	'19春	1,219	4.225	0.360		
Q3教員シラバス対応	'20春	1,174	4.580	0.371	△.054	5E-05 **
	'19春	1,219	4.527	0.298		
Q12有用性	'20春	1,174	4.472	0.425	△.053	0.00051 **
	'19春	1,219	4.419	0.356		
Q10学生の成長実感	'20春	1,174	4.398	0.452	△.049	0.00178 **
	'19春	1,219	4.349	0.361		
Q1教員目標明示	'20春	1,174	4.578	0.390	△.037	0.0053 **
	'19春	1,219	4.542	0.307		
Q2教員努力	'20春	1,174	4.561	0.427	△.015	0.15927
	'19春	1,219	4.546	0.314		
Q5教員質問相談対応	'20春	1,174	4.567	0.461	▼.005	0.37572
	'19春	1,219	4.572	0.313		
Q9目標達成	'20春	1,174	4.169	0.450	▼.012	0.24271
	'19春	1,219	4.181	0.357		
Q6教材・教具効果	'20春	1,171	4.444	0.500	▼.044	0.00592 **
	'19春	1,219	4.488	0.331		
Q11興味関心の向上	'20春	1,174	4.124	0.621	▼.080	0.00015 **
	'19春	1,219	4.205	0.447		

アンケートの回答率（回収数÷履修者人数）は、昨年度まで着実に向上していましたが、今回は大きく低下しました。回答率の平均は全学で42%、昨年度春学期の約半分です。対面での配布・回収からオンラインに切り替わったことで、アンケートへの回答を促しにくくなったことが大きく影響したものと想像します。回答率の分布は右図に示す通りですが、50%以上に達した授業は3分の1に過ぎません。中央値は33.3%に止まり、20%以下となった授業も4分の1を数えます。

しかしながら、このような状況下でも高い割合で学生の回答を得ている授業もあります。右図（下）に示す通り、履修規模（履修者人数を四分位数で区切って階級としました）によって回答率が決定的に左右されるというわけではなさそうです。履修人数50名以上の授業でも中央値は30%強と、13人以上27人以下の場合とほとんど変わりません。

回答率の高さと有意に相関しているのは、Q5 教員質問相談対応とQ1 教員目標明示の2つです。下図の通り、回答率80%以上（＝ほぼ昨年度並み）の授業は、両項目とも他階級の授業と比べて高い評価です。特に、Q5 教員質問相談対応は、回答率を目的変数とする重回帰分析（説明変数は全質問）で偏回帰係数に有意性が確認できました。オンラインの指導環境下にあっても学生の質疑・相談に応じていたことで、学生側で「授業を受けたという認識」が持てたため、授業評価アンケートに答える意欲も損ねずに済んだことが、高い回答率に繋がったと考えるのも、あながち的はずれではないように思われます。



単相関行列（学生の回答から直接算出）

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14
Q1 教員目標明示		.727	.604	.540	.551	.605	.424	.306	.426	.513	.457	.484	.063	.119
Q2 教員努力	.727		.606	.538	.634	.663	.445	.322	.439	.538	.499	.497	.070	.091
Q3 教員シラバス対応	.604	.606		.508	.492	.546	.380	.273	.369	.424	.374	.422	.061	.094
Q4 事前・事後学修指示	.540	.538	.508		.488	.501	.371	.315	.357	.408	.358	.389	.057	.212
Q5 教員質問相談対応	.551	.634	.492	.488		.592	.376	.317	.371	.464	.432	.431	.054	.068
Q6 教材・教具効果	.605	.663	.546	.501	.592		.445	.338	.470	.552	.539	.513	.052	.096
Q7 授業に臨む姿勢	.424	.445	.380	.371	.376	.445		.555	.583	.537	.477	.475	.213	.228
Q8 質問・調査努力	.306	.322	.273	.315	.317	.338	.555		.531	.444	.404	.388	.136	.247
Q9 目標達成	.426	.439	.369	.357	.371	.470	.583	.531		.588	.566	.476	.161	.168
Q10 学生の成長実感	.513	.538	.424	.408	.464	.552	.537	.444	.588		.673	.640	.119	.167
Q11 興味関心の向上	.457	.499	.374	.358	.432	.539	.477	.404	.566	.673		.599	.077	.150
Q12 有用性	.484	.497	.422	.389	.431	.513	.475	.388	.476	.640	.599		.106	.168
Q13 出席率	.063	.070	.061	.057	.054	.052	.213	.136	.161	.119	.077	.106		.064
Q14 平均学修時間	.119	.091	.094	.212	.068	.096	.228	.247	.168	.167	.150	.168	.064	

相関行列の中で上位 25%に含まれるセルに網掛を施してあります。相関係数は昨年度の春学期（下表）と比べて全体に値が小さく（相関が弱く）なっています。とりわけ、Q8 質問・調査努力と {Q3～Q5：教員シラバス対応、事前・事後学修指示、教員質問相談対応}、{Q9～Q12：目標達成、学生の成長実感、興味関心の向上、有用性} との相関（太枠部分）は低下が顕著です。この変化には、オンライン受講の中、先生からの指示やサポート、シラバスのガイドを支えに到達目標を達成できたケース／それでもできなかったケース、学習内容を理解させたその先を想像させることができたケース／できなかったケースが、昨年度よりはっきりと分かれたことが窺われます。

ご参考： 相関行列（2019 年度春学期）

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14
Q1 教員目標明示		.795	.695	.628	.677	.688	.561	.461	.516	.567	.522	.574	.165	.185
Q2 教員努力	.795		.727	.637	.732	.730	.585	.476	.524	.589	.550	.592	.179	.177
Q3 教員シラバス対応	.695	.727		.609	.667	.675	.528	.433	.480	.531	.487	.539	.174	.161
Q4 事前・事後学修指示	.628	.637	.609		.632	.608	.521	.512	.495	.489	.460	.502	.132	.290
Q5 教員質問相談対応	.677	.732	.667	.632		.713	.549	.482	.491	.566	.520	.568	.177	.175
Q6 教材・教具効果	.688	.730	.675	.608	.713		.594	.491	.544	.612	.588	.609	.163	.187
Q7 授業に臨む姿勢	.561	.585	.528	.521	.549	.594		.683	.701	.658	.614	.612	.302	.290
Q8 質問・調査努力	.461	.476	.433	.512	.482	.491	.683		.704	.617	.591	.553	.227	.359
Q9 目標達成	.516	.524	.480	.495	.491	.544	.701	.704		.699	.663	.611	.251	.309
Q10 学生の成長実感	.567	.589	.531	.489	.566	.612	.658	.617	.699		.747	.733	.244	.270
Q11 興味関心の向上	.522	.550	.487	.460	.520	.588	.614	.591	.663	.747		.717	.190	.281
Q12 有用性	.574	.592	.539	.502	.568	.609	.612	.553	.611	.733	.717		.245	.263
Q13 出席率	.165	.179	.174	.132	.177	.163	.302	.227	.251	.244	.190	.245		.111
Q14 平均学修時間	.185	.177	.161	.290	.175	.187	.290	.359	.309	.270	.281	.263	.111	

Q9 目標達成、Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上を目的変数、先生方からの直接的なコントロールが比較的容易と考えられる Q1～Q6 の各項目を説明変数にした重回帰分析の結果は下表の通りです。プラスの有意な偏回帰係数が確認されたセルに網掛を施してあります。目的変数をどれにするかによって優先的に改善を図るべき項目が異なることは、前回（2019年度秋学期）の分析でもお伝えした通りです。Q10 学生の成長実感、Q11 興味関心の向上では網掛の位置に前回との違いはありませんが、Q9 目標達成では前回と今回でかなり違ったものになりました。

目的変数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値
Q1 教員目標明示	0.105	0.0504	0.193	P < 0.001 **	0.087	0.1925
Q2 教員努力	0.185	P < 0.001 **	0.269	P < 0.001 **	0.291	P < 0.001 **
Q3 教員シラバス対応	0.093	0.0338 *	-0.004	0.9041	0.061	0.2678
Q4 事前・事後学修指示	0.050	0.1550	0.047	0.1174	-0.037	0.4032
Q5 教員質問相談対応	0.017	0.6703	0.084	0.0110 *	0.137	0.0048 **
Q6 教材・教具効果	0.223	P < 0.001 **	0.233	P < 0.001 **	0.436	P < 0.001 **
定数項	1.123	0.0000 **	0.677	0.0000 **	-0.275	0.1385

ご参考： 各説明項目の偏回帰係数（2019年度秋学期）

目的変数	Q9 目標達成		Q10 学生の成長実感		Q11 興味関心の向上	
	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値	観測値	有意性P値
Q1 教員目標明示	0.131	0.0274 *	0.208	P < 0.001 **	0.066	0.3095
Q2 教員努力	-0.003	0.9713	0.245	P < 0.001 **	0.355	P < 0.001 **
Q3 教員シラバス対応	0.036	0.4906	-0.126	0.0065 **	-0.148	0.0101 *
Q4 事前・事後学修指示	0.168	P < 0.001 **	0.015	0.6758	-0.110	0.0106 *
Q5 教員質問相談対応	0.050	0.3792	0.160	0.0016 **	0.250	P < 0.001 **
Q6 教材・教具効果	0.431	P < 0.001 **	0.422	P < 0.001 **	0.707	P < 0.001 **
定数項	0.527	P < 0.001 **	0.177	0.1139	-0.844	P < 0.001 **

教室での対面授業が行われていた昨年度の秋学期において、Q9 目標達成に最も大きく寄与していた Q6 教材・教具効果は、今回も寄与度トップであることには変わりありませんが、偏回帰係数は 0.431 から 0.223 へとかなり小さくなりました。代わって寄与度の上位に躍り出たのが Q2 教員努力「教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ」です。教材・教具効果で「教わったことは理解できた」としても、講評や助言などの手応えを得る機会が十分になれば、到達目標達成の実感が薄くなるのも想像に難くありません。また、授業情報（授業資料、参考資料配付と学修の視点提示）を提示するだけの「資料・課題揭示型」や一方通行になりがちな講義ビデオの配信で行われた「オンデマンド型」では、躓きを自力でリカバーできない（＝目標が達成できない）ときに「わからないことがあるのに先生方からは十分な支援がない」と感じてしまうのではないのでしょうか。全面的に対面授業に戻るのはまだ先のことになりそうです。暫くは如上の学生像を念頭に、フィードバックや学修支援に一層の注力が必要であると思われま

「教員による授業への取り組み」(Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6)

いずれの項目も昨年度まで着実に改善が積み上げられ、コロナ禍の今期も、中央値を見る限り、各項目に大きな後退はありません。前掲(p.3)の一覧表示した授業別集計値の平均でも、昨年度春学期と比べた場合、Q1～Q4は上昇、Q5は同水準を維持しました。Q6でも低下幅は大きくありません。着目すべきは授業間の差異拡大です。下表に見る通り、第3四分位数は全項目で上昇しながら、下方外れ値(ひげの下端)はQ4以外の5項目で低下しています。一部の授業では、対面からオンラインへの変化に十分な対応ができなかったようです。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満(%)
Q1教員目標明示	19春	4.75	4.58	4.38	3.84	4.9%
	19秋	4.78	4.60	4.42	3.88	3.5%
	20春	4.86	4.65	4.40	3.71	4.9%
Q2教員努力	19春	4.75	4.58	4.40	3.88	4.5%
	19秋	4.77	4.60	4.42	3.89	3.3%
	20春	4.88	4.65	4.37	3.62	6.3%
Q3教員シラバス対応	19春	4.71	4.57	4.39	3.89	4.3%
	19秋	4.75	4.58	4.40	3.88	2.9%
	20春	4.83	4.65	4.42	3.79	4.5%
Q4事前・事後学修指示	19春	4.71	4.49	4.25	3.57	10.3%
	19秋	4.75	4.54	4.30	3.64	8.3%
	20春	4.83	4.60	4.33	3.58	6.0%
Q5教員質問相談対応	19春	4.79	4.60	4.43	3.89	4.0%
	19秋	4.83	4.63	4.44	3.85	3.5%
	20春	4.97	4.67	4.33	3.38	8.4%
Q6教材・教具効果	19春	4.70	4.52	4.33	3.78	6.8%
	19秋	4.74	4.55	4.33	3.73	5.1%
	20春	4.80	4.50	4.23	3.38	11.7%

「学生による取り組みと成果」(Q7、Q8、Q9)

Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力では昨年度を上回る結果を得ていますが、Q9 目標達成では第3四分位数を除く各数値にはほとんど変化がありません。オンライン授業では、周囲(学生、先生、TA等)の助けは得にくく、自力で頑張るしかありませんが、学習方策や前提知識の不足などが、努力によって到達目標の達成を引き寄せることの妨げとなります。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満(%)
Q7授業に臨む姿勢	19春	4.63	4.43	4.23	3.65	7.4%
	19秋	4.67	4.45	4.23	3.59	5.9%
	20春	4.76	4.53	4.33	3.70	3.7%
Q8質問・調査努力	19春	4.46	4.25	4.00	3.31	22.1%
	19秋	4.53	4.27	4.00	3.21	21.6%
	20春	4.57	4.30	4.00	3.14	14.7%
Q9目標達成	19春	4.42	4.18	3.98	3.33	25.4%
	19秋	4.45	4.21	4.00	3.32	23.4%
	20春	4.46	4.17	4.00	3.31	24.0%

「授業に対する満足度（学びの成果）」（Q10、Q11、Q12）

Q10 学生の成長実感と Q12 有用性は、中央値以上の指標で昨年度を上回り、第1四分位数でも低下はありません。Q8 質問・調査努力の上昇から窺える「学びに向かう態度の改善」の中で、より実りの大きな学びが実現したのかもしれませんが。先生方がしっかりと用意してくださった学びの手順に添うだけの場合よりも、自学で苦勞する要素をある程度まで含んでいた方が、学びの成果（生きて働く知識・技能に加え、様々な能力資質の獲得）が大きくなると考え、Q8 の上昇→Q10 と Q12 の改善という連関を説明できるように思われます。

その一方で、Q11 興味関心の向上には中央値以下の指標に目立った低下が見られます。単元の学習内容の先にあるものを覗き込む機会の多くは、教科書から離れた先生方のコメントや学生同士の討論などを通じた「多様な思考への接触」にあると思います。オンライン環境に置かれ、そうした機会の確保が難しかったことがこの結果に繋がったものと拝察します。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満(%)
Q10学生の成長実感	19春	4.60	4.37	4.15	3.49	13.7%
	19秋	4.63	4.41	4.15	3.45	11.9%
	20春	4.70	4.45	4.15	3.34	12.5%
Q11興味関心の向上	19春	4.50	4.27	3.94	3.09	27.8%
	19秋	4.57	4.29	3.97	3.06	25.6%
	20春	4.55	4.20	3.78	2.61	31.9%
Q12有用性	19春	4.67	4.45	4.23	3.58	9.9%
	19秋	4.70	4.48	4.25	3.58	8.7%
	20春	4.78	4.50	4.25	3.46	9.7%

「出席率、平均学修時間」（Q13、Q14）

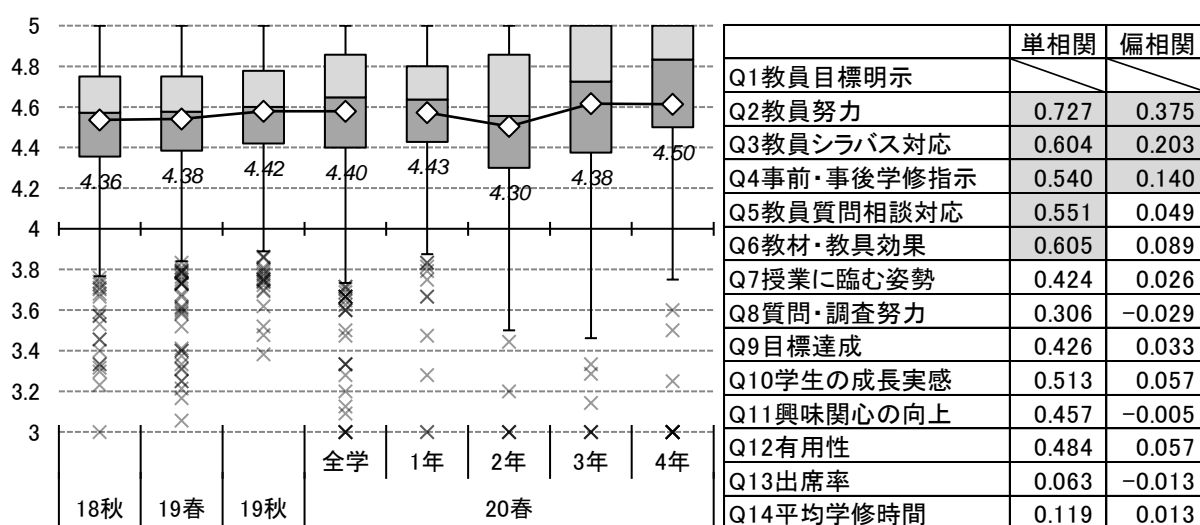
Q13 出席率、Q14 平均学修時間とも、昨年度までの実績値を大きく超えました。Q13 出席率は過年度も既に高い値が出ていましたが、「資料・課題掲示型」や「オンデマンド型」では、出席の概念そのものが従来と異なる点を踏まえて今回の変化をみる必要があると思います。Q14 平均学修時間の伸びは、これまでにない大きさです。一朝一夕の改善に特効薬がなかった項目ですが、コロナ禍が一気に学修時間を延伸させたこととなります。不明解消にも周囲に訊いたり先生に質問したりするのが容易でない中、自力で調べて解決する必要に迫られたことも延伸の要因の一部だと思いますが、他学での事例を踏まえて考えると、先生方から付与される課題が、例年より多かったこともまた原因のひとつに挙がるかもしれません。

		第3四分位数	中央値	第1四分位数	下方外れ値	4.0未満(%)
Q13出席率	19春	4.75	4.59	4.43	3.95	3.3%
	19秋	4.67	4.50	4.33	3.83	4.3%
	20春	5.00	5.00	4.86	4.64	0.6%
Q14平均学修時間	19春	3.39	3.00	2.66	1.57	92.0%
	19秋	3.51	3.04	2.68	1.42	87.5%
	20春	3.77	3.30	2.92	1.64	79.0%

■項目別集計結果分析

各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を直近4回分の追跡、および当期の学年別で表示した四分位図と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」の直下に表示した数字は第1四分位数です。これを下回った場合、キャッチアップが急務とお考えください。箱ひげ図の右側に配した相関係数の一覧では、単相関と偏相関の双方について、各々の相関行列で上位25%に含まれるケースに網掛を施してあります。因果の方向や第三要素の介在など考慮しなければならないこともありますが、基本的には、高い偏相関で結ばれる項目はそれぞれ別個に改善策を講じるより、セットで改善を考えた方がうまく運ぶケースが多いはずです。

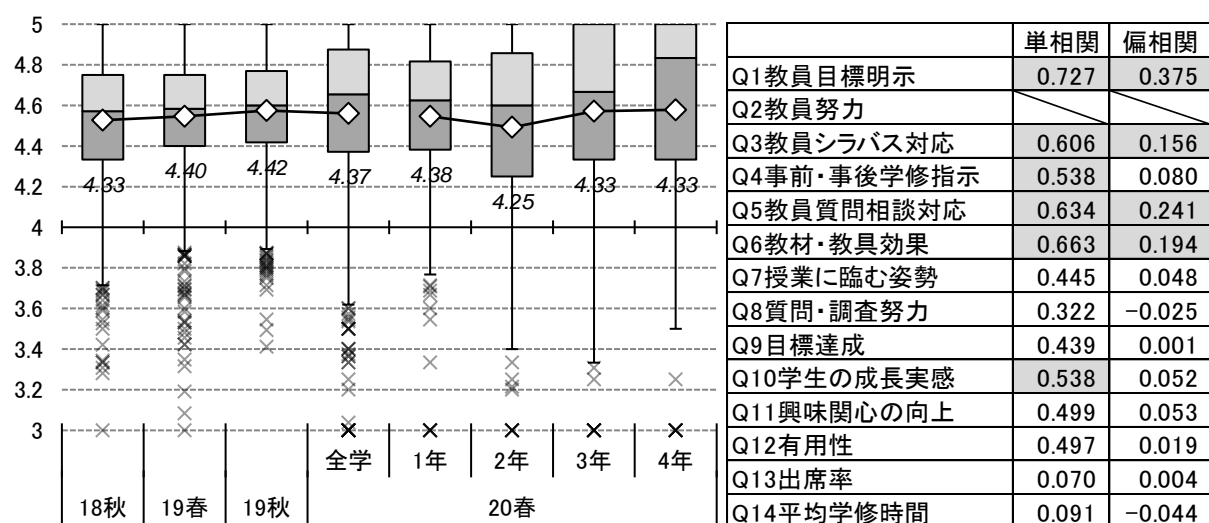
Q1 教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した



昨年度春学期との比較では、第1四分位数（箱の下端）以上の値は上昇しています。学生との間で到達目標を共有することの重要性は改めて申しあげるまでもありません。「目標とするところを学生ときちんと共有しておくことが個々の指導に込める意図を理解させ様々な場面での肯定的な評価に繋がる」のは、前回の報告書でデータを添えてお示した通りです。到達目標を伝えるには、「〇〇を学ぶ」「〇〇の理解を深める」といった記述よりも、学期を終えたときに学生が答えを導けるようになるべき問いをもって提示する方が确实性に勝ることも多々あります。

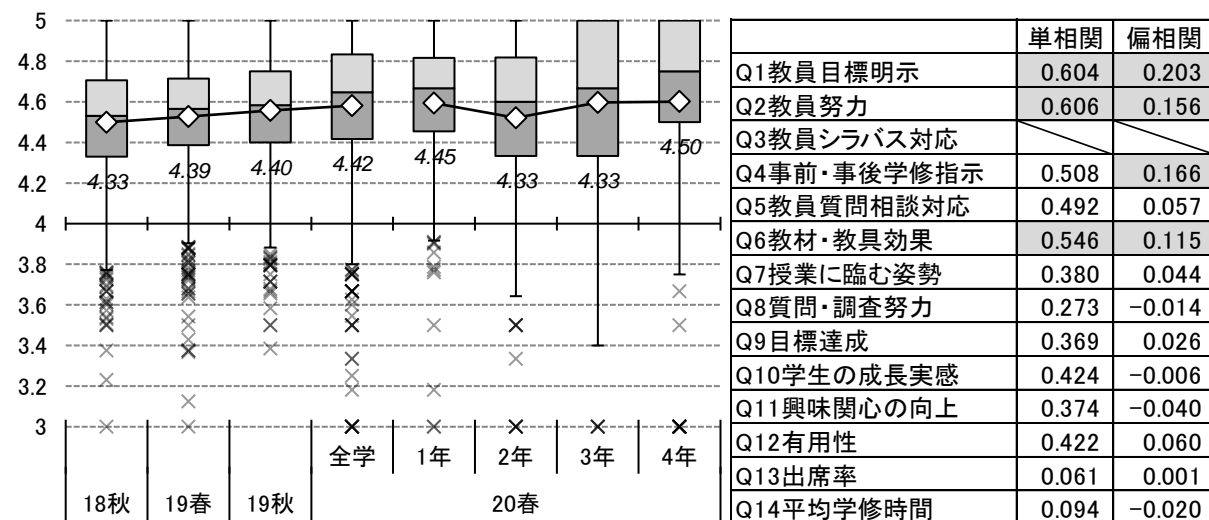
全体としては改善が積み上げられてきていますが、下方のひげはわずかに長くなり、「分布の尾」が伸びている点には注意が必要です。対面での指導機会が持てない中、授業を通して到達を目指すべきところを伝えるのにシラバスの記載だけを頼りにしてしまったところはないでしょうか。目標や計画の伝達を「シラバスに書いてあるから」と他の手段を積極的に講じないでいると、実際の授業や課題とシラバスとにズレが生じた場合（Q3の低下）に、学生は到達目標を見失うこと（Q1の低下）が想定されます。実際のところ、昨年度春学期と比較してみると、他項目との相関係数が総じて小さな値を示すようになった中で、Q3 教員シラバス対応との偏相関係数だけは 0.162 → 0.203 と大きくなっています。

Q2 教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ



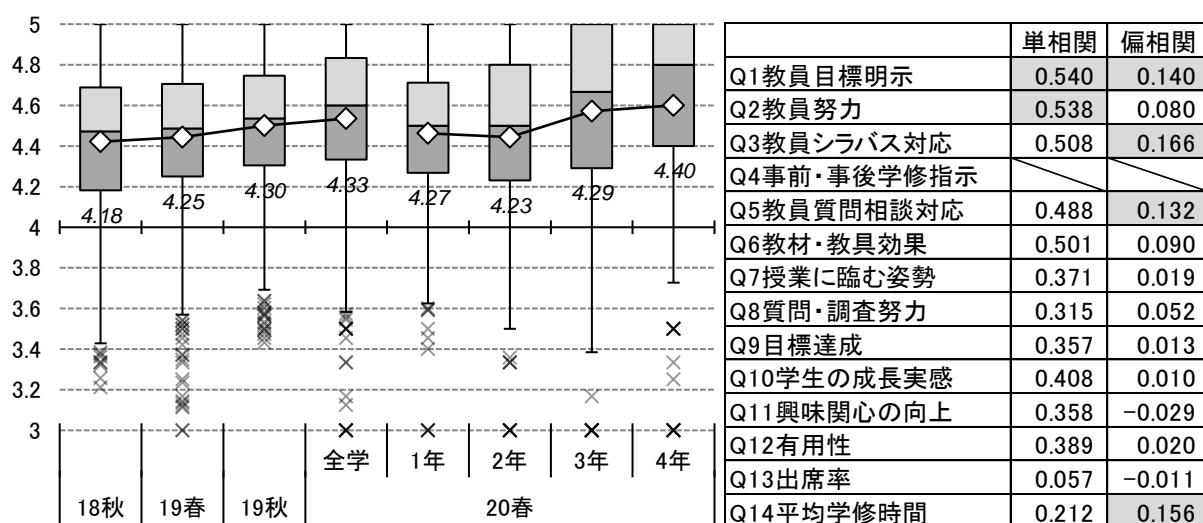
昨年度春学期と授業別集計値の平均値はほとんど変わりません（4.55→4.56）が、標準偏差は0.31→0.43 とかなり大きくなっており、授業間での差異が拡大しました。標準偏差の拡大幅は、Q6教材・教具効果の+0.17、Q5教員質問相談対応の+1.5に続く第3位です。先生方の意欲を学生が直接的に知ることはできません。わかりやすい授業を工夫し、丁寧に応じてくれることをもって推定しているのは、Q5、Q6 との間の高相関から想像されるところです。「資料、課題提示型」や「資料、課題提示型」では、学生の反応を観察しながらのわかりやすさの工夫や質問・相談への対応もままならず、どの授業形式を選択したかによって差が生じたかもしれません。

Q3 教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った

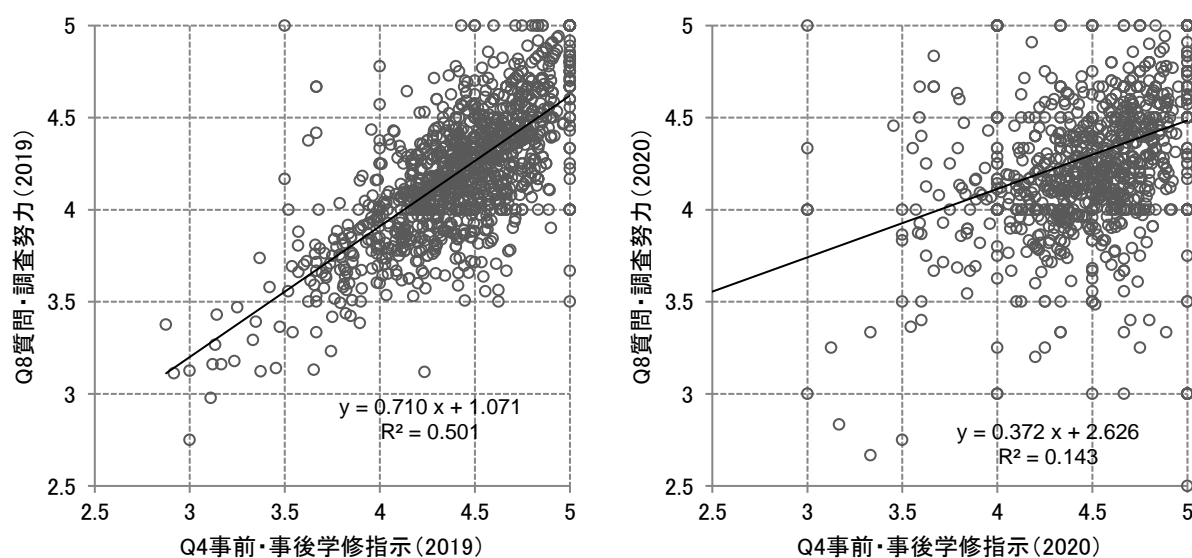


箱の位置は上端、下端、中央値ともに昨年度春学期を上回る値となっており、改善がさらに進んできた様子が見て取れます。相関行列では、Q5教員質問相談対応の網掛がなくなった（＝上位25%に含まれなくなった）ことが今回の特徴の一つです。シラバスの記載に沿った授業の進行は実現できても、質問や相談に応じる機会を十分に整えることまで手が回らなかったケースが多かったことが示唆されます。遠隔授業において双方向性をどう確保するかは喫緊の課題です。

Q4 教員は、この授業の事前学修・事後学修をするよう具体的に指示した

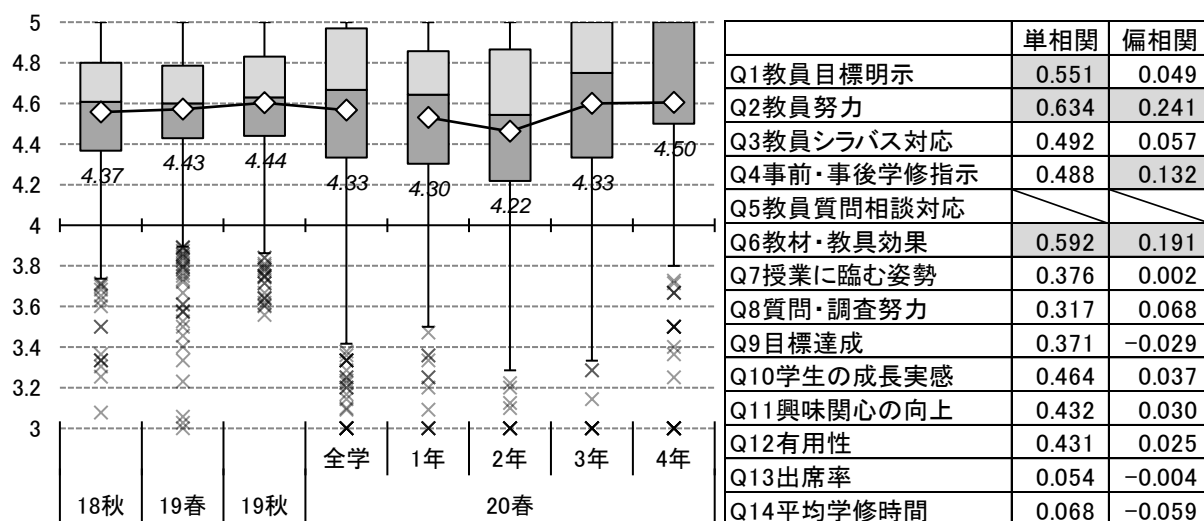


秋学期も含め、これまでで最も高い評価です。箱の下端も目に見えて高くなりました。課題や授業準備などの指示は以前にも増して徹底されてきた様子です。Q14 平均学修時間との間に比較的強固な偏相関が観測されるのは過年度同様ですが、Q8 質問・調査努力との相関は、昨年度春学期（単相関 0.512、偏相関 0.142）と比べてかなり小さくなりました。下の散布図で比べてみると昨年度との違いは明確です。回帰係数（近似線の傾き）も 0.71 から 0.37 に縮小しています。



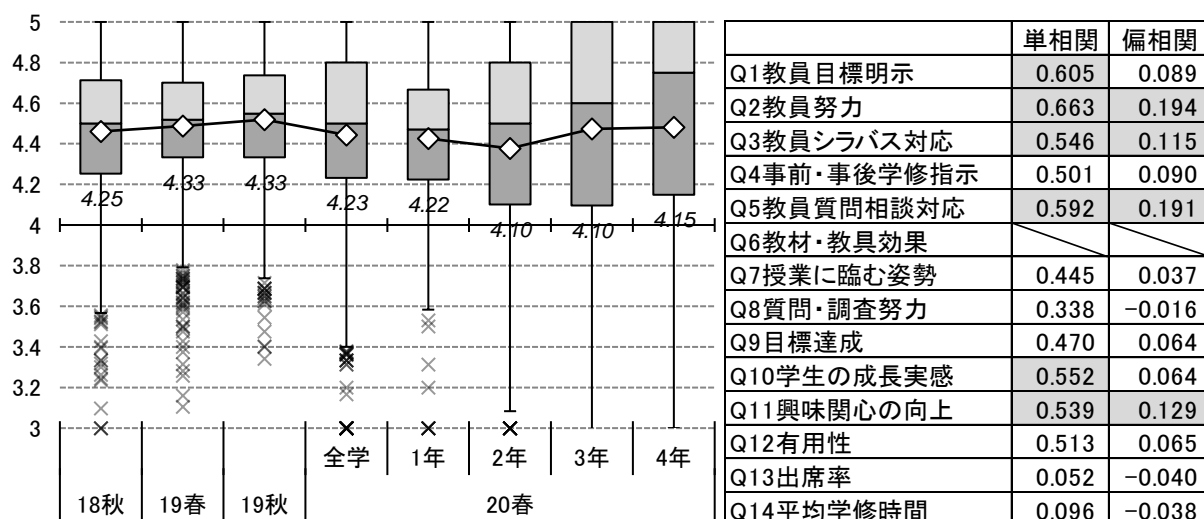
昨年度までは、明確な指示を出せば、学生はそれに応じて課題に取り組み、生じた疑問や不明を解消する行動（＝質問や調査）を取る傾向がありました。必要が行動の動機となるメカニズムは変わらないはずですが、今期においては、疑問・不明解消に向けた行動の発現を妨げる要因があったと考えられます。想定されるのは、質問するにも先生方に会えない／気軽に連絡が取れないという「遠隔授業ならではの環境」に起因する問題と、疑問や不明を解消するのに具体的に何を調べれば良いのかわからないという「学習方策の不備」の二つでしょうか。双方の解消を図ることで、「具体的な課題指示で質問・調査努力を引き出せる状況」を取り戻しましょう。

Q5 教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた



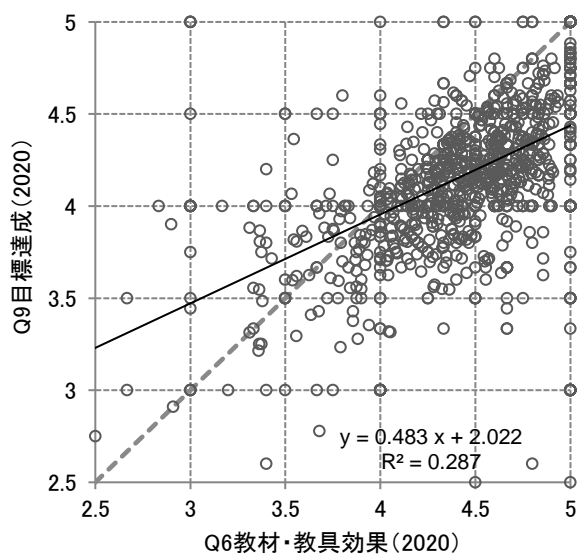
授業別集計値の平均は昨年度と全く同じ 4.57 ですが、標準偏差は 0.31 から 0.46 に拡大しています。箱の上端が高くなると同時に、下端が低くなりました。4.0 ポイントに届かない授業も昨年度春学期の 4.0% から 8.4% に増加です。授業情報（授業資料、参考資料配付と学修の視点）を提示しただけで二の手が打てなかった場合と、ライブ配信型やディスカッション型で学生の質問や相談に応じることができた場合とで大きな差がついたのは想像のできることです。前者タイプの授業を受講する中で、並行して履修した後者タイプを対比的に高く評価する心的傾向が生まれたこともあるかもしれません。秋学期から対面での学修・支援も始まりますが、引き続きオンラインが中心となりますので、高い評価を得た授業での取り組みの共有は急ぐべきと考えます。

Q6 教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった

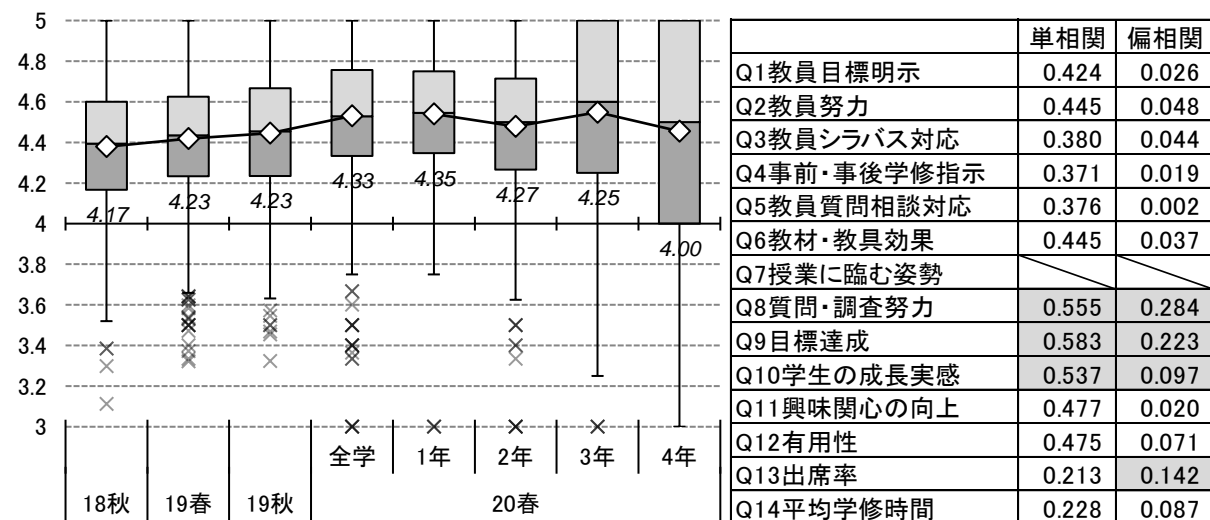


授業間の差異が拡大したことに加え、平均値や中央値にも低下が見られます。教室での対面授業で使い慣れていた教具が使えなかったことの影響は小さくなかったと思われませんが、一方で、箱の上端には大きな上昇が見られ、新しい環境下での授業法を早くも確立している授業があるようです。また、相関行列を見ると、昨年度まで網掛が掛かることがなかった Q11 興味関心の向上

で相対的に強固な相関が生じています。教室内での対話（先生との問答や学生同士の議論など）が乏しくならざるを得なくなった授業では、教材そのものに興味や関心を刺激する機能を頼ることになったことが、変化の背景にあると思われます。Q5 教員質問相談対応との強い相関は今期も観測されました。質問や相談を通して学生の躓きや疑問を把握することが、教材の内容や教具の使い方の工夫の起点となることには、対面でも遠隔でも変わりがないということだと思います。なお、Q9 目標達成との相関はやや弱くなっています。昨年度までは授業別集計値で散布図を作ってみると、Q6 と Q9 が同値となる基準線（右図中のグレーの破線）の上側に分布する授業はほとんど観測されず、Q6 教材・教具効果の評価が Q9 目標達成の上限を概ね決定している様子でしたが、今期のデータでは少数ながら一定数の授業が基準線の上に分布しています。回答率の低下による誤差もあるでしょうが、Q8 質問・調査努力や Q14 平均学修時間の改善も踏まえると、近似線を大きく超えたところに位置する授業では多くの学生が、授業理解に多少の支障があってもそれを自力で乗り越えたとも考えられます。

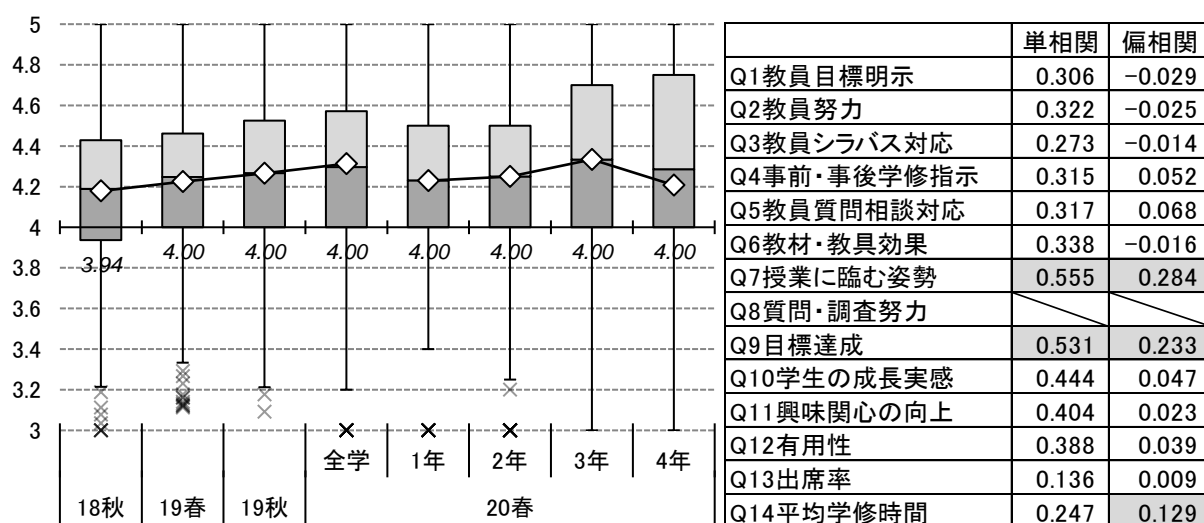


Q7 私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ



昨年度春学期と比べて大きく評価を伸ばしています。苦勞の多い学修の中で、学生はこれまで以上に頑張ったとの自己認識を持っていますので、その気持ちを汲んだ指導や声かけをしていきたいところです。Q8 質問・調査努力との偏相関は、相関行列全体での数値低下がある中で、昨年度春学期の 0.276 を超える大きな値です。不明の解消に向けた行動を取ったことをもって真剣に授業に臨んだとの認識を持つに至ることには、昨年度までと今期とで違いはなさそうです。

Q8 私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた



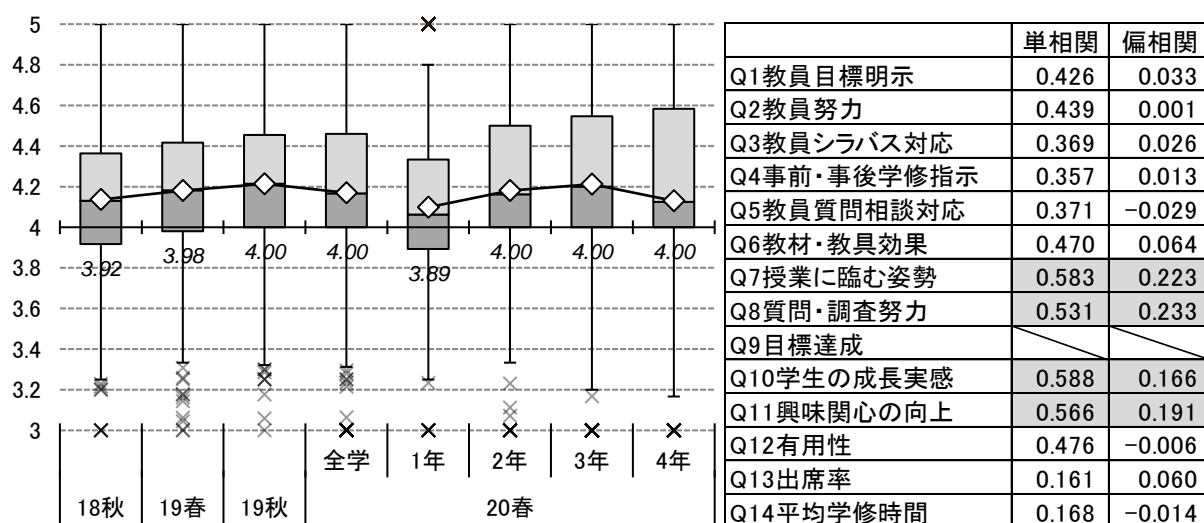
平均値は続伸しており、中央値も昨年度春学期を 0.05 ポイント上回ります。しかしながら、Q7 授業に臨む姿勢との間には依然として 0.2 ポイントほどの差があり、箱の下端の位置ではさらに大きな違いになっています。先生が用意してくれたものを真面目に受け止める「インプットに素直に応じる」ことに止まらず、必要な知を得るために「インテイクの行動を取る」ところまで踏み込んで学びに向かう学生が、今期の体験を経てさらに増えてくれることを期待いたします。

Q8 質問・調査努力を目的変数、Q1～Q6 の各項目を説明変数とした重回帰分析 (右表: $R^2=0.157$) の結果では、全ての説明変数の偏回帰係数に有意性が確認できるものの、値はどれもそれほど大きくありません。最も大きな偏回帰係数が算出された Q4 事前・事後学習修指示でも 0.151 に止まりますので、Q1～Q6 の改善だけでは、Q8 質問・調査努力を押し上げる効果は限定的だと思われます。

説明変数	Q8 質問・調査努力	
	観測値	有意性P値
Q4 事前・事後学修指示	0.151	P < 0.001 **
Q6 教材・教具効果	0.136	P < 0.001 **
Q5 教員質問相談対応	0.115	P < 0.001 **
Q1 教員目標明示	0.057	P < 0.001 **
Q2 教員努力	0.051	P < 0.001 **
Q3 教員シラバス対応	0.029	0.0175 *
定数項	0.527	P < 0.001 **

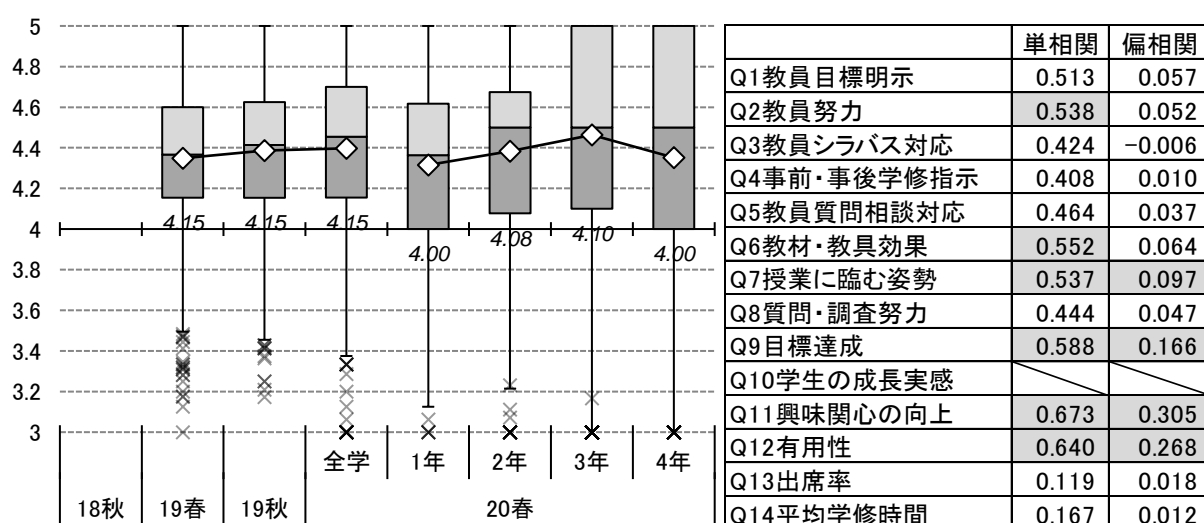
わからないことを質問したり調べたりしてその解消に努める姿勢を涵養するには、「学び終わったときに改めて課題／問いに向き合い、自分の答えをきっちり仕上げることの習慣化」を図ることが有効かもしれません。答えを仕上げようとすれば自ずと残っていた不明の所在に気づきますし、それを解消する行動を取らないことには答えは仕上がりにません。また、それなりの答えを作ったことで満足されてしまっただけでは、不明を解消し、疑問を掘り下げる行動も中途半端なものになりかねません。クラスの学生が作った答案から特に優れたものをピックアップしてシェアすることで、彼我の違いから自らの掘り下げの不足に気付かせるのも効果が期待できる取り組みです。実際に同様の手法で効果を上げている実践もあります。相関行列を見る限り、この項目の改善が進めば、Q9 目標達成や Q14 平均学修時間の改善にも小さからぬ成果が表れるものと思われます。

Q9 私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）



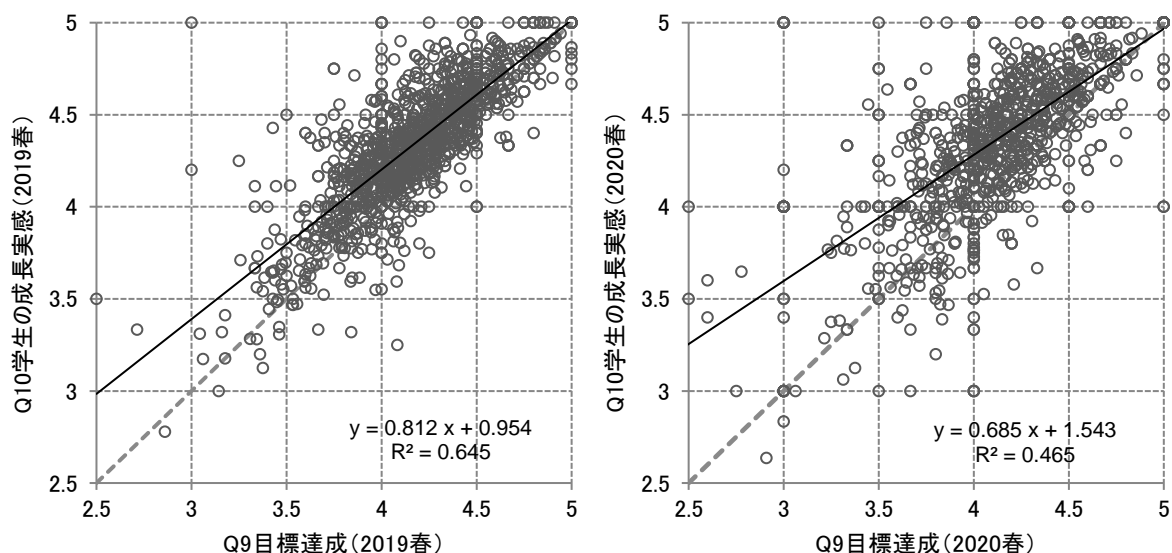
全学での授業別集計値の平均は昨年度春学期とほとんど変わりませんが、学年別の変化を確認してみると、1年：昨年度春学期 4.15→今期 4.10（t検定 P 値=0.06）、2年：同 4.20→4.18（P=0.21）、3年：同 4.14→4.21（P=0.01）、4年：4.12→4.13（P=0.39）という結果です。1年は平均の低下に有意傾向があり、3年は有意に上昇、2年と4年は有意差なしです。3年生ともなれば、大学の授業に慣れて勉強の仕方が身に付いており、遠隔授業という環境から負の影響を大きく受けずに自力で到達目標を達成できるケースが多かったということかと思われます。逆に1年は苦労が多いわりに実りの実感が希薄なスタートだったようです。入学直後の半年に学びの成果を積み上げられなかったことで今後の学修に土台が整っていない可能性があります。今後の指導ではレディネスを例年ほど高く見積もらず、より丁寧な指導を心掛ける必要があります。

Q10 私は、この授業を受けて、気づきや新しい物の見方を得るなど、自身の成長を実感することができた

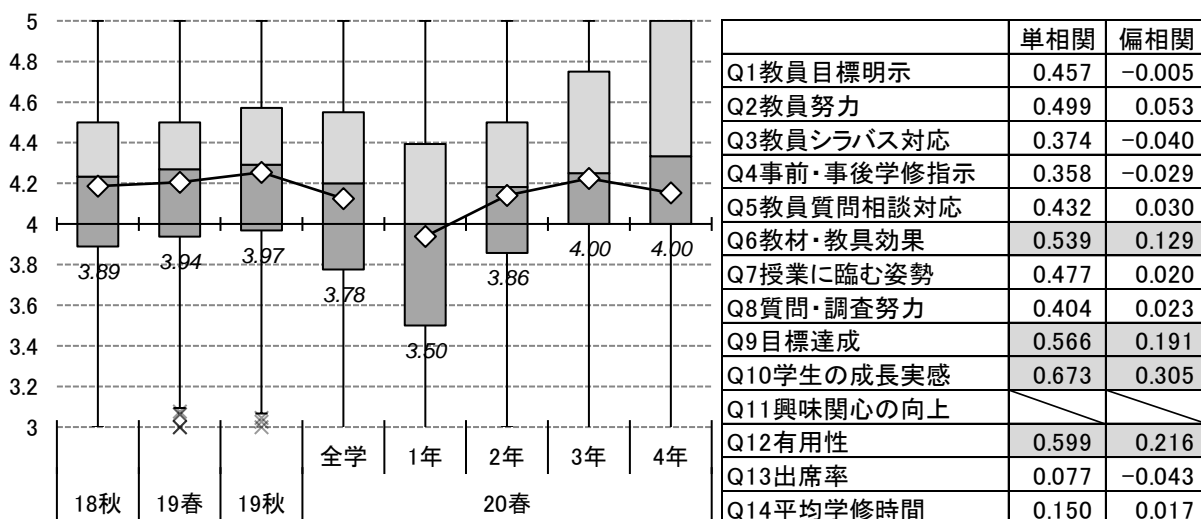


昨年度春学期と比べ、箱の下端に低下は見られず、中央値以上の指標は上昇しました。Q11 興味関心の向上、Q12 有用性との強い相関は昨年度と同様です。気づきや新しい物の見方を得ることが

興味の喚起と有用性の認識に直結すると考えられます。また、Q9 目標達成との相関も比較的強固です。Q9 目標達成が Q10 学生の成長実感の下限値を概ね決める様子（下左図参照）は昨年度も確認できましたが、今期（下右図）も同様の傾向が見られます。両者の差（Q10-Q9）の平均は+0.23（四分位範囲は±0.0～+0.4）であり、マイナスとなった（＝基準線〔座標面を斜めに分けるグレーの破線〕の下側に位置）授業は全体の 13.9%に過ぎません。

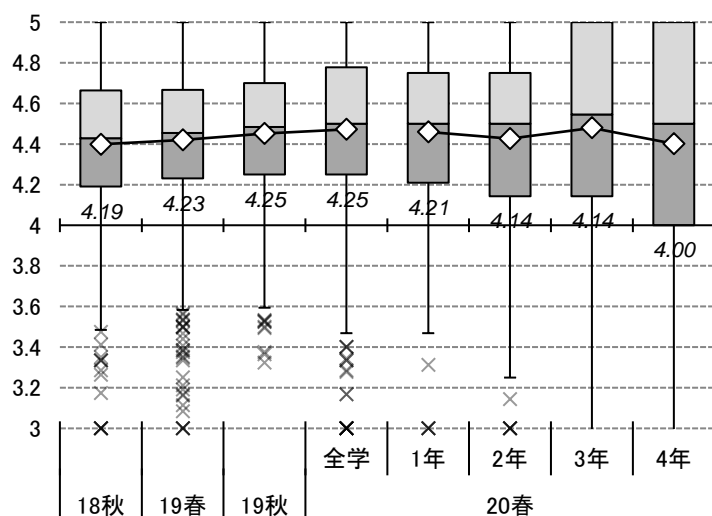


Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった



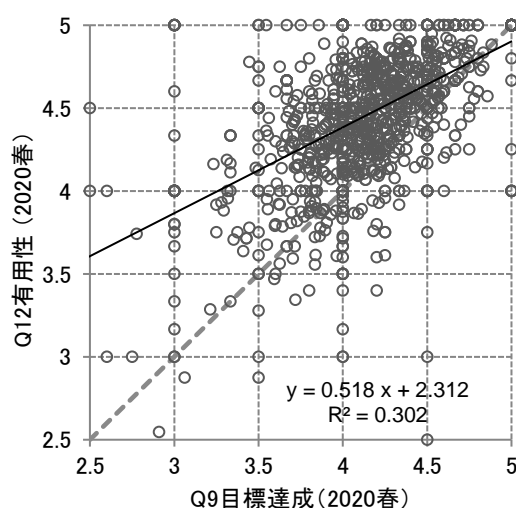
前回までの結果と比べて、かなり大きな低下が見られます。科目の内容の面白さを認識するよりも先に学びにくさが強く感じられてしまい、両者がないまぜになっているのかもしれませんが。1年の低下は顕著で、平均値は昨年度春学期（現2年の1年時）の4.10から3.94に落ち込んでいます。今後の学修に向けた意欲にも影響が懸念されます。高相関で結ばれるQ10の質問文にある「気づき、新しい見方、自分の成長」に主眼を置いた指導で巻き返しを図りましょう。他方、低下幅が小さいのは3年です。Q9で推測したのと同じ理由によるのかと思われます。4年は平均値こそ低下（4.23→4.15）していますが、中央値はほとんど変わらず、箱の上端は高まりました。

Q12 私がこの授業で得たものは、今後の学修活動や人生に生きる

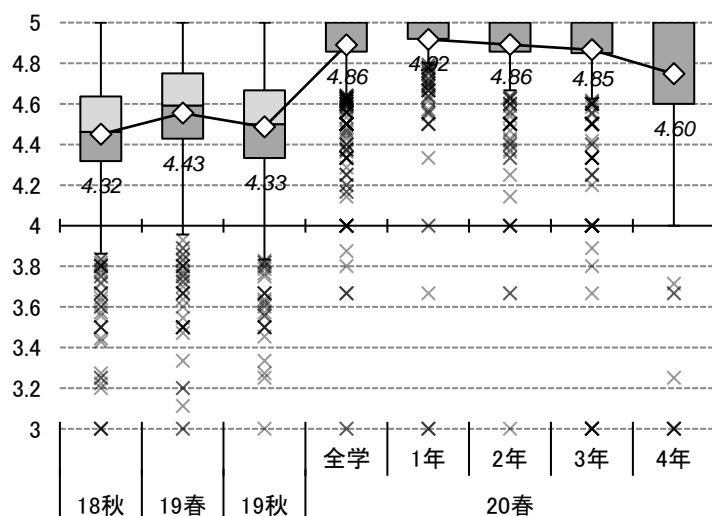


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.484	0.057
Q2教員努力	0.497	0.019
Q3教員シラバス対応	0.422	0.060
Q4事前・事後学修指示	0.389	0.020
Q5教員質問相談対応	0.431	0.025
Q6教材・教具効果	0.513	0.065
Q7授業に臨む姿勢	0.475	0.071
Q8質問・調査努力	0.388	0.039
Q9目標達成	0.476	-0.006
Q10学生の成長実感	0.640	0.268
Q11興味関心の向上	0.599	0.216
Q12有用性		
Q13出席率	0.106	0.023
Q14平均学修時間	0.168	0.042

コロナ禍での厳しい状況にもかかわらず、小幅ながら平均値は着実に上昇しています。箱の下端も前回と同じ4.25です。Q9 目標達成との相関は、回答率の問題もあってか、昨年度春学期よりさらに弱くなりましたが、授業の到達目標を達成できない限り、身につけた知識や技能には不足が残り、「今後の学修活動や人生に生きる」ものにならないはず。Q9 目標達成の評価が Q12 有用性の下限を決定する様子は昨年度ほど顕著ではありませんが、今期（右図）も似た傾向にあることが確認できます。



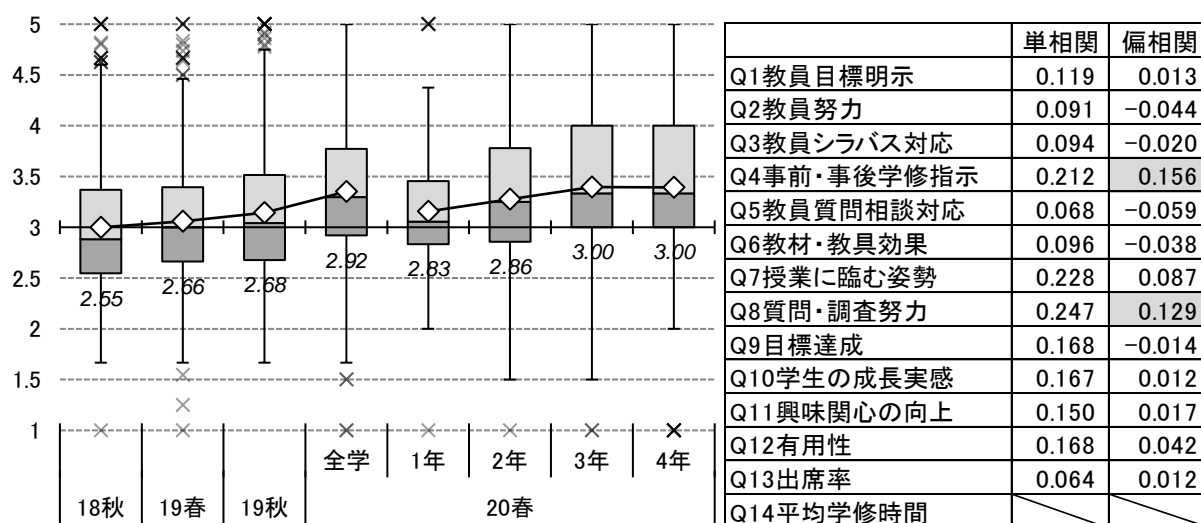
Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	0.063	-0.013
Q2教員努力	0.070	0.004
Q3教員シラバス対応	0.061	0.001
Q4事前・事後学修指示	0.057	-0.011
Q5教員質問相談対応	0.054	-0.004
Q6教材・教具効果	0.052	-0.040
Q7授業に臨む姿勢	0.213	0.142
Q8質問・調査努力	0.136	0.009
Q9目標達成	0.161	0.060
Q10学生の成長実感	0.119	0.018
Q11興味関心の向上	0.077	-0.043
Q12有用性	0.106	0.023
Q13出席率		
Q14平均学修時間	0.064	0.012

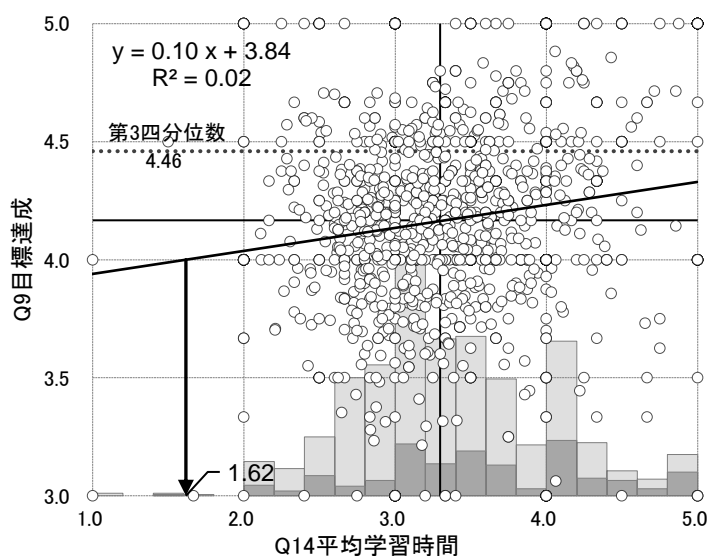
昨年度までとは「出席」の概念が異なるため、直接的な比較はできませんが、全学、各学年とも中央値が5.0に張り付くなど、非常に高い結果であり、現状に問題はなさそうです。

Q14 この授業のための事前学修・事後学修に何時間取り組みましたか



前述 (p. 9) の通り、昨年度を大きく上回る結果を得ています。昨年度春学期を基準にした全学での授業別集計値の平均値の伸びは+0.29 ですが、1 年が+0.18 (2.98→3.16)、2 年が+0.33 (2.95→3.27)、3 年が+0.40 (3.00→3.40)、4 年が+0.38 (3.01→3.39) と、相対的に見ると1 年の上昇幅が小さめです。Q9 目標達成での「1 年は平均の低下に有意傾向あり、3 年は有意に上昇、2 年と4 年は有意差なし」と照らし合わせて考えてみると、1 年の中には「自力で課題を処理するには学習方策等の不足があって目標達成の見込みも立たず、何にどう取り組めば良いかわからずに勉強の手も止まってしまった」というケースが想像されます。2 年も学修時間の伸びに対して Q9 目標達成に有意な変化なしですので、学びの方策にはまだ不足があったのかもしれない。

Q9 目標達成との相関は以前から弱め (0.3 前後) でしたが、今期はさらに希薄なものになりました。単相関ですら 0.17、偏相関に至っては限りなくゼロに近いマイナス値です。時間をかけて頑張れば何とかなるところを超えたレベルで学修上の障害があった授業も少なくなかったものと推察します。右下図において近似線から大きく下方に離れた授業では、学生の目標達成を支援する活動 (質疑応答や学び方のガイドなど) の充実を図る必要があります。近似線からの距離が 0.23 以上の場合、「マイナスの残差の大きさ」で上位 25% に含まれます。座標面は縦軸・横軸それぞれの中央値で切り分けたてありますが、第 4 象限 {Q14 ≥ 中央値、Q9 < 中央値} に位置するならば、「課題の量が多すぎてじっくりと解決に取り組む余裕がなかった」という可能性も疑ってみて下さい。



参考資料 1

実施率／回収率

参考資料1-1. アンケート実施率(回収率)科目区分別

■学部1174科目

科目区分	授業数	実施数	実施率
01 I類(学びの窓口)	301	18	100.0%
04 I類(社会創造型)	304	74	100.0%
10 人間学部共通	310	1	100.0%
13 心理社会学部共通	313	15	100.0%
15 公共政策学科	317	2	100.0%
19 社会共生物学部共通	319	3	100.0%
20 第Ⅱ類科目(学部共通)	320	1	100.0%
05 I類(探究実証型)	305	123	98.4%
11 人間科学科	311	56	96.4%
15 歴史学科	315	111	96.4%
08 人間環境学科	308	24	95.8%
12 臨床心理学科	312	50	94.0%
14 人文学科・日本文学科	314	106	93.4%
21 第Ⅲ類科目	321	42	92.9%
06 仏教学科	306	139	92.8%
18 地域創生学科	318	114	89.5%
09 教育人間学科	309	49	87.8%
16 表現文化学科	316	128	87.5%
07 社会福祉学科	307	86	86.0%
02 I類(学びの技法)	302	127	84.3%
03 I類(留学生科目)	303	5	60.0%
計	1274	1174	92.2%

■大学院69科目

科目区分	授業数	実施数	実施率
02 院社会福祉学専攻(修士)	305	3	100.0%
07 院比較文化専攻(修士・博士)	307	4	100.0%
01 院史学専攻(修士・博士)	302	11	81.8%
08 院仏教学専攻(修士・博士)	301	31	67.7%
03 院宗教学専攻(修士・博士)	308	5	60.0%
05 院臨床心理学専攻(修士)	304	16	56.3%
04 院国文学専攻(修士・博士)	303	3	0.0%
計	82	69	84.1%

参考資料1-2. アンケート実施率(学部) 2005年度春学期～2020年度春学期

年度	学期	回収率	回収数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217
2017年度	秋学期	92.6%	1096	1183
2018年度	春学期	97.8%	1183	1209
2018年度	秋学期	95.1%	1098	1154
2019年度	春学期	95.7%	1219	1274
2019年度	秋学期	96.2%	1127	1172

2020年度	春学期	92.2%	1174	1274
---------------	------------	--------------	-------------	-------------

参考資料 2

自由記述回答
頻出キーワード分析

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に

「この授業において、あなた自身の『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じたのはどのような点でしたか。また、この授業において改善できる点があればお書きください。」

として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出する単語を調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1として出現頻度の上位10ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2による前回と前々回（＝前年同期）データに加え、今回の全学平均を表示することとしています。今回は今年度春学期からの質問文の変更があったため、前々回は掲載がありません。

分析上の主なポイント

質問文は前半の「『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点」（効果点）と後半の「改善できる点」（改善点）に分かれます。そこで記述内容により効果点と改善点に分けて集計を行いました。分析上の主なポイントは下記の通りです。

- (1) 質問の前半に対する回答（効果点）と後半に対する回答（改善点）を分けて集計・分析を行っています。
- (2) できるだけ具体的なキーワードに分解・集計しています。例えば「分かりやすい」は「○○で分かり易かった」「△△△をしてくれたので分かり易かった」など、分かり易い理由となった「○○○」「△△△」を独立したキーワードとして集計。理由が明確でないものを「分かりやすい」として残しました。
- (3) 当該授業そのものがテーマとしている項目は、キーワードとして出現数が高い場合でも全学共通の課題や効果点とはなりえないため、対象キーワードから除外しました。

※例：「レポートの書き方がよく分かった」はキーワード「レポート・課題」からは除外。
キーワード「レポート・課題」には「レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった」などに限定して仕分け・集計。

今回の特徴

1. 新型コロナの感染拡大を受けて全授業がオンラインで実施されました。このためオンライン授業自体について、あるいはその実施方法に関する記述が多くみられた一方で、従来の対面授業においてよく見られた効果点、改善点も継続して確認されています。そこでキーワードとしてはオンライン授業そのものに対する全般的な意見は「オンライン授業」としてまとめ、その他の具体的な内容についてはできる限り個別のキーワードとして分類集計しました。
2. 回答総数は昨年（2019年）春学期の35,144件から17,158件と半減しました。授業アンケ

ートの実施が授業中ではなく学生の自主性に任せた遠隔実施であったことが影響したと思われませんが、一方で自由記述回答の記載数は昨年春学期の4,025件から4,618件へと逆に増加しました。記載率(=自由記述記載件数/回答総数)にして11.5%⇒26.9%への大幅増でした。

効果点と改善点

1. 効果点(『理解が深まった』『学ぶ意欲が高まった』と感じた点)

効果点は今までと様子が大きく変わり、従来は10位以下に登場する程度であった「**グループワーク**」が1位(182件)となりました。コロナ禍で学生どうしの交流がなかったことが影響していることは想像に難くありませんが、グループディスカッションや会話、意見交換の機会が持てたことを高く評価し、学習意欲につながったとの意見も多くみられました。

2位は172件の「**レポート・課題**」(レポート、課題の出し方や評価方法がよかった/レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった)でした。本キーワードは前回(2019年秋学期)の分析において、同年春学期の15位から5位に大きく躍進したことに注目をさせて頂きましたが、今回はさらに件数を伸ばして2位となりました。オンライン授業を機にさらに改善が進んだとみてよさそうです。同率の2位キーワード「**総合評価**」は、「充実していた、有意義だった、理解が深まった」などの漠然とした記述をまとめたものです。4位は「**オンライン授業**」です。記述内容としては「オンデマンド方式(動画配信)のため、あとから(好きな時に)見直すことができよい」「リアルタイムで授業を受けられてよい」「オンライン授業でよかった/進め方がよかった」など、さまざまではありますが、(実際にはzoomなどを利用したリアルタイム授業や動画配信、資料配付等の形式が取られたとお聞きしています。)肯定的に捉えた意見が167件と後述する否定的意見103件を大きく上回ったことは注目に値します。5位は常連の「**丁寧**」(163件)でしたが、この1位から5位までの件数が182件~163件と拮抗し、トップグループを構成する形は今までにないものです。6位「**動画・画像**」以降のキーワードは概ね常連ですが、15位の「**事前事後学修**」(予習、復習をすることで理解が深まった/予習、復習しやすかった)は今回新しく入ったキーワードです。質問14の事前事後学修時間を問う質問での全学平均でも大きく伸びたことは、結果分析報告本文にも記載の通りです。

2. 改善点(改善できる点)

1位・2位常連の「**レポート・課題**」が今回も1位となりましたが、今までと様子が異なるのは2位以下を大きく引き離す155件という件数です。「レポート・課題」は上記の効果点で取り上げた通り、昨年から急速に改善が進んだ項目です。このため改善が進んだ科目・授業との比較・反動が、それが進んでいない科目に対する改善要求としての件数を多くしたという仮説も考えられそうです。

第2位は「**オンライン授業**」(103件)で「動画配信してほしかった/動画配信期間が短かった/ほかの方法(ツール)がよかった/課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしかった/オンライン授業の進め方がよくなかった/対面の授業がよかった」など、ある程度予想できる内容の意見がほとんどです。なお、オンライン授業に関する改善点の意見はこれ

とは別に第4位の「通信・機器」(43件)を抽出しています。改善課題としては難しい問題を含んでいますが、少なからずある障害として認識が必要です。

3位の「質問」(47件：質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対する回答に満足できない／質問フォームについての要望)は、去年は全くランクインしていなかった項目です。これもオンライン授業による一面を表していると考えられそうです。

5位以下は昨年からの常連キーワードが多くを占めますが、出現率で見ると「説明・解説不足」「グループワーク」「動画・画像」「シラバス」などが大きくなっています。

改善が進めば「効果点」になる可能性もある、改善点にも効果点にもリストアップされるキーワードは以下の通りです。「効果点」に掲載された意見の中に具体的な改善行動のヒントを探すことができそうです。

- 「レポート・課題」(改善点1位/効果点2位)
- 「オンライン授業」(改善点2位/効果点4位)
- 「質問」(改善点3位/効果点9位)
- 「プリント・資料」(改善点7位/効果点8位)
- 「説明・解説(不足)」(改善点8位/効果点7位)
- 「グループワーク」(改善点9位/効果点1位)
- 「動画・画像」(改善点10位/効果点6位)

なお、学部、回答人数帯、学年により、出現数・率に大きな違いがありますので、引き続きそれぞれの集計カテゴリー別の改善行動が重要となります。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

※1 キーワードと集計内容について

キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードに集約してカウントしています。各キーワードに含まれる「回答内容」については、「効果点」「改善点」それぞれの集計の最初のページ「頻出キーワード【全学】」の下段に掲載された一覧表を参照ください。

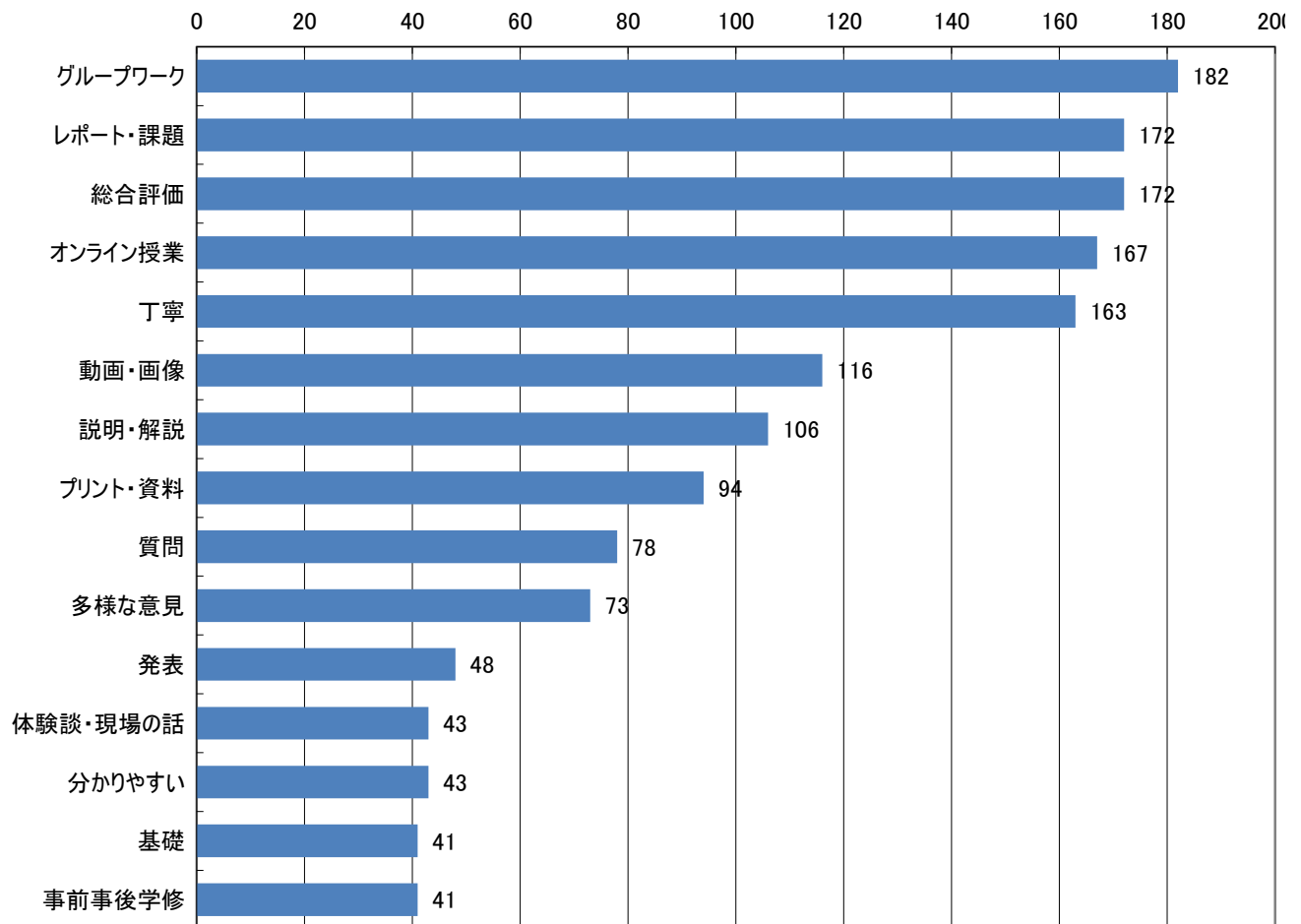
※2 出現率について

「出現率前回比較 全学」下段の説明を参照ください。

【効果点】

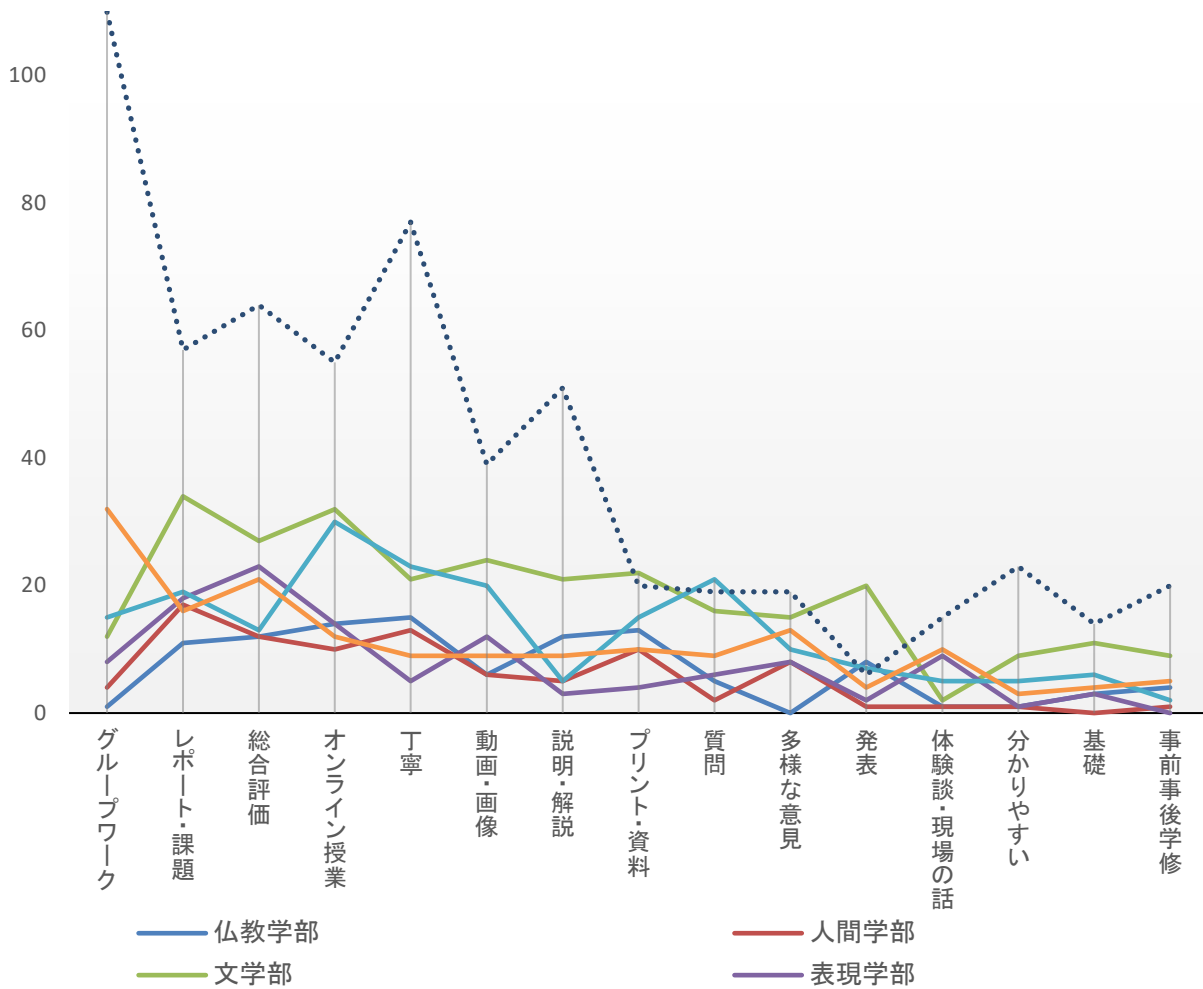
「理解が深まった」「学ぶ意欲が高まった」と感じた点

自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【全学】

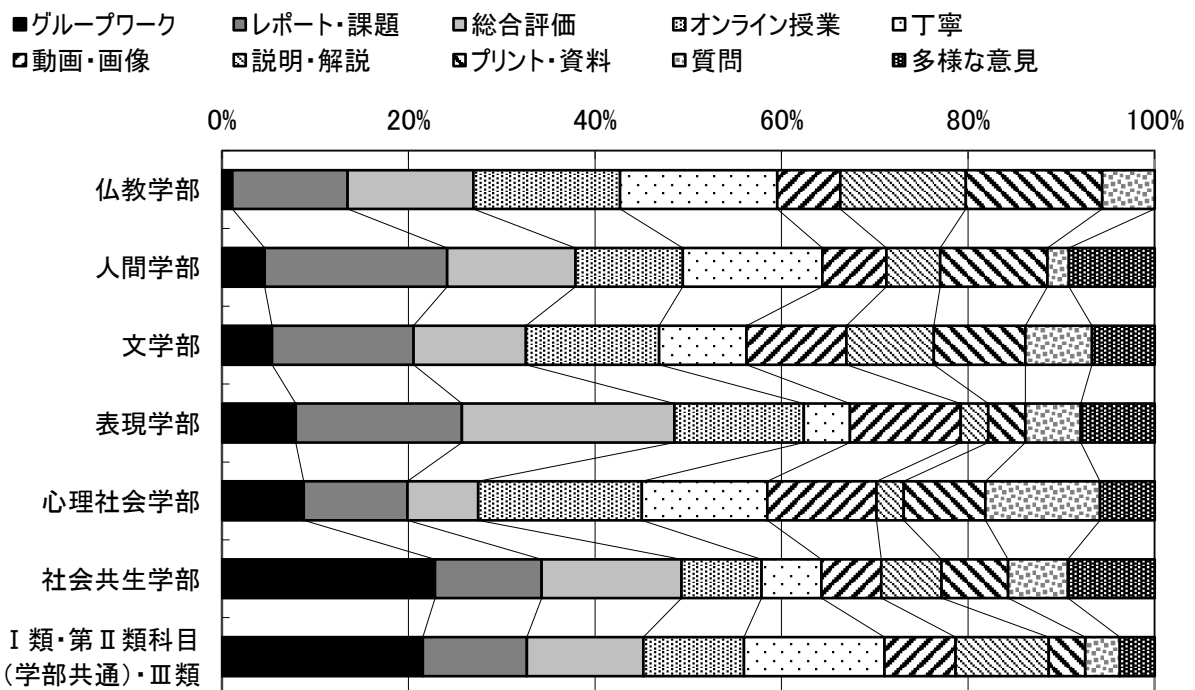


キーワード	主な内容	出現数
グループワーク	グループワークでのディスカッション、会話、意見交換をする機会を持ててよかった／グループワークが学習意欲につながった／他人の意見を聞けて良かった	182
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法がよかった／レポート、課題に取り組むことによって、理解が深まった ※「レポート、課題について具体的に説明」は「実例・具体的」に分類	172
総合評価	おもしろかった、楽しかった、充実していた、有意義だった、興味を引かれた、理解が深まった、知識を得られた	172
オンライン授業	オンデマンド方式（動画配信）のため、あとから（好きな時に）見直すことができている／リアルタイムで授業を受けられてよい／オンライン授業でよかった／進め方がよかった／音声ファイルがあっよかった	167
丁寧	丁寧な授業、解説、プリント、資料、教科書、テキスト、教材、パワーポイント、スライド、添削、質問対応	163
動画・画像	・動画、画像で分かりやすい／理解が深まった	116
説明・解説	（授業について）説明、解説が分かりやすい ※「具体的な説明、事例による説明が分かりやすい」は「事例・具体的」に、「丁寧な説明、解説」は「丁寧」に分類	106
プリント・資料	プリント、資料が分かりやすい／充実していた／理解が深まった ※「丁寧なプリント、資料」は「丁寧」に分類	94
質問	質問しやすい、答えてくれた ※「丁寧な質問対応」は「丁寧」に分類	78
多様な意見	多様な意見を聞けて、意見交換ができて、ためになった、身についた、理解が深まった	73
発表	発表を行って（発表を見て）、ためになった、身についた、理解が深まった ※「グループで発表できてよかった」は「グループワーク」に分類	48
体験談・現場の話	・現場の話や体験談を聞くことによって理解が深まった ・先生の経験談、体験談を聞くことによって理解が深まった	43
分かりやすい	授業が分かりやすい ※分かりやすい理由の記載があるものは各項目に分類	43
基礎	基礎を学べて、ためになった、身についた、理解が深まった ※「基礎を丁寧に指導してもらえた」は「丁寧」に分類	41
事前事後学修	予習、復習をすることで理解が深まった／予習、復習しやすかった	41

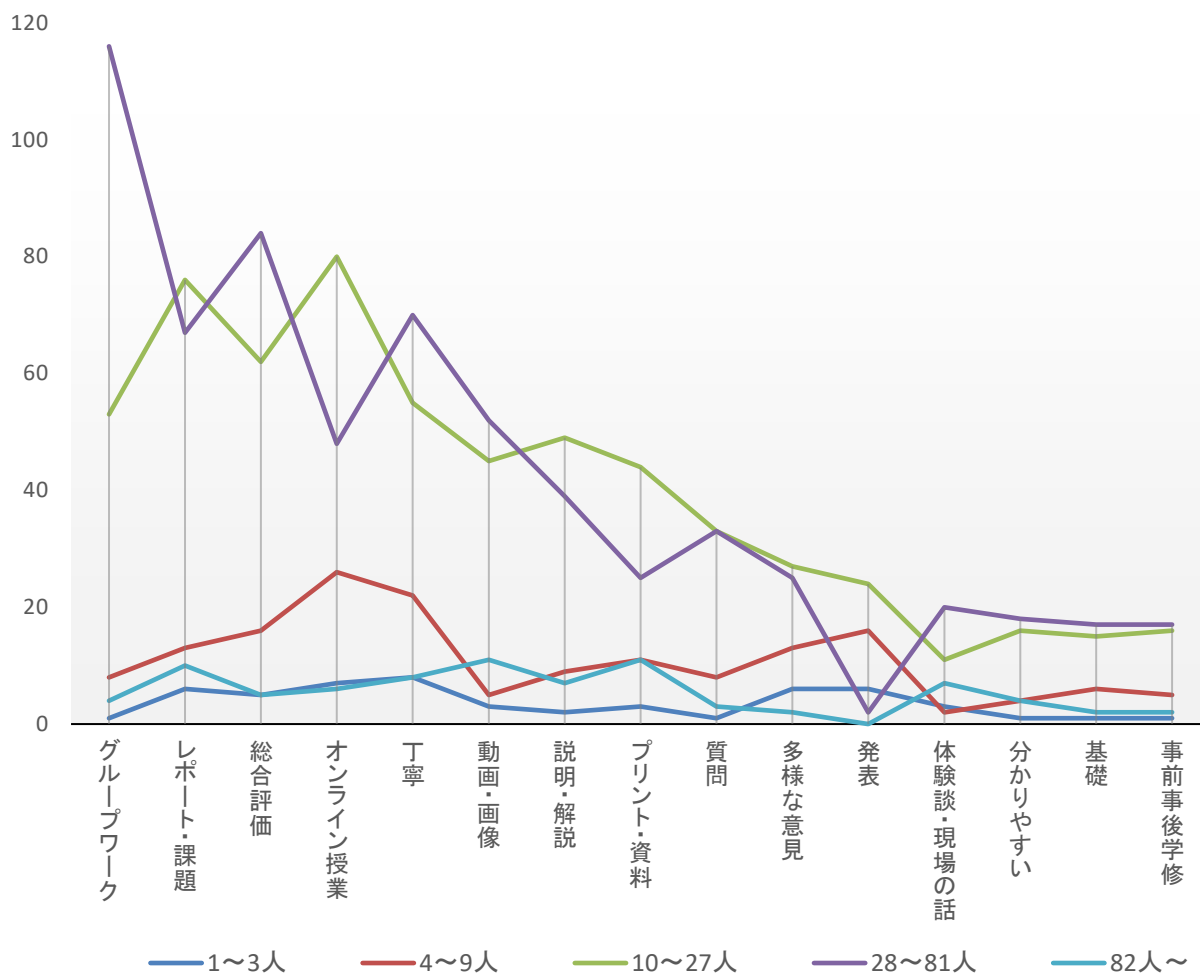
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【学部別】



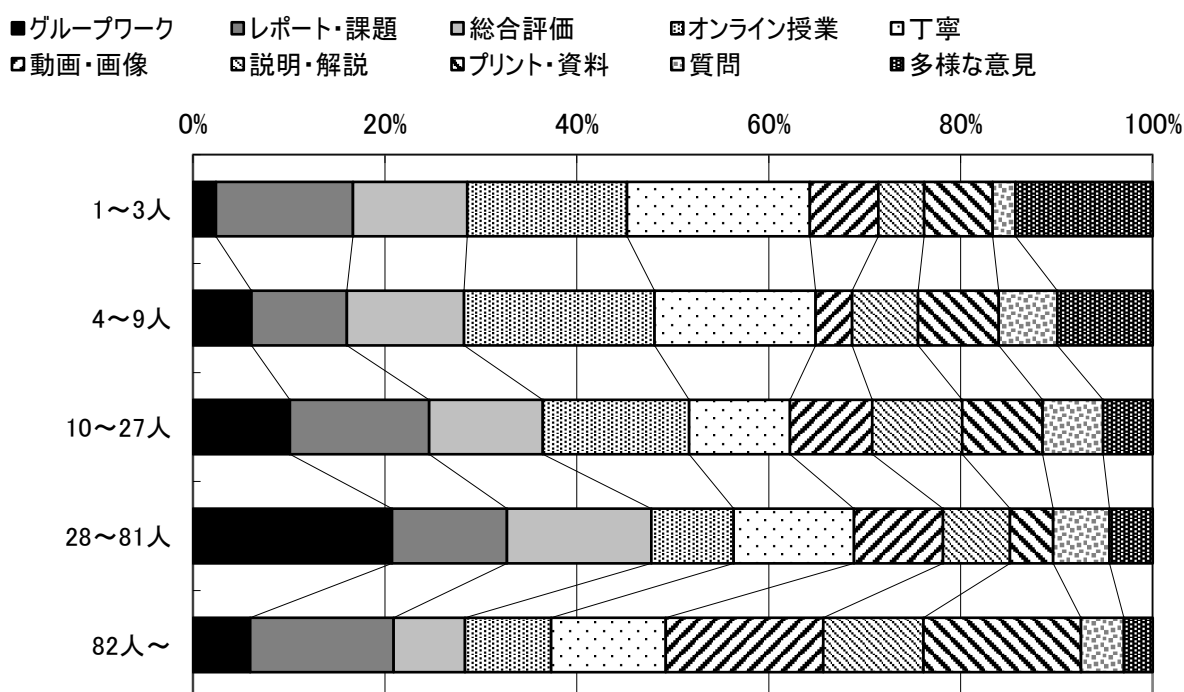
上位10項目の学部別割合



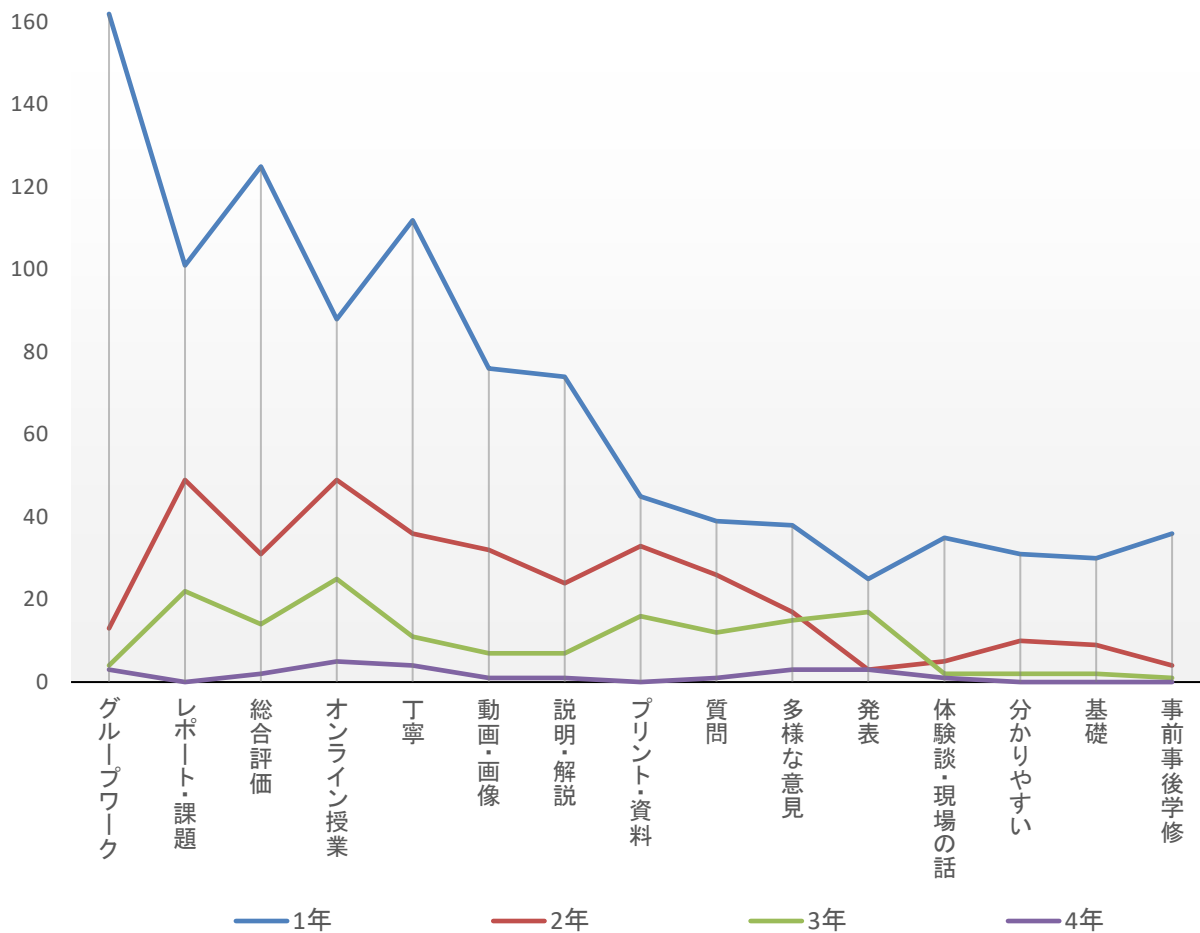
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【回答人数帯別】



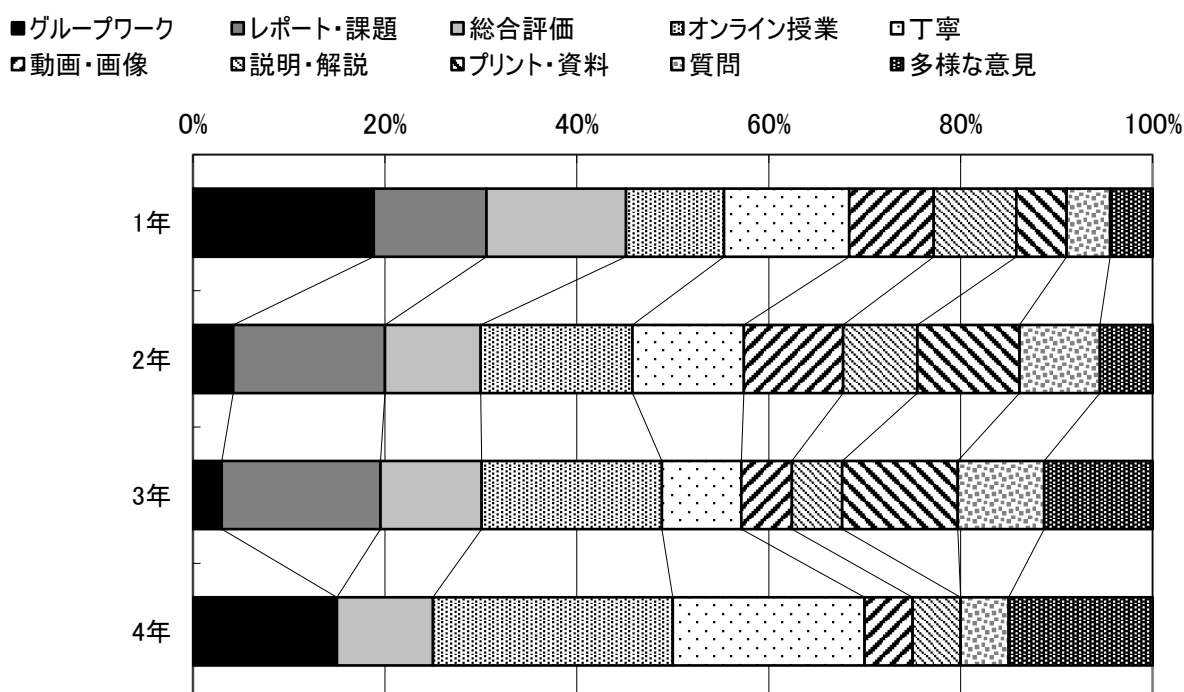
上位10項目の回答人数帯別割合



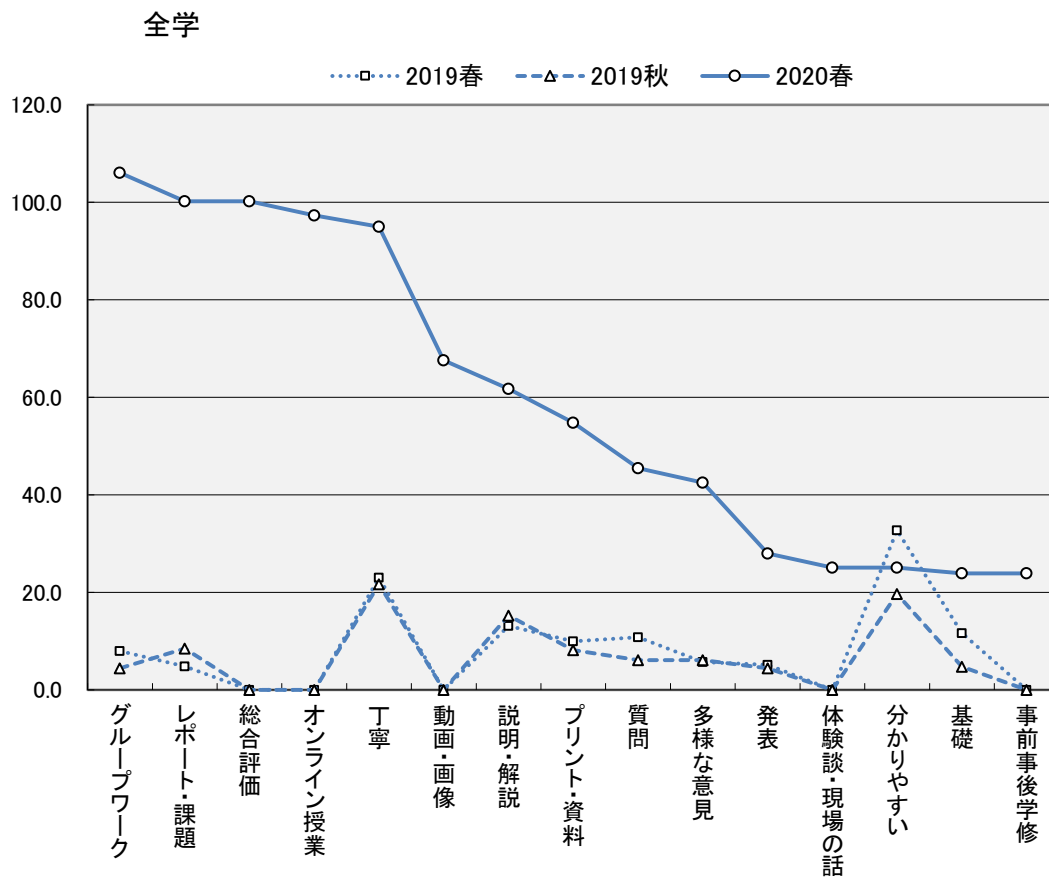
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】全学

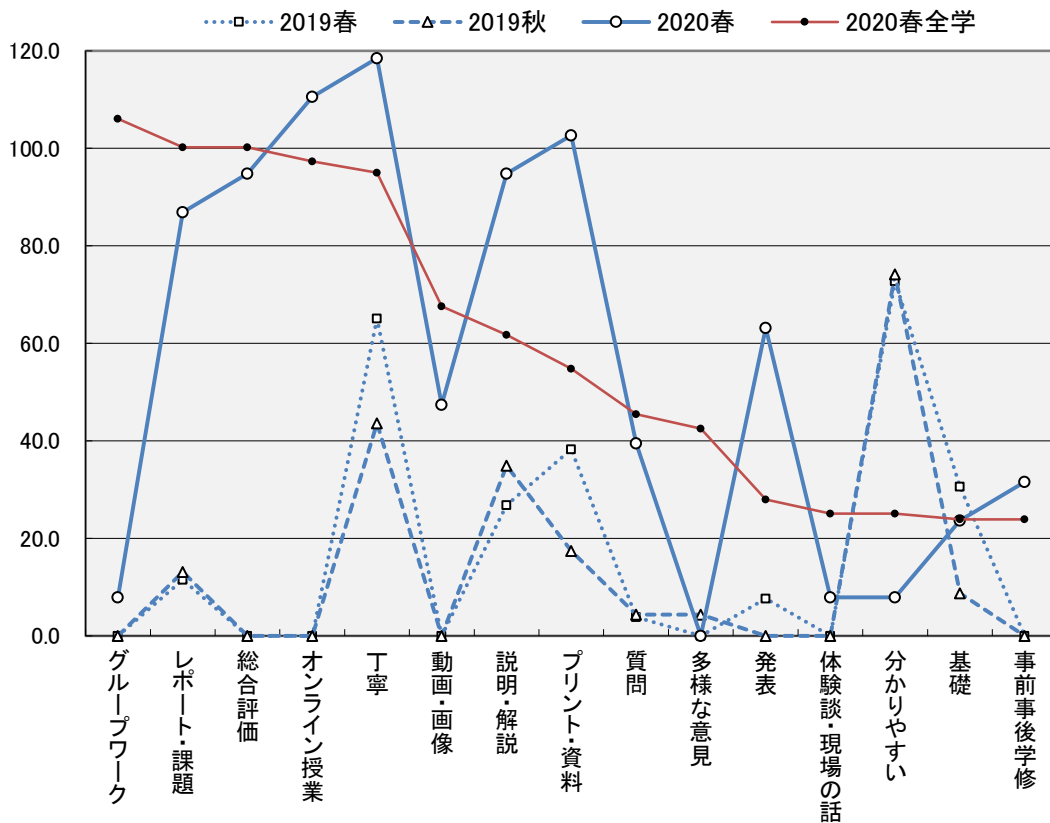


「出現率」について

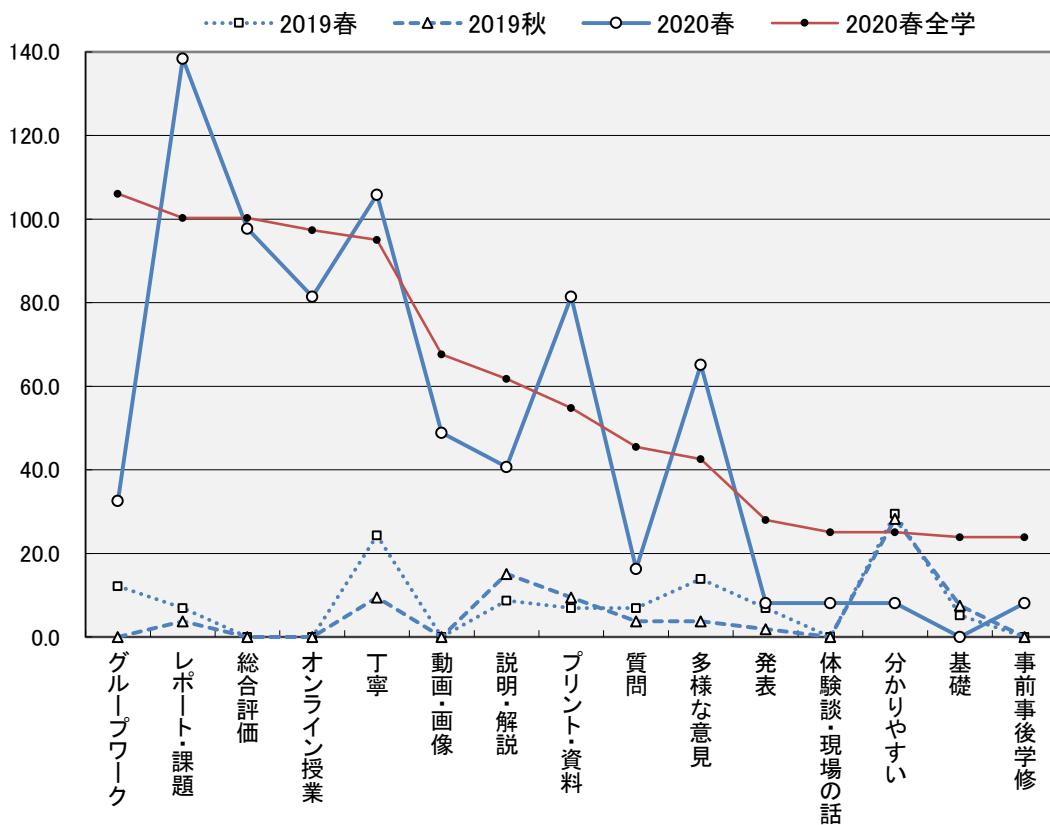
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10⁴
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

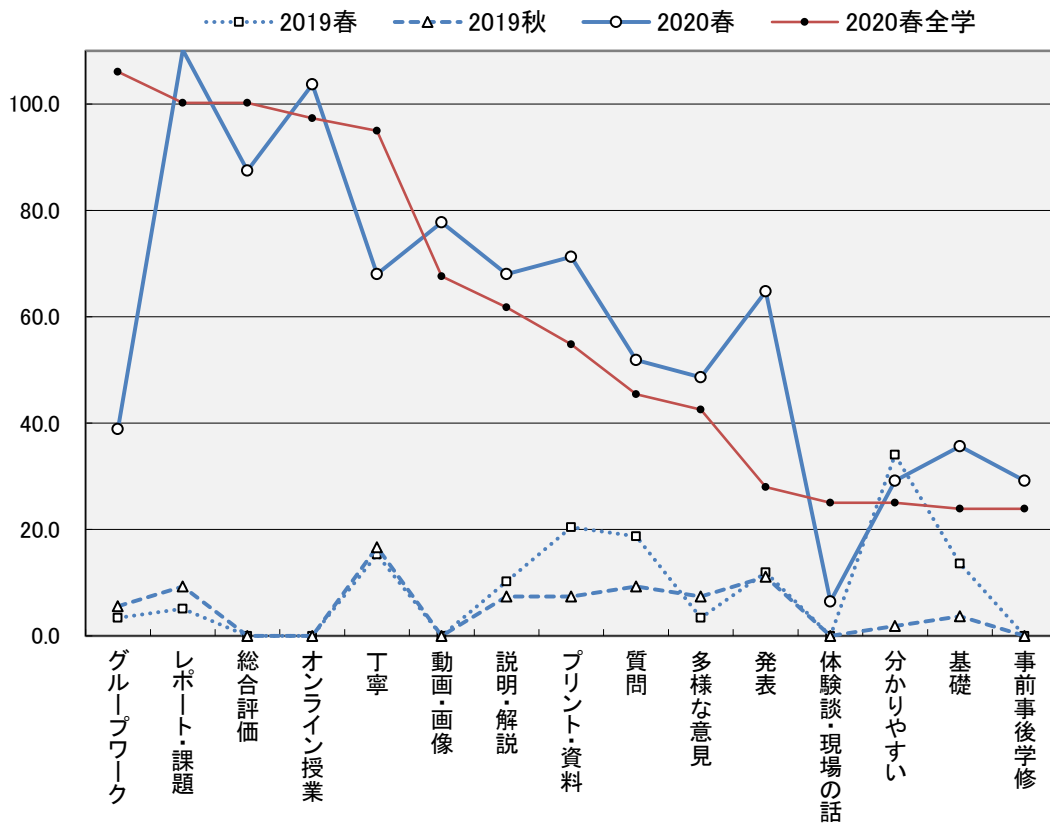


《人間学部》

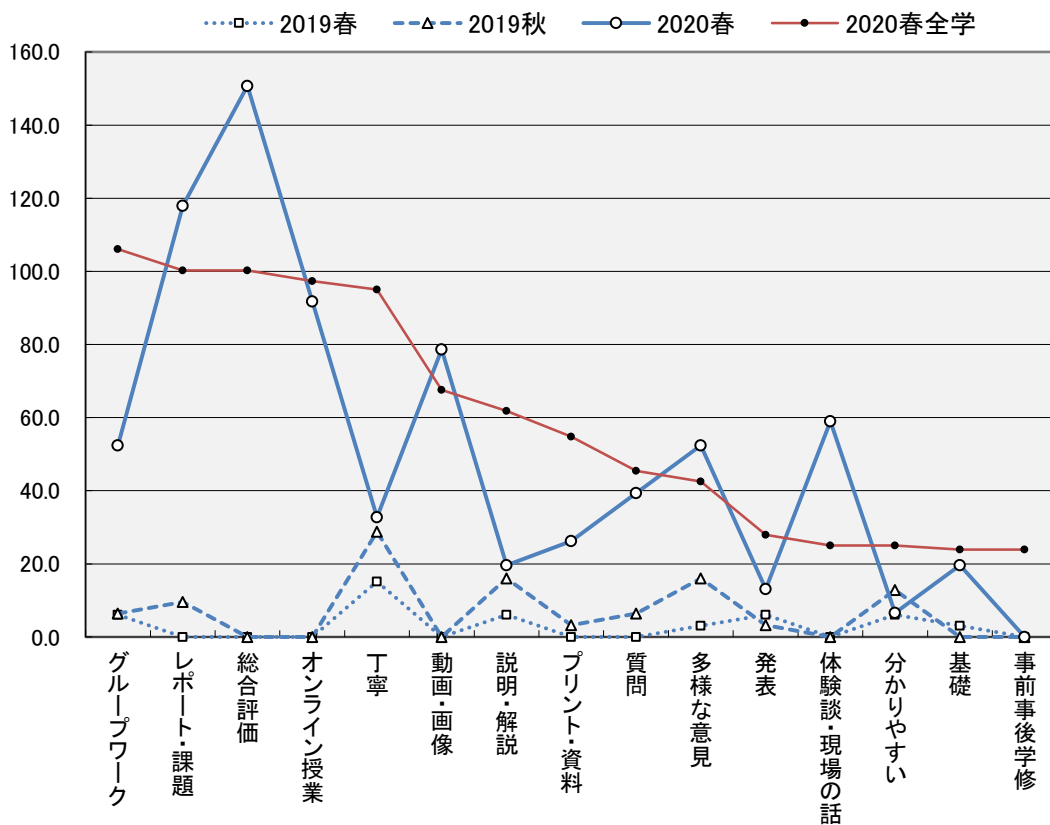


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

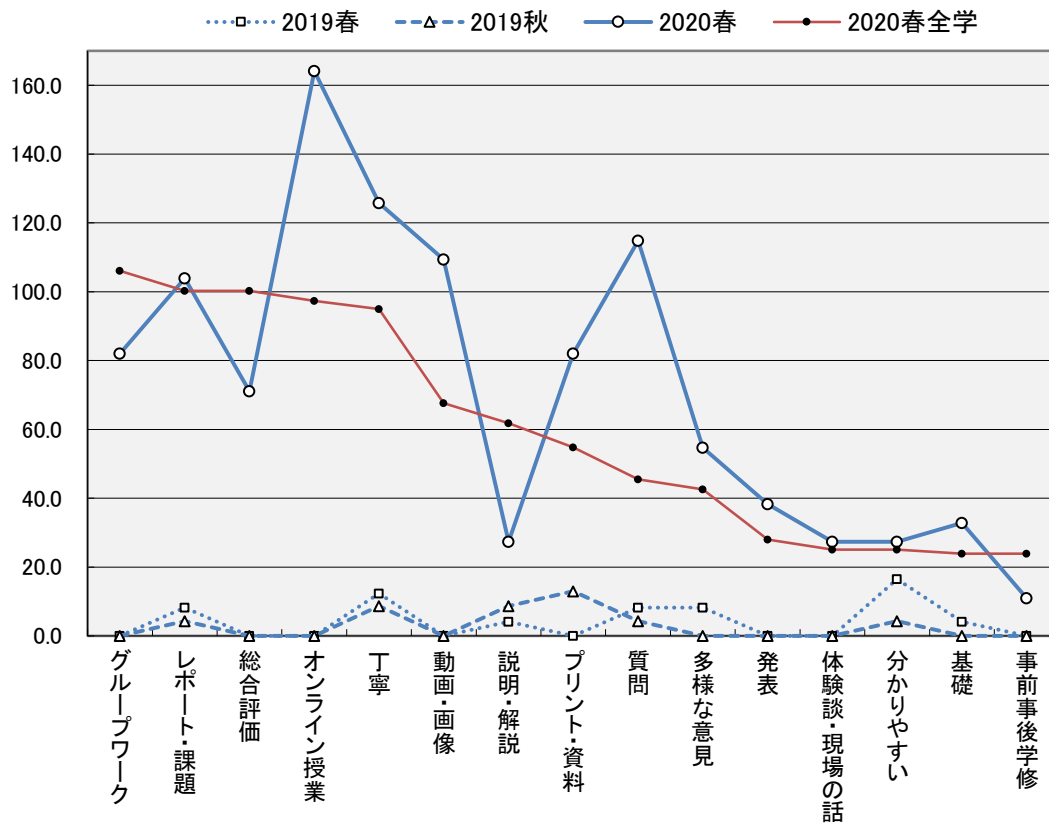


《表現学部》

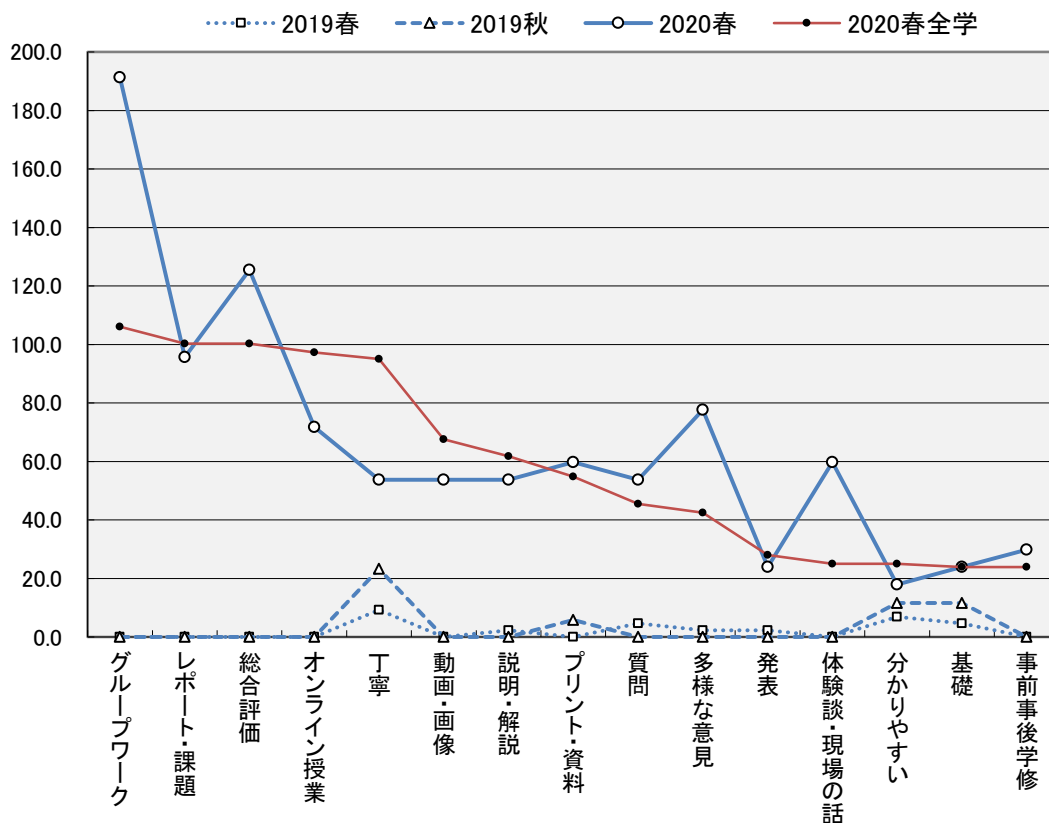


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》



《社会共同学部》



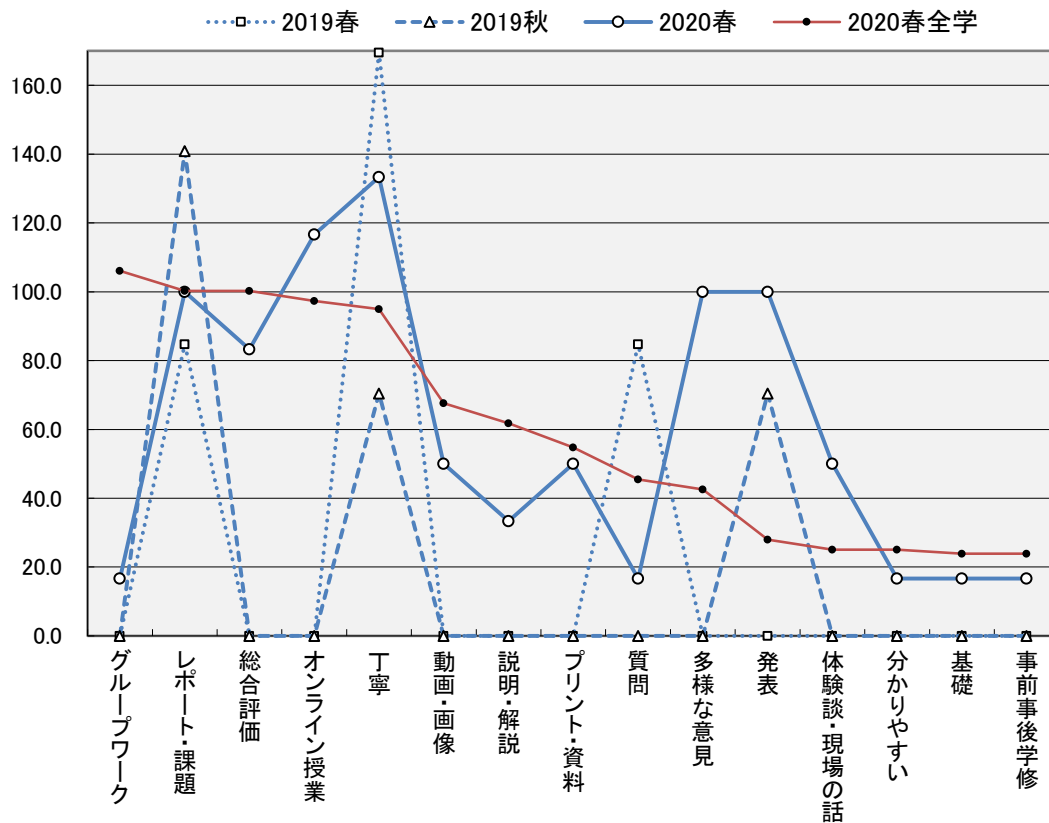
自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学部別

《Ⅰ類・Ⅱ類科目(学部共通)・Ⅲ類》

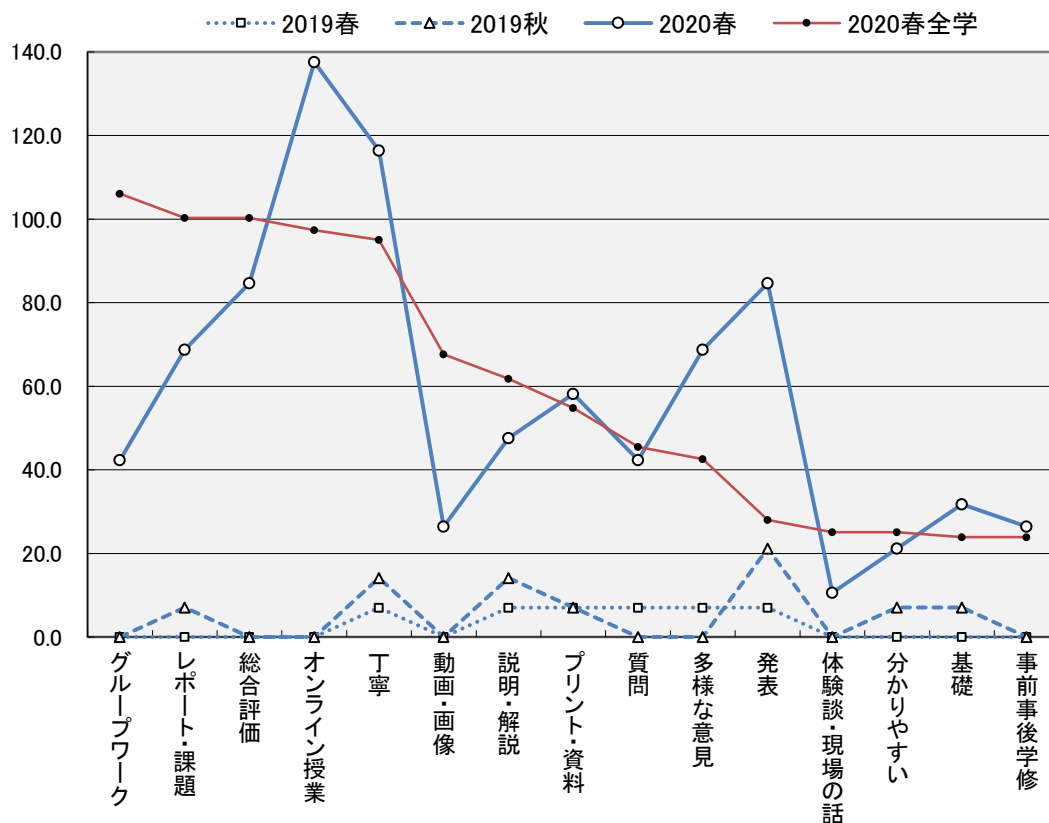


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《1~3人》

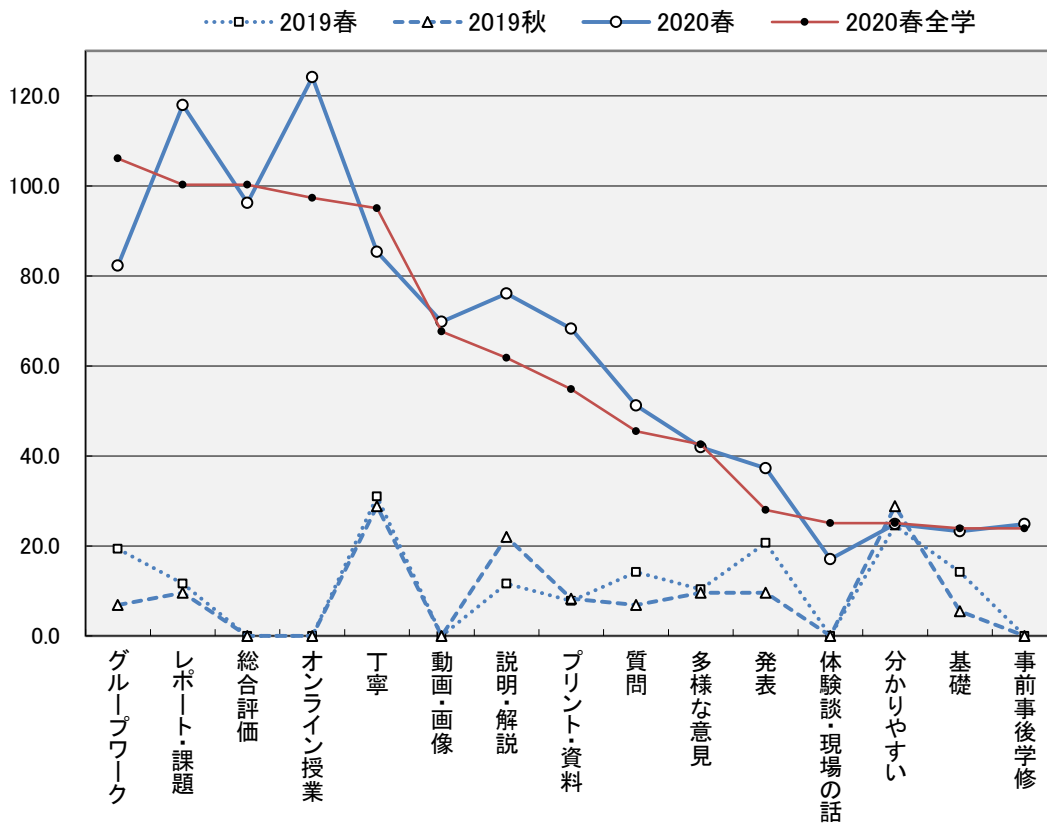


《4~9人》

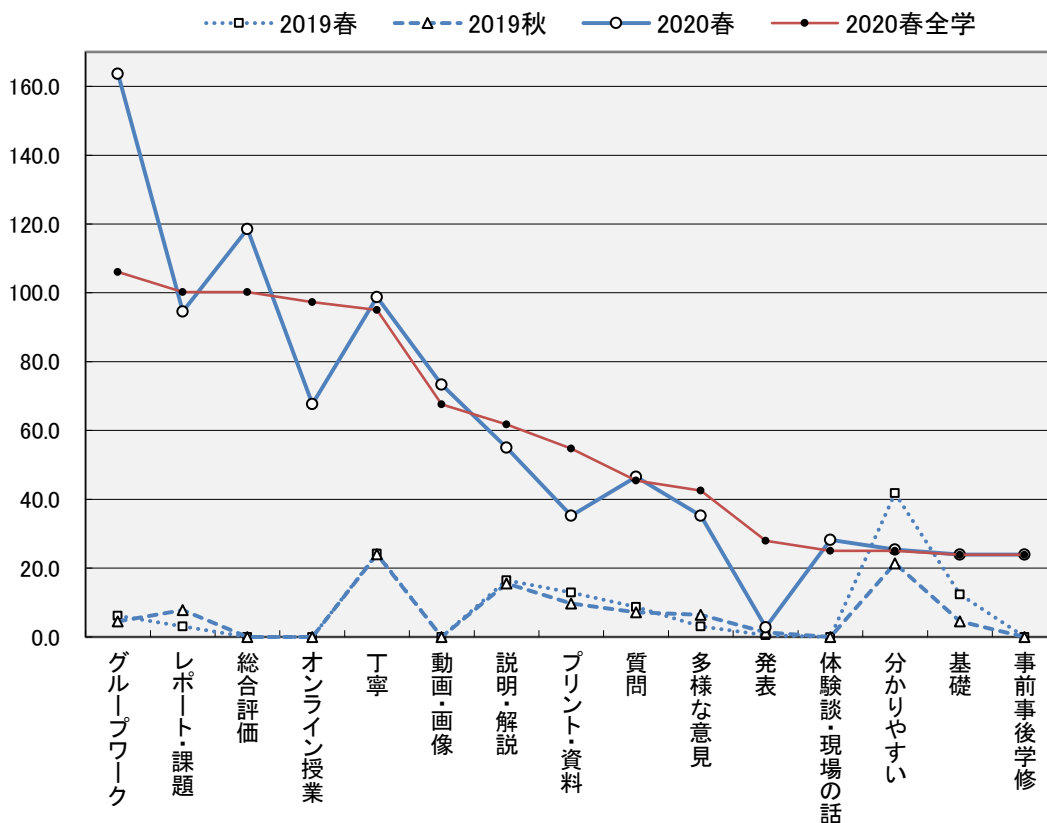


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

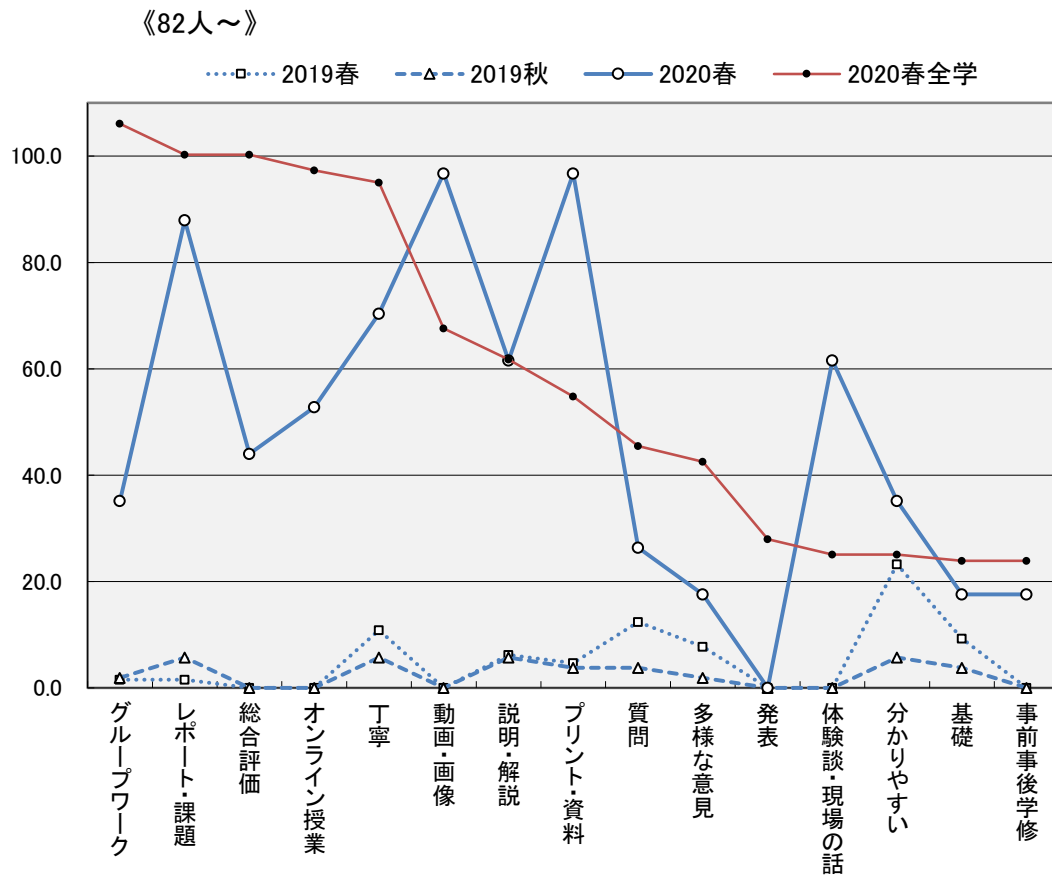
《10～27人》



《28～81人》

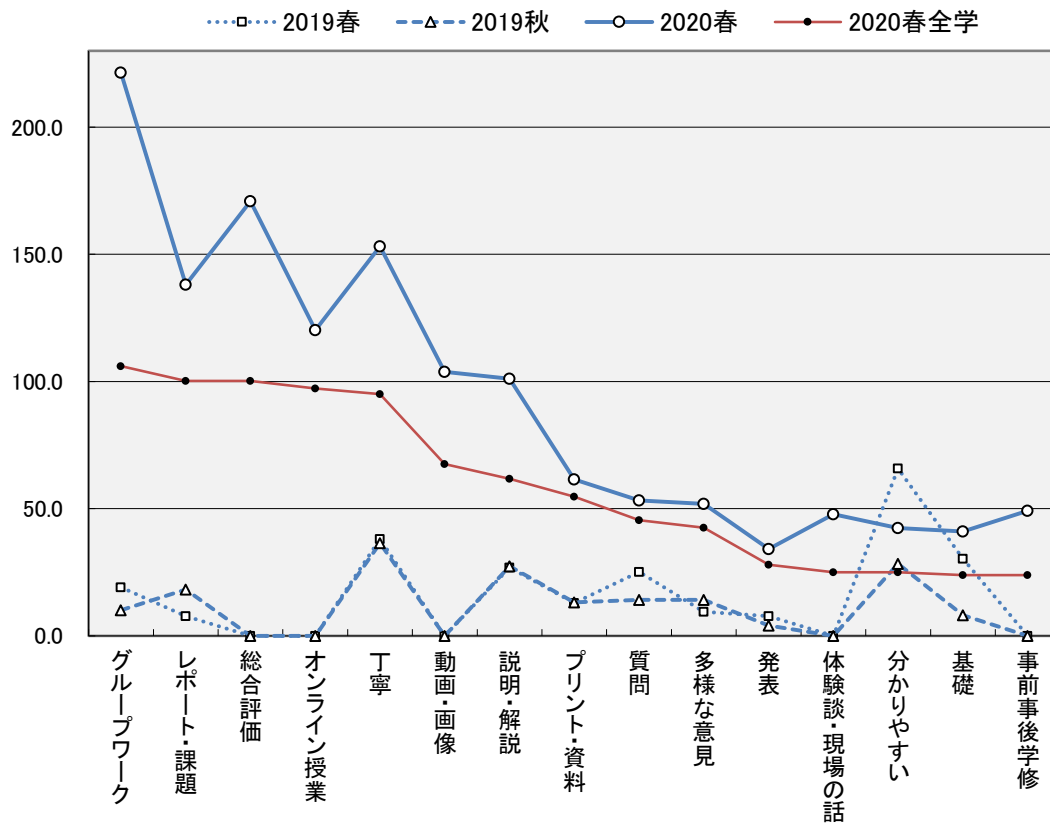


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

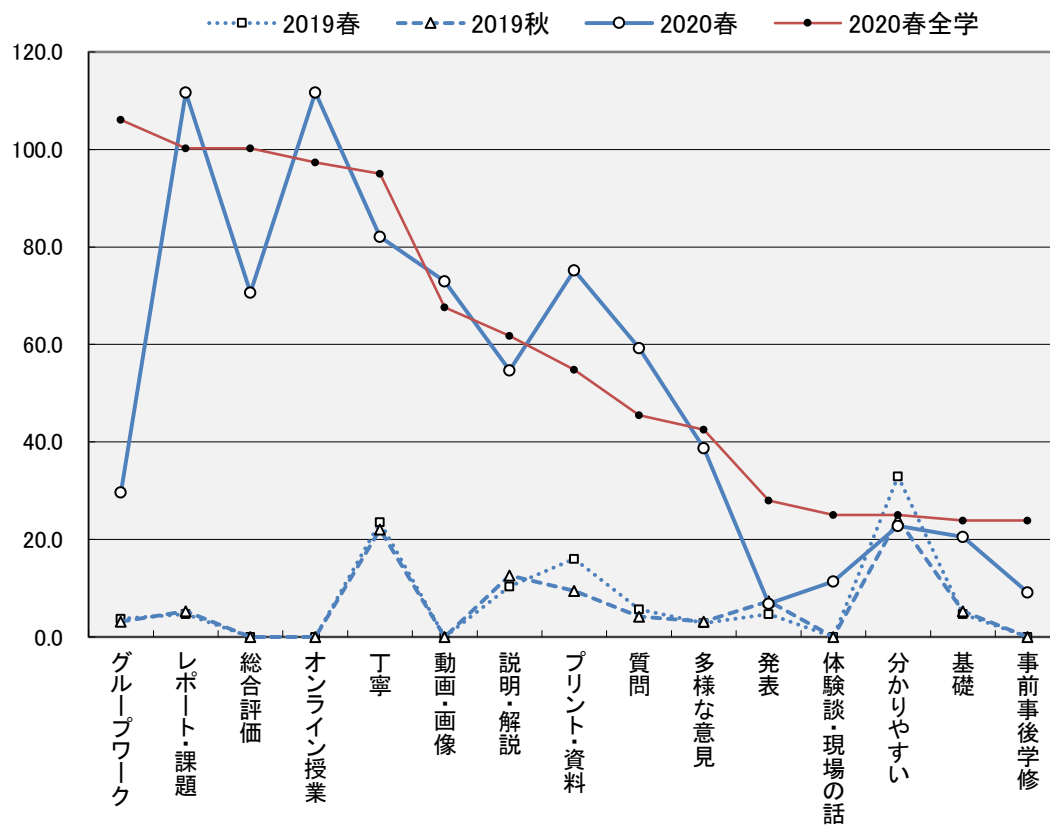


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
 【出現率前回比較】学年別

《1年》

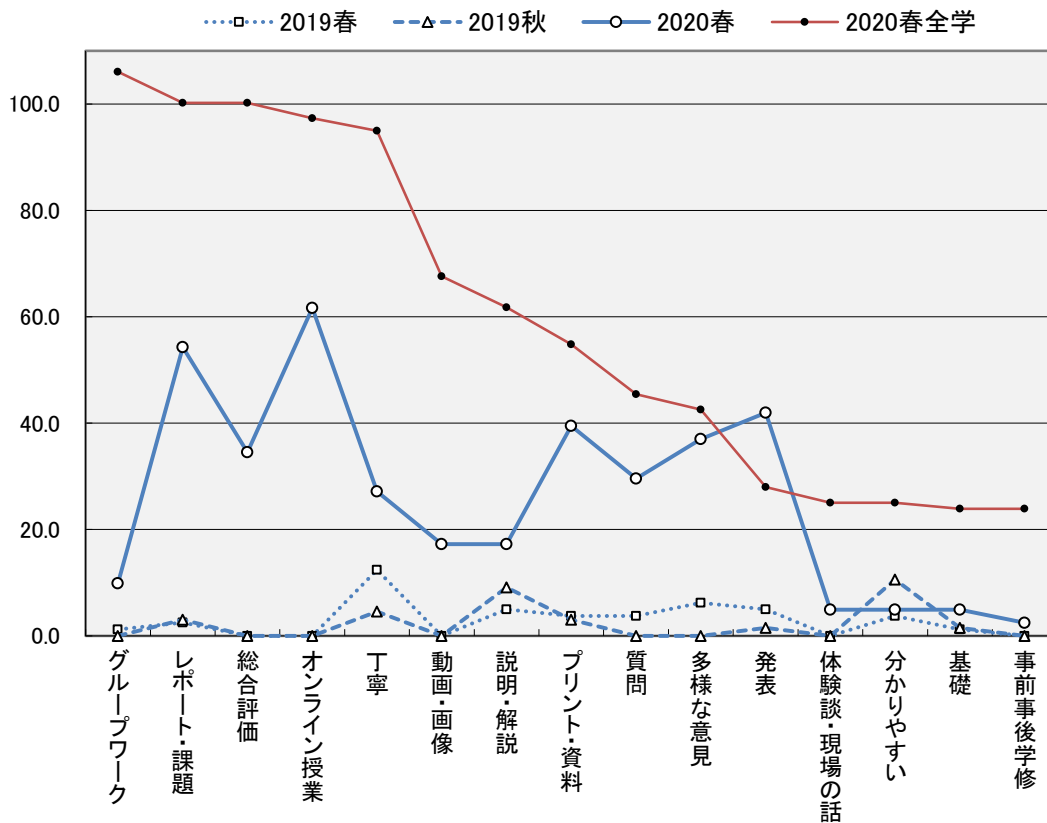


《2年》

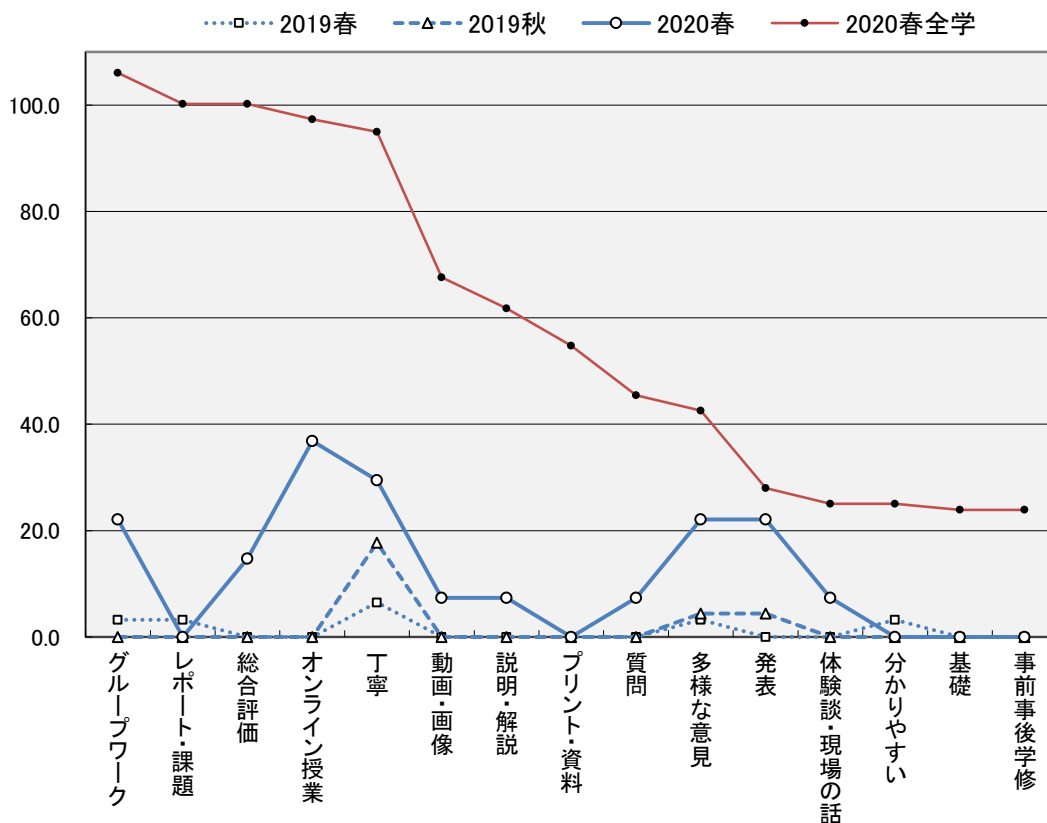


自由記述回答 頻出キーワード <効果点>
【出現率前回比較】学年別

《3年》



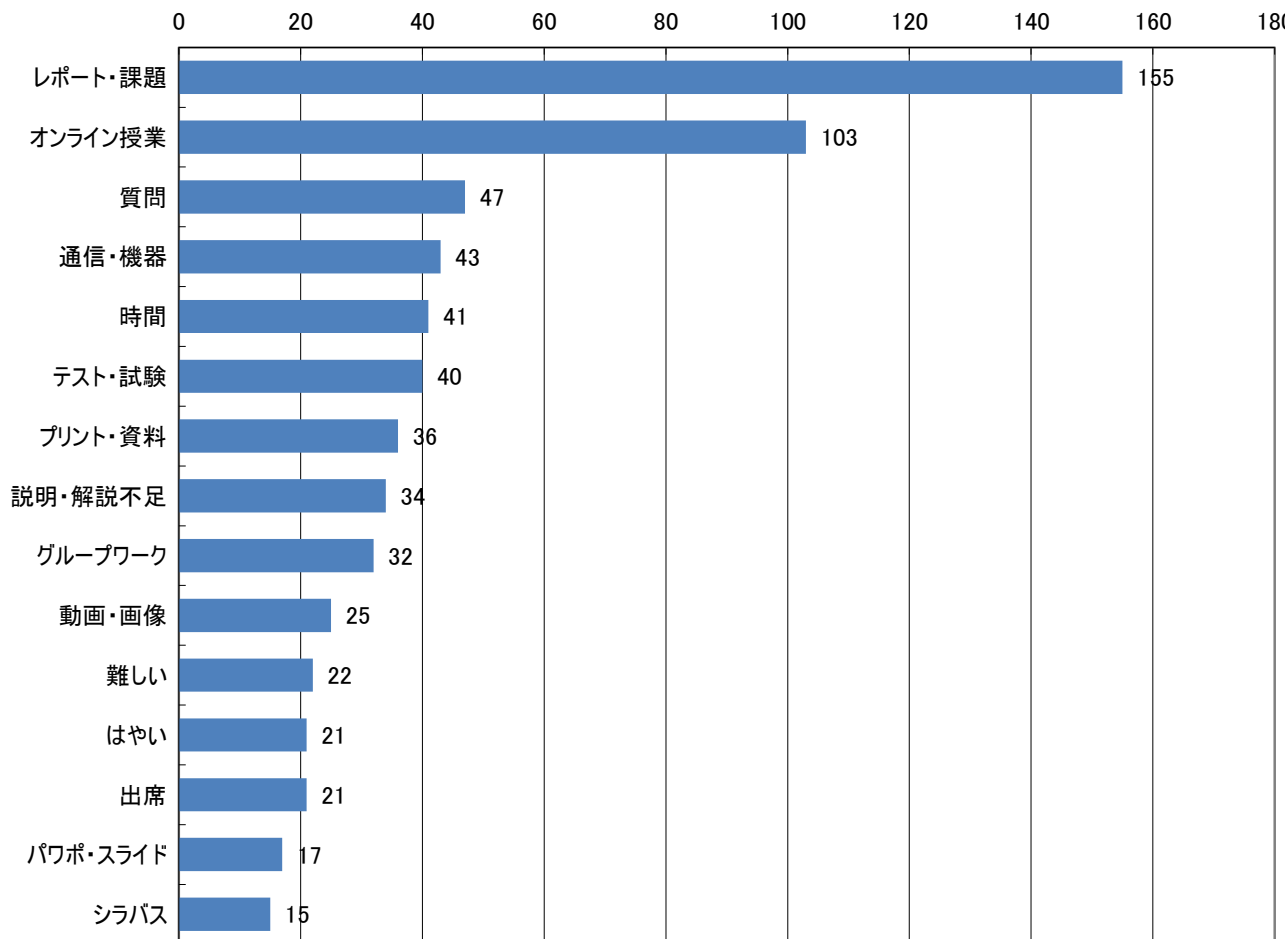
《4年》



【改善点】

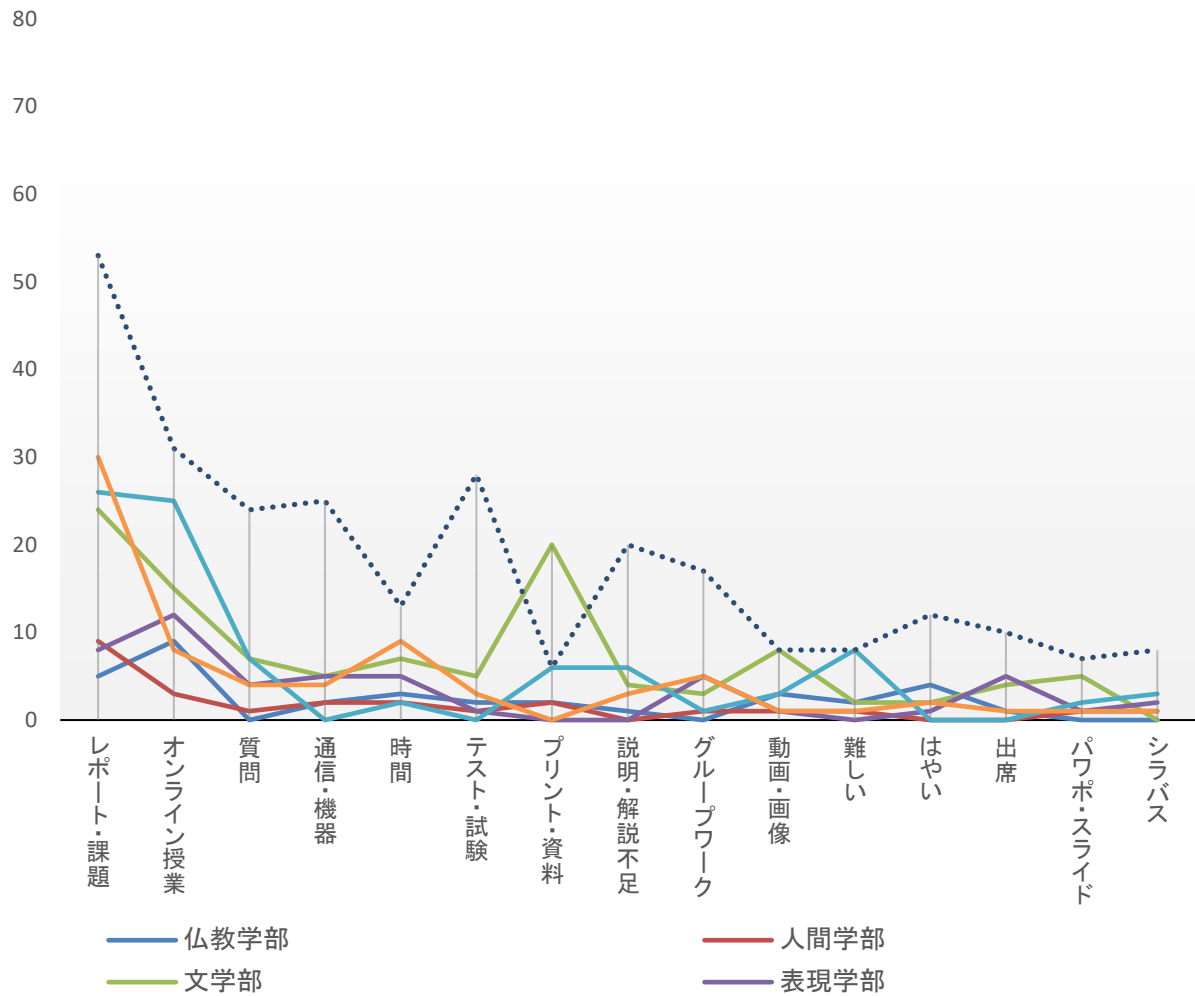
改善できる点

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【全学】

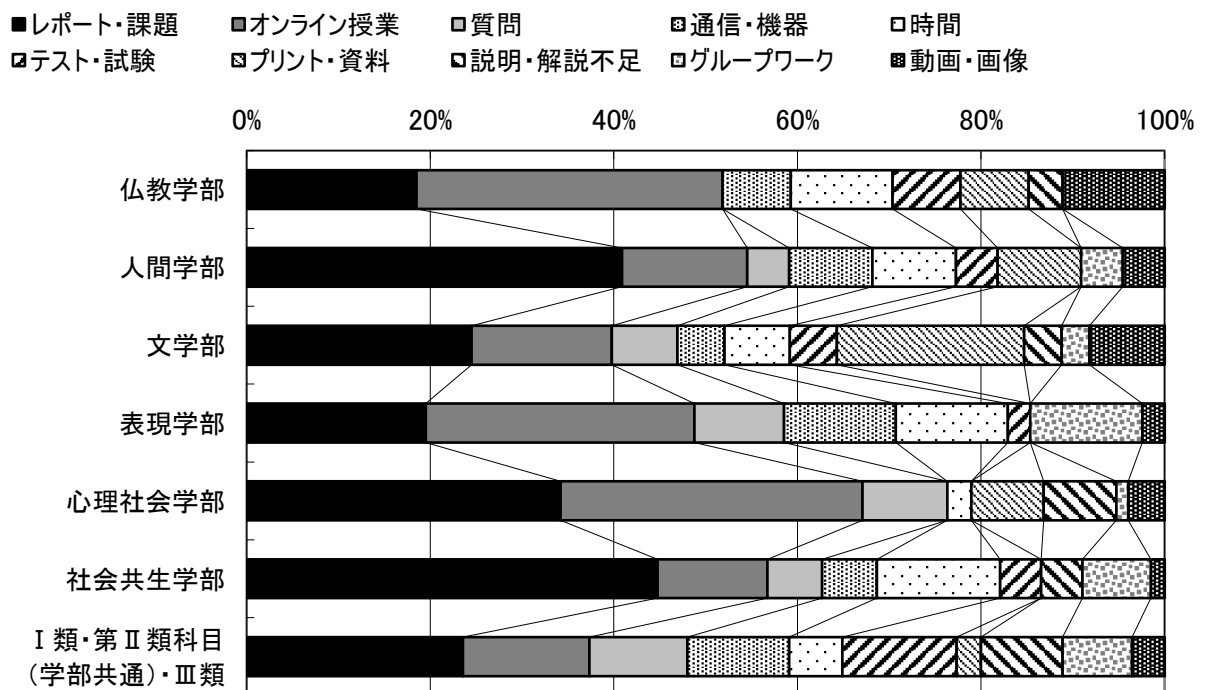


キーワード	主な内容	出現数
レポート・課題	レポート、課題の出し方や評価方法を改善してほしい／課題の答えが欲しい／課題が多い、難しい／課題の提出方法を説明して欲しい	155
オンライン授業	動画配信してほしい／動画配信期間が短かった／ほかの方法（ツール）がよかった／課題配信型ではなく、オンライン授業をしてほしい／オンライン授業の進め方がよくなかった／対面の授業がよかった	103
質問	質問しづらい／質問にきちんと対応してくれない／質問に対しての回答に満足できない	47
通信・機器	(先生側／生徒側の) 通信・機器のトラブルがあった ※先生の知識不足によるトラブルを含む	43
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい／作業時間が足りない／・授業時間以外の負担が大きい ※「スライドを変える時間が短い」は「はやい」に、「テスト時間が短い、足りない」は「テスト」に分類。	41
テスト・試験	テストの実施方法を改善してほしい／テストが難しい／テスト時間が短い、足りない テスト中はミュートにしてほしい	40
プリント・資料	プリント、資料を配布されるだけの授業で理解しづらかった／プリント、資料が分かりにくい／プリント、資料の内容、配布方法を改善してほしい ※「プリント、資料の字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に分類。	36
説明・解説不足	(授業について) 説明・解説が不足・不十分	34
グループワーク	グループワークの回数、分け方、実施方法を改善してほしい	32
動画・画像	動画、映像、写真が分かりにくい（見えにくい）／動画、映像が欲しかった	25
難しい	授業・資料等が難しすぎる	22
はやい	進行が早い、早口、画面切り替えが早いなどの理由で授業についていけない	21
出席	出席の取り方を改善してほしい（成績への反映の仕方など）／出席情報が反映されない（反映が遅い）、出席確認に時間がかかる／（課題提出による）出席確認は不安／出欠管理をしっかりしてほしい	21
パワポ・スライド	パワーポイント、スライドが分かりにくい、見にくい／パワーポイント、スライドの内容、配布方法を改善してほしい ※「字が小さくて読みにくい」は「字が読みにくい」に、「画面切り替えがはやくて読みにくい」は「はやい」に分類	17
シラバス	シラバスに沿って授業をして欲しい／シラバスと授業内容が異なる	15

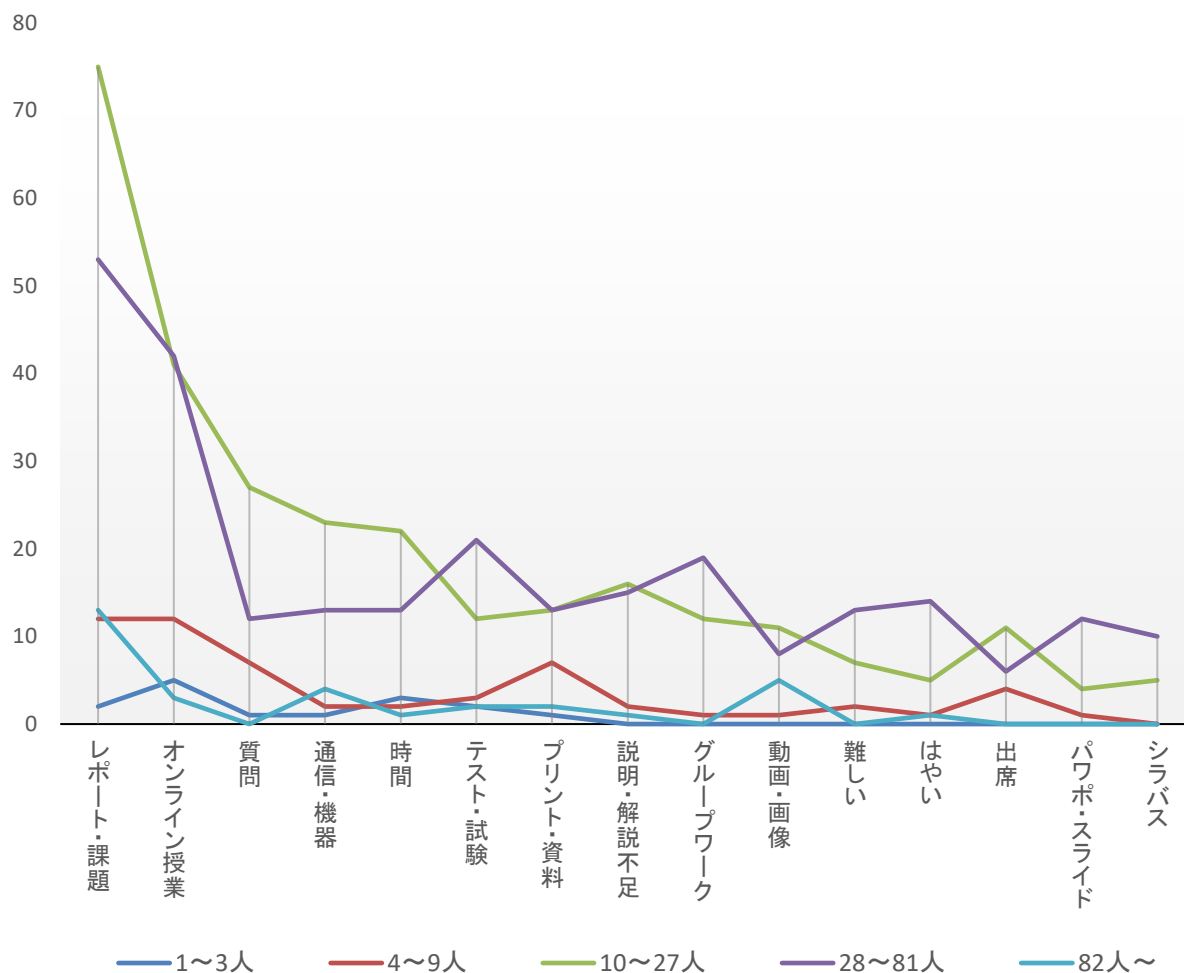
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【学部別】



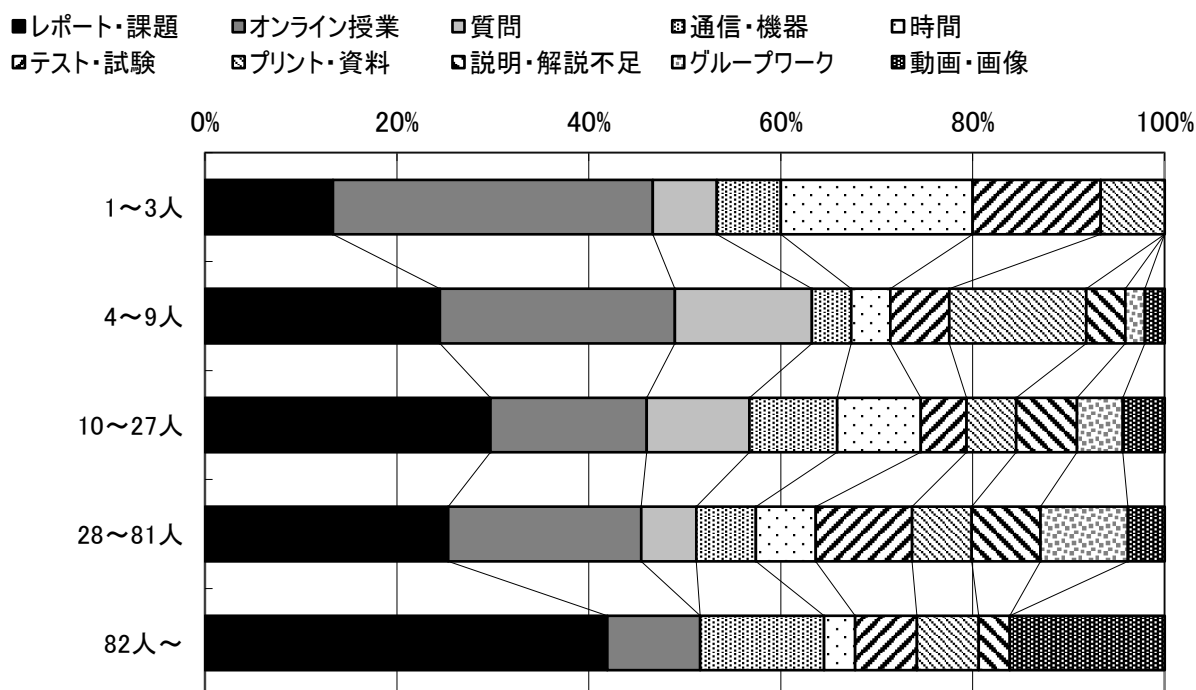
上位10項目の学部別割合



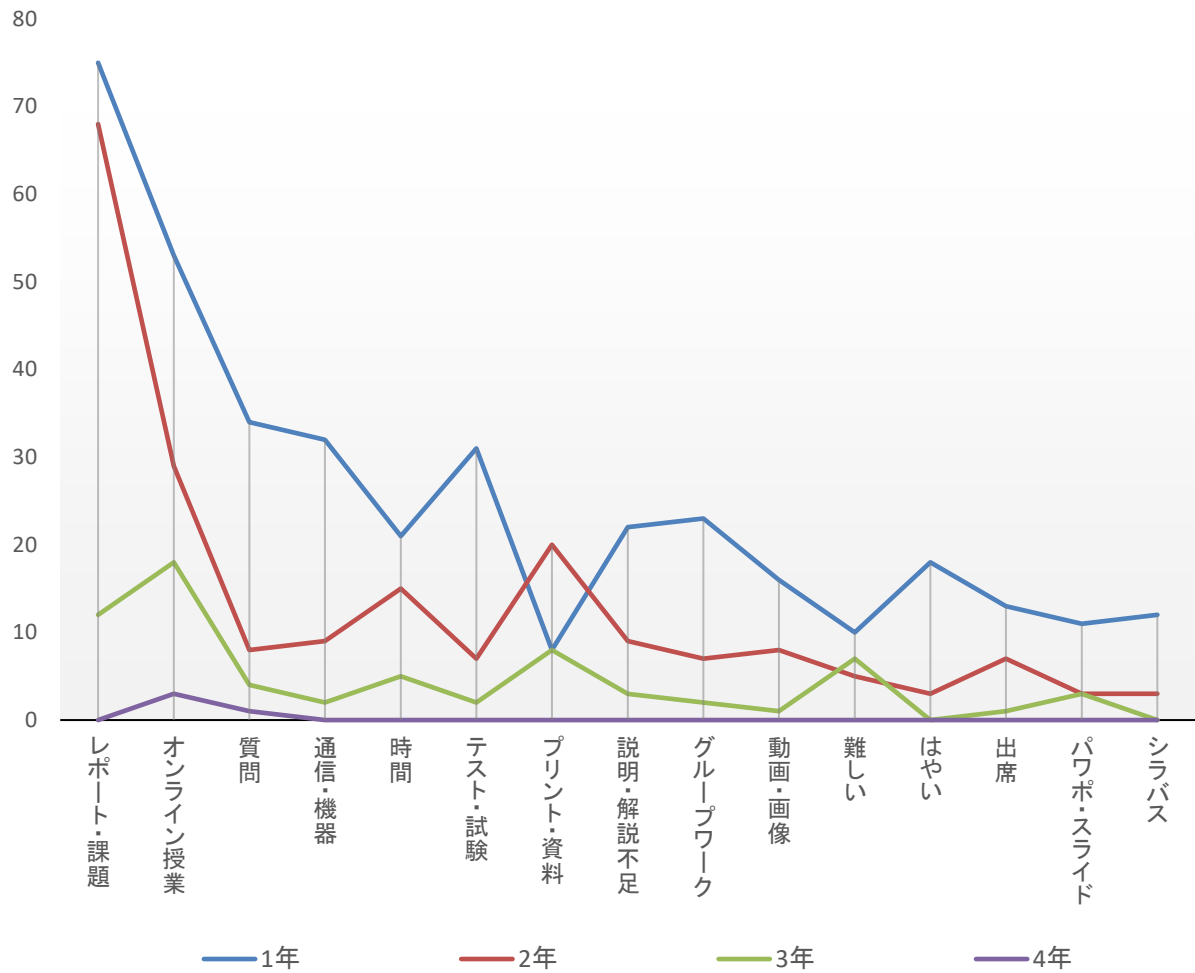
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【回答人数帯別】



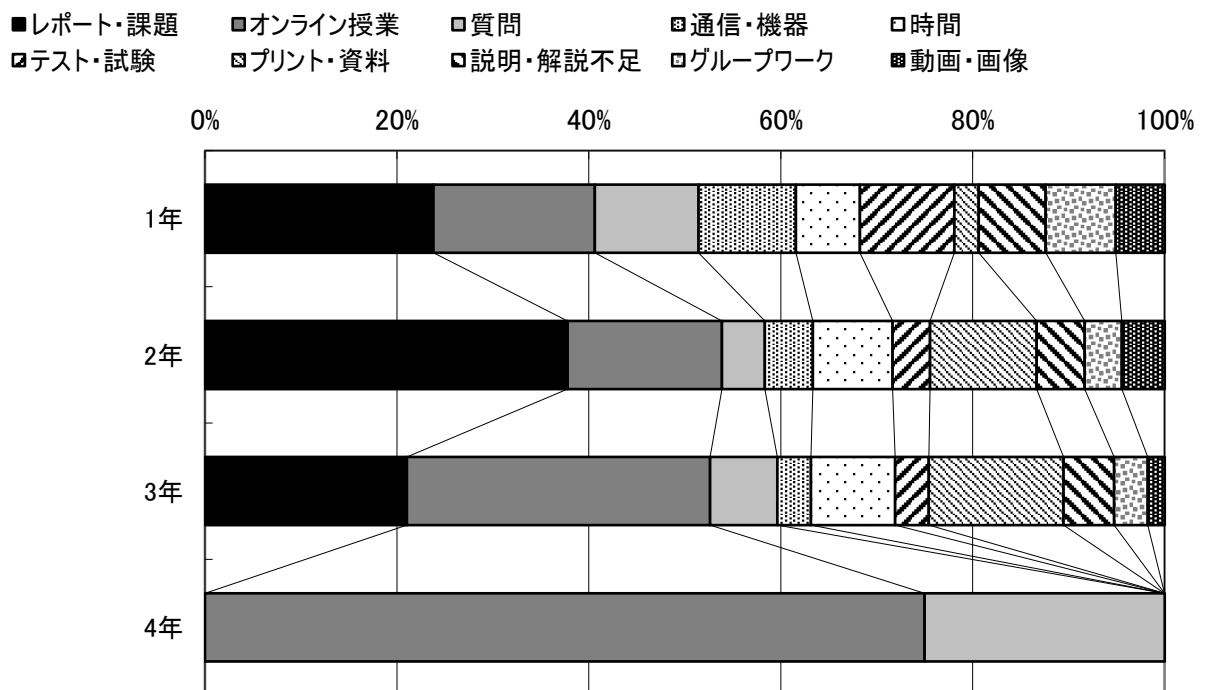
上位10項目の回答人数帯別割合



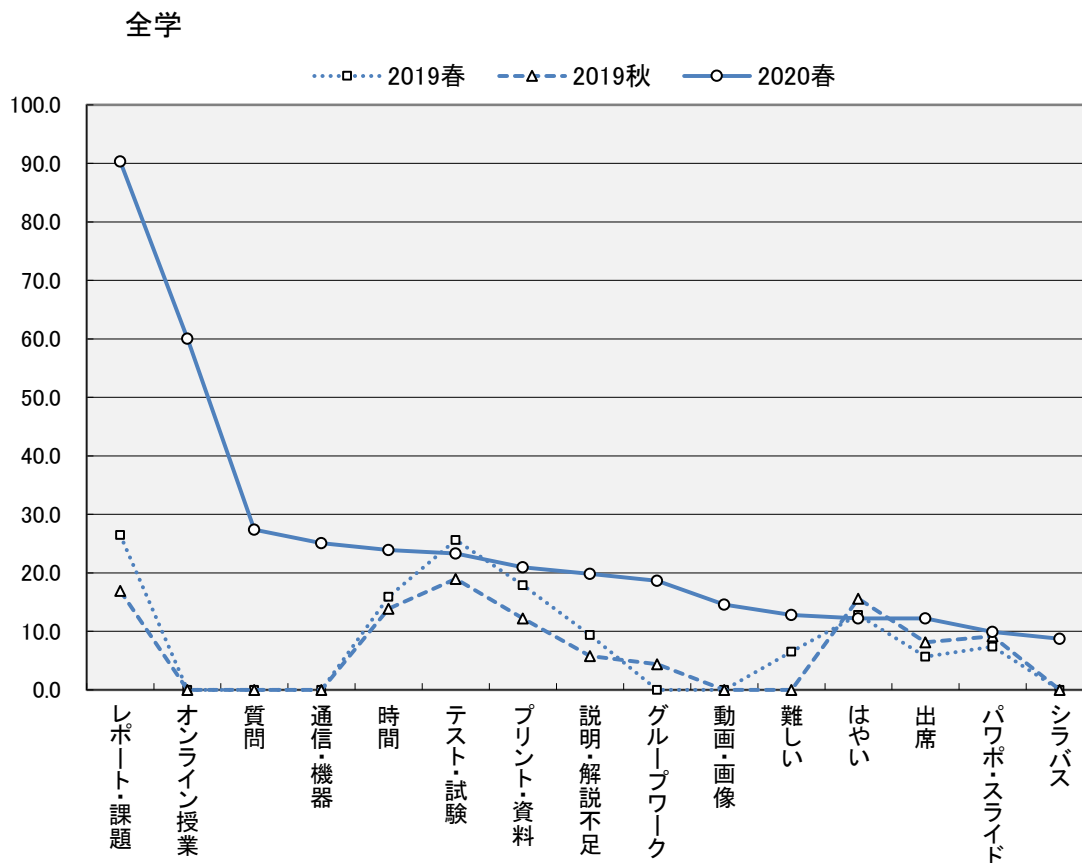
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】 全学

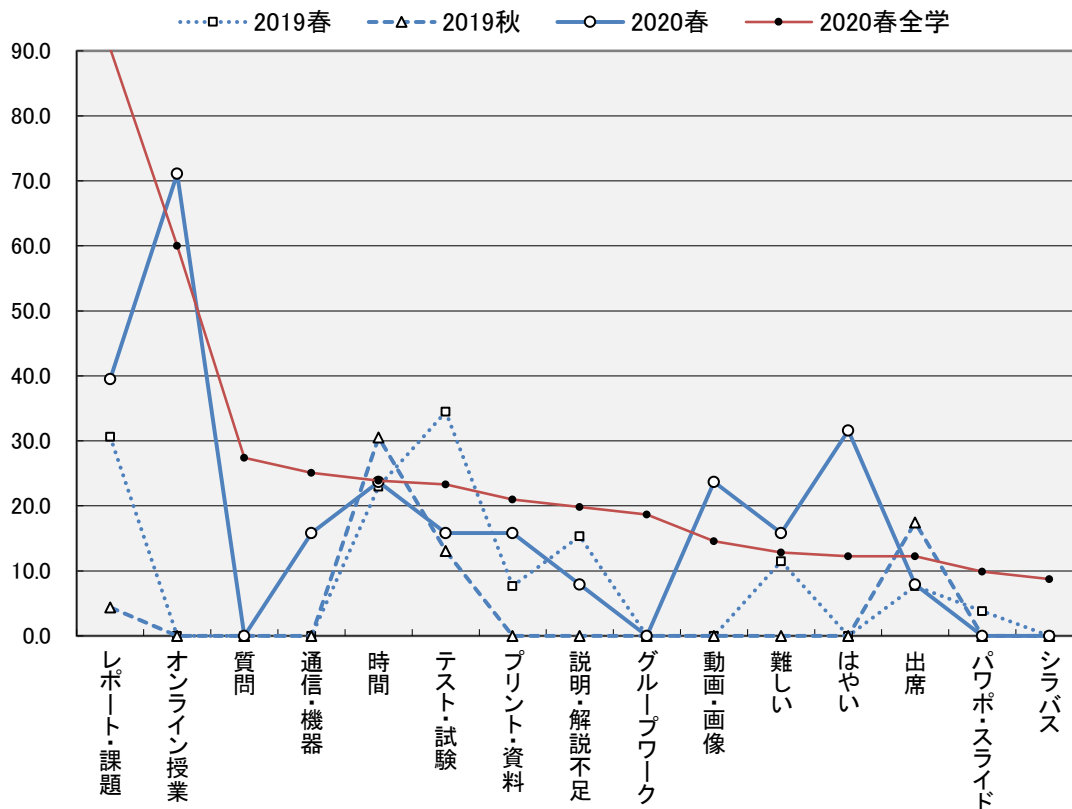


「出現率」について

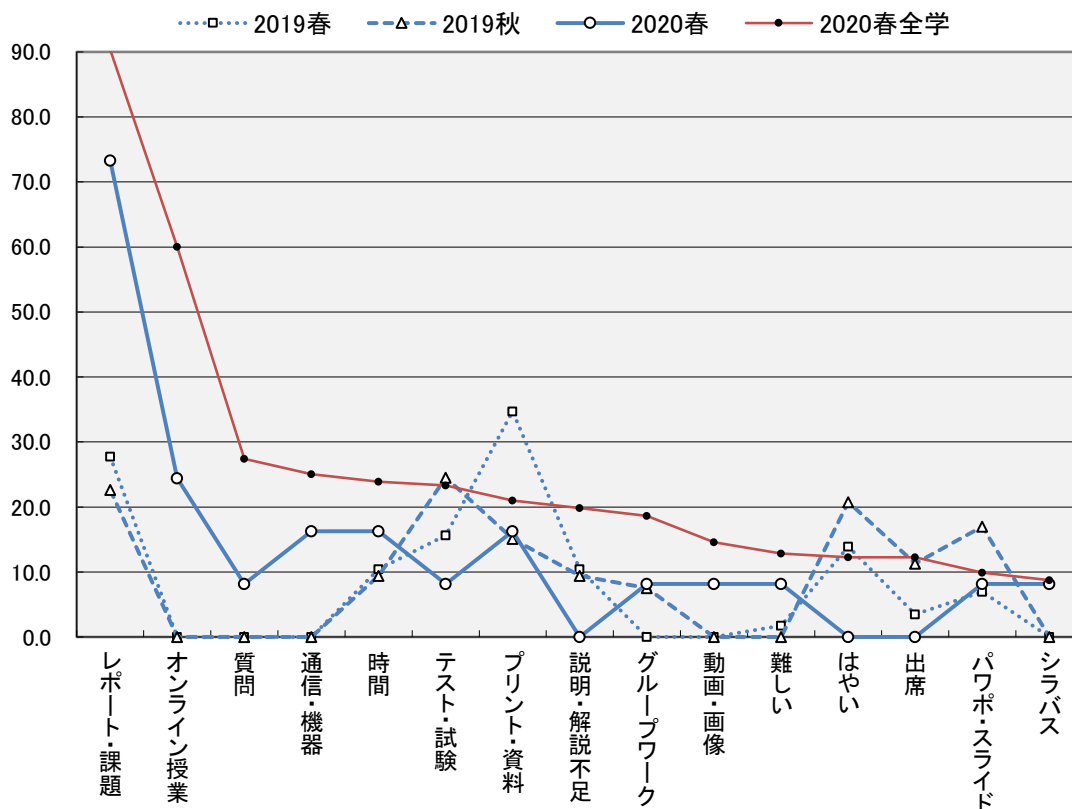
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
出現率は下記の式で計算されます。
出現率 = 出現数 / 回答者数 × 10⁴
(回答者数: 授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。)
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリにおける回答者数を使用しています。

自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《仏教学部》

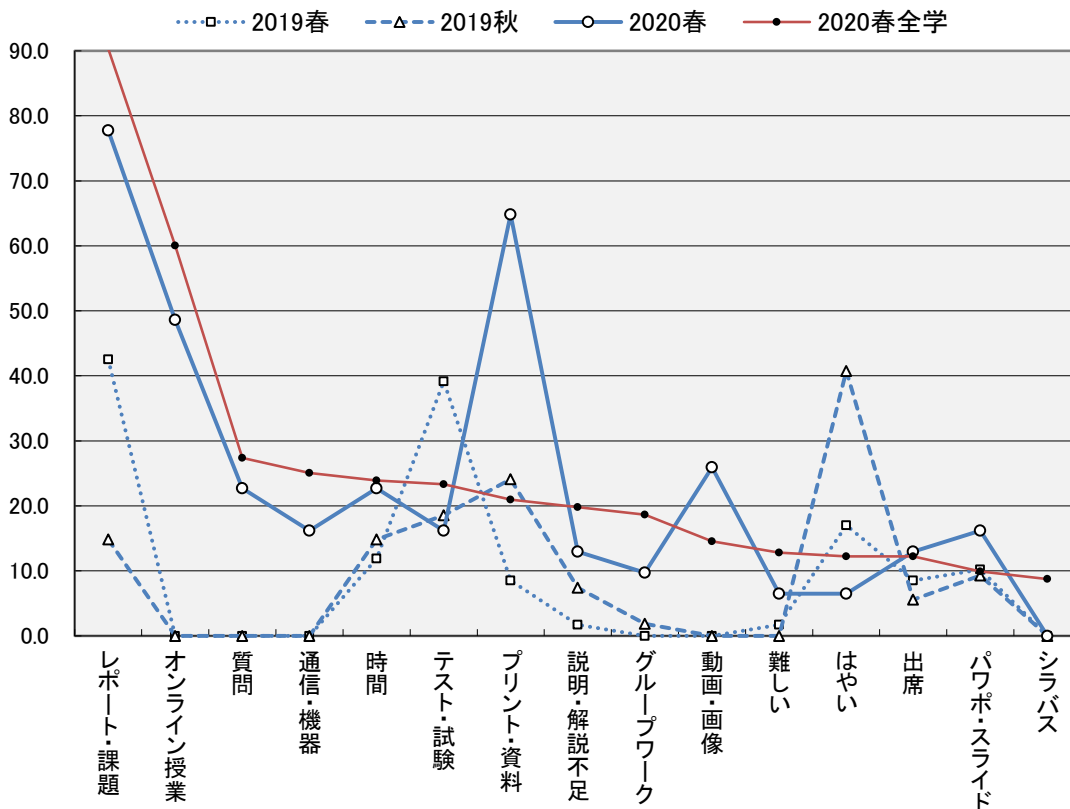


《人間学部》

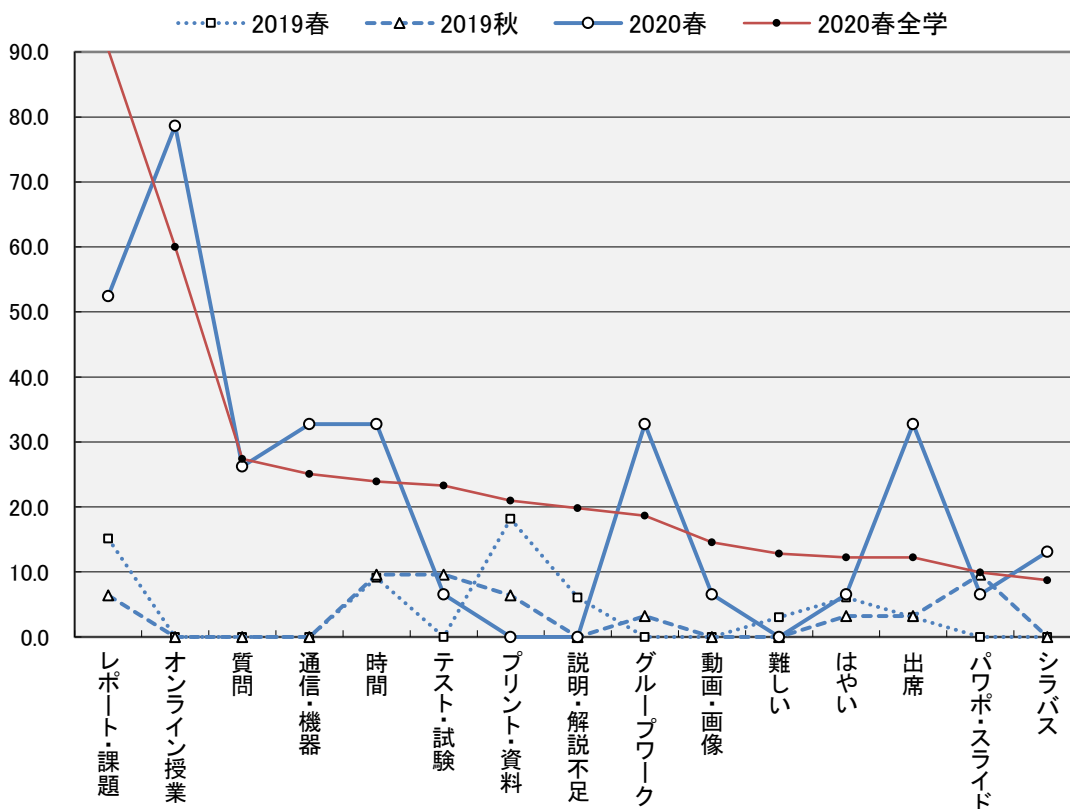


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《文学部》

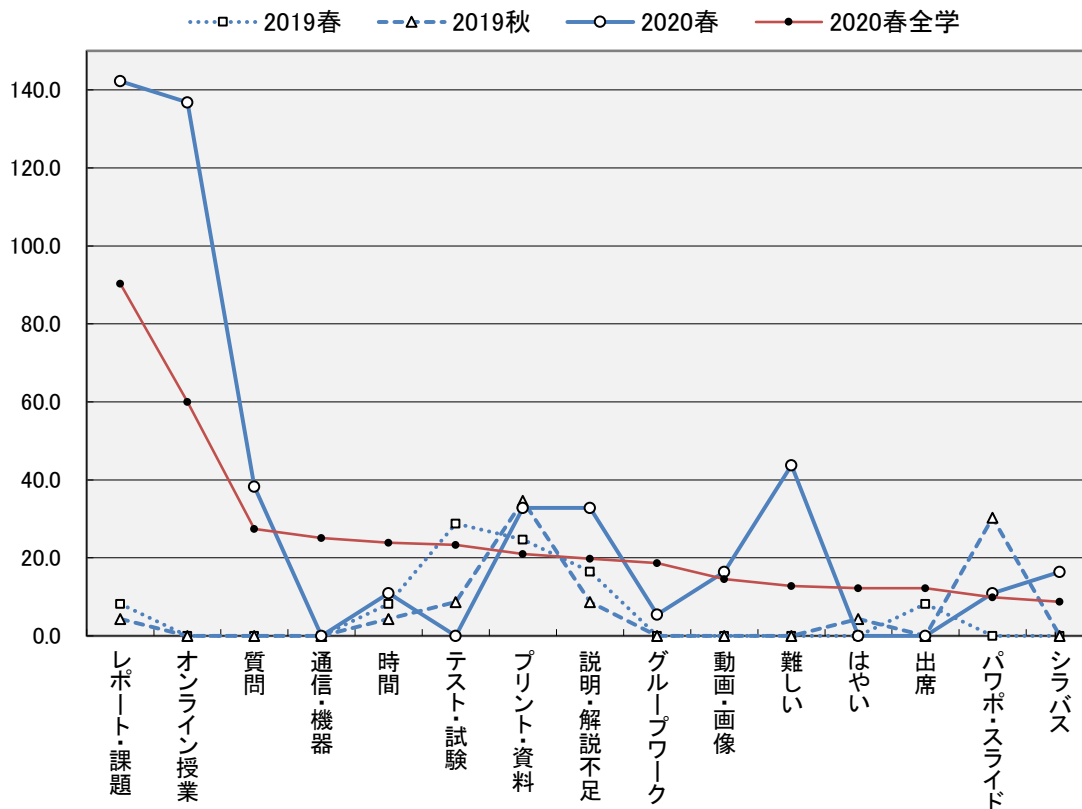


《表現学部》

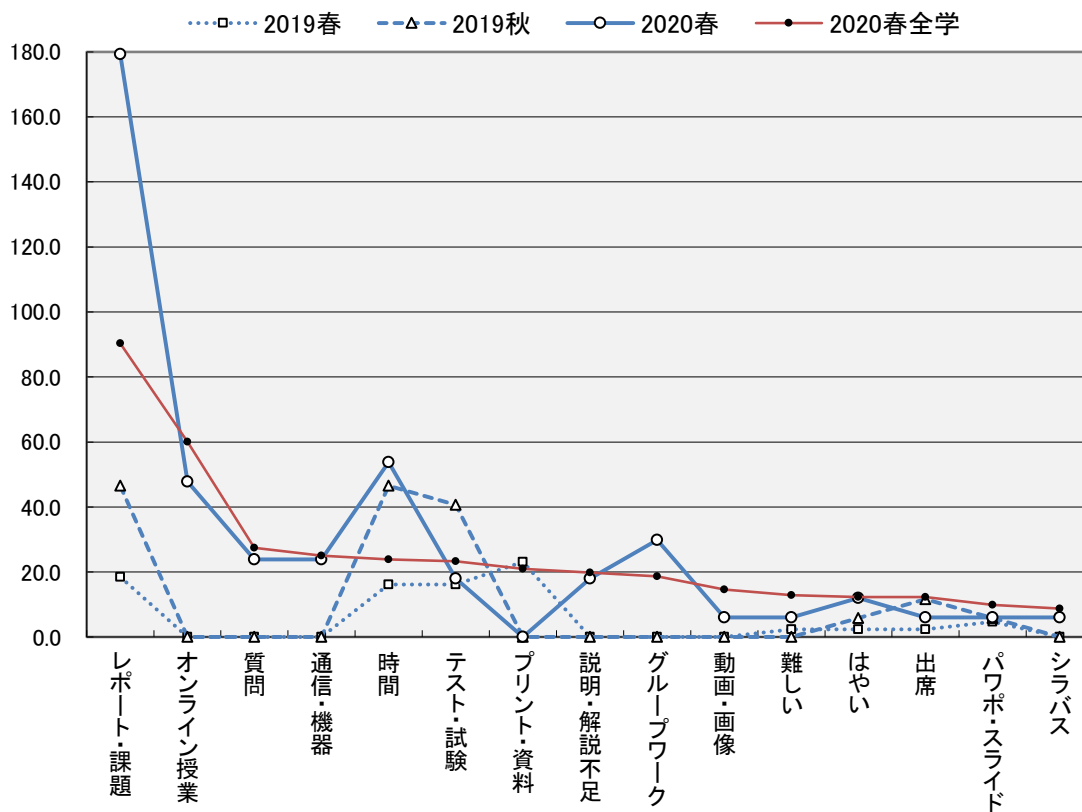


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学部別

《心理社会学部》

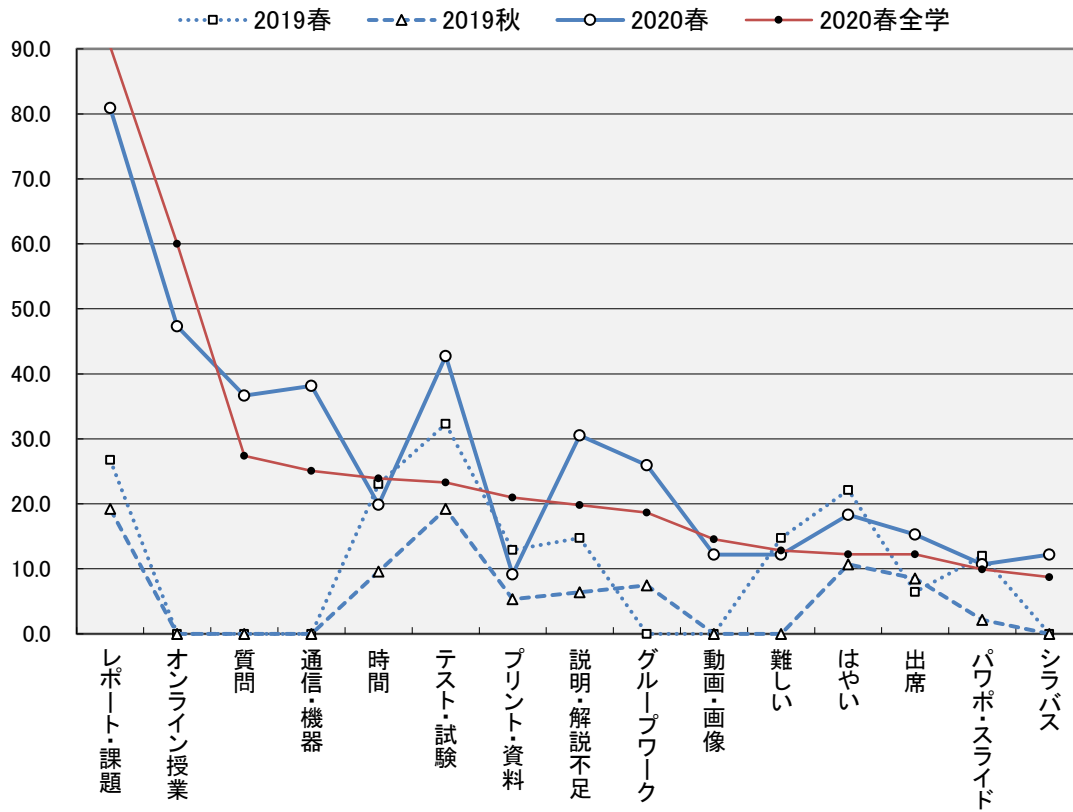


《社会共同学部》



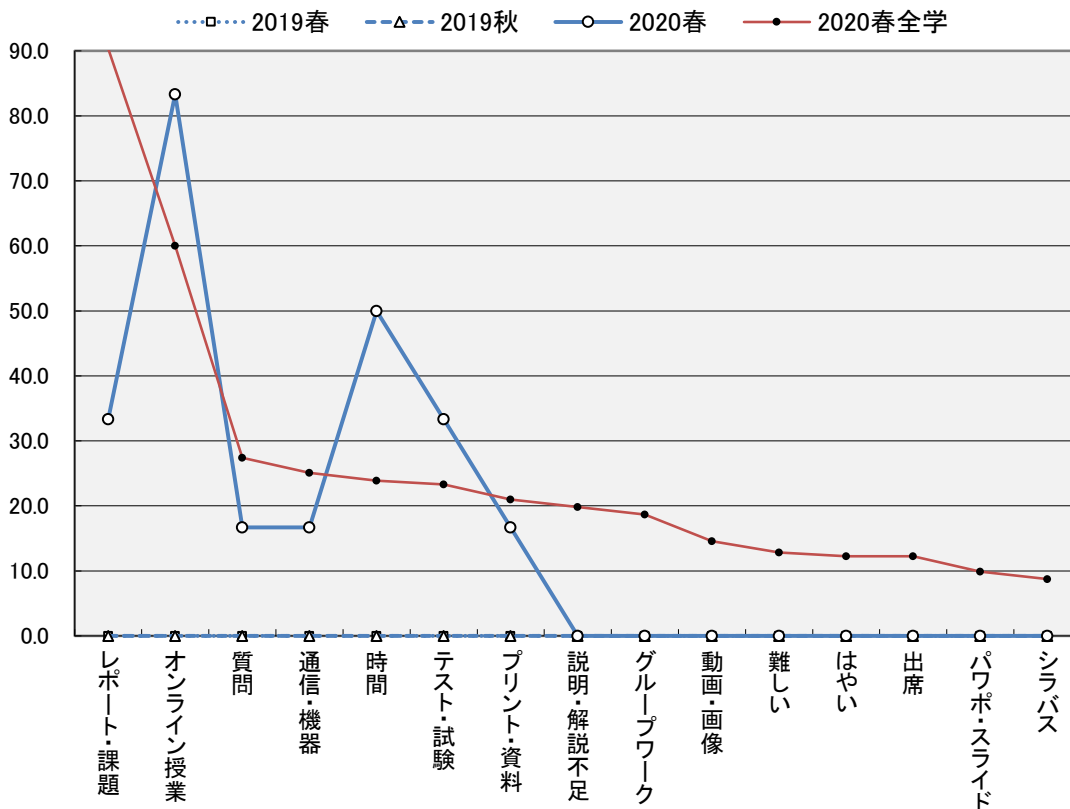
自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】学部別

《Ⅰ類・第Ⅱ類科目(学部共通)・Ⅲ類》

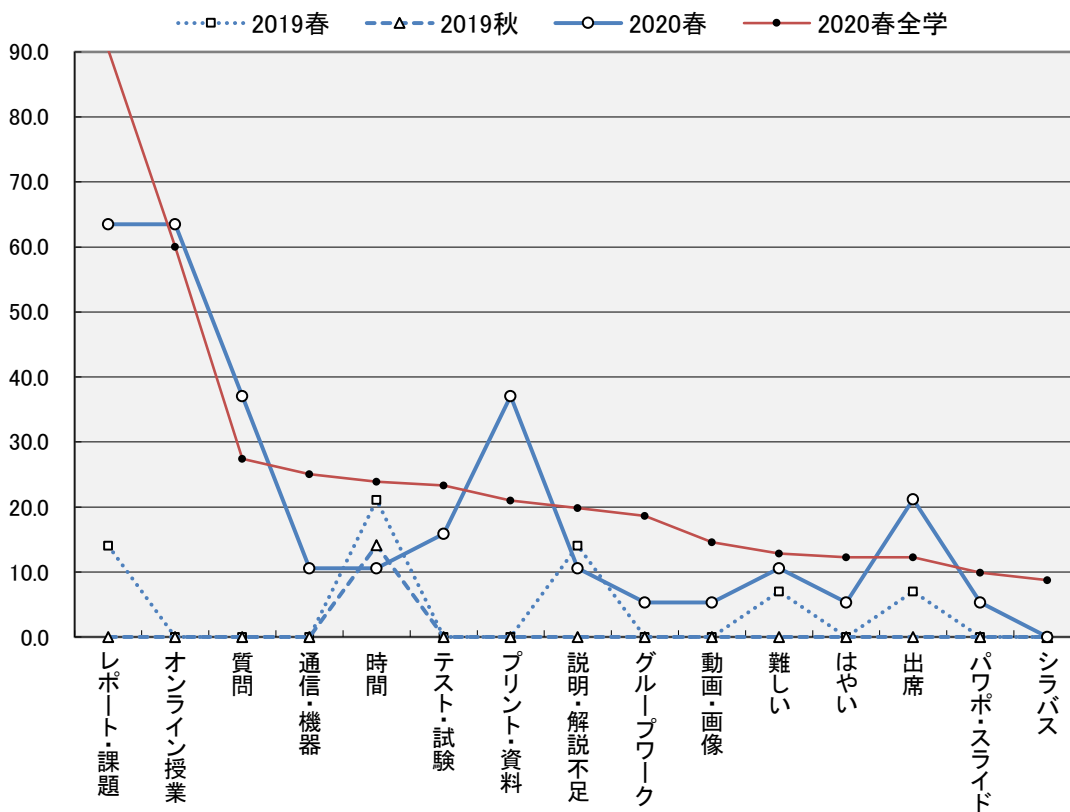


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

《1～3人》

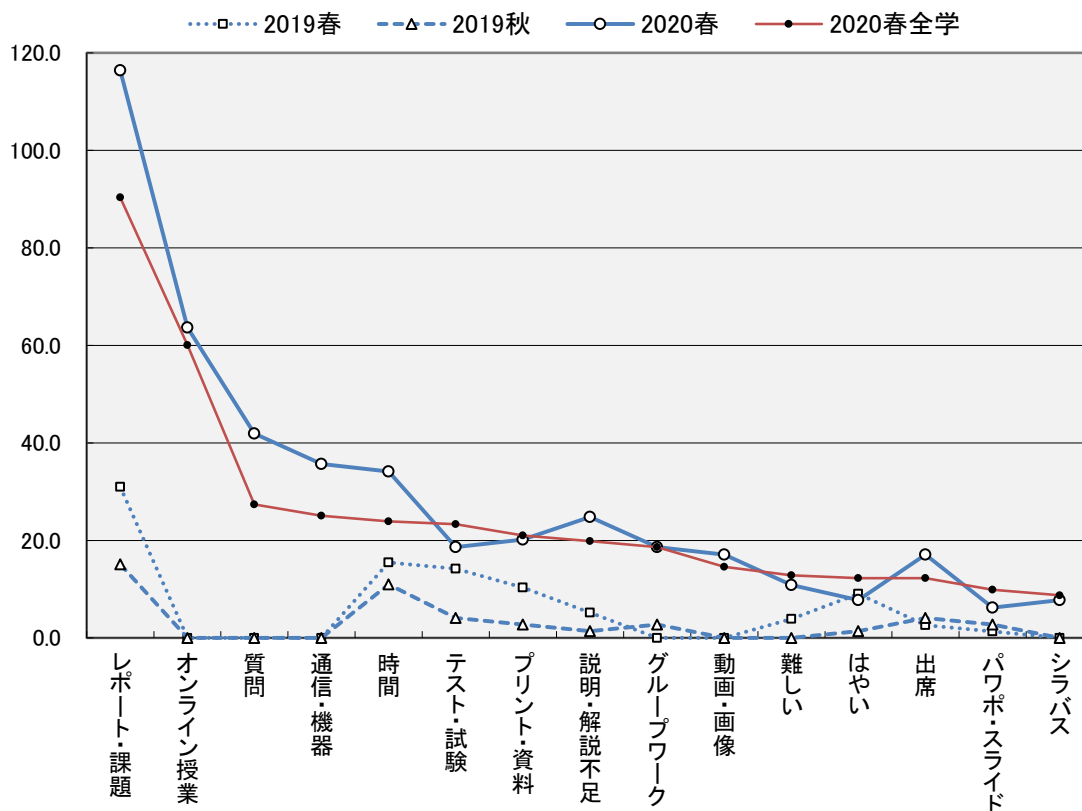


《4～9人》

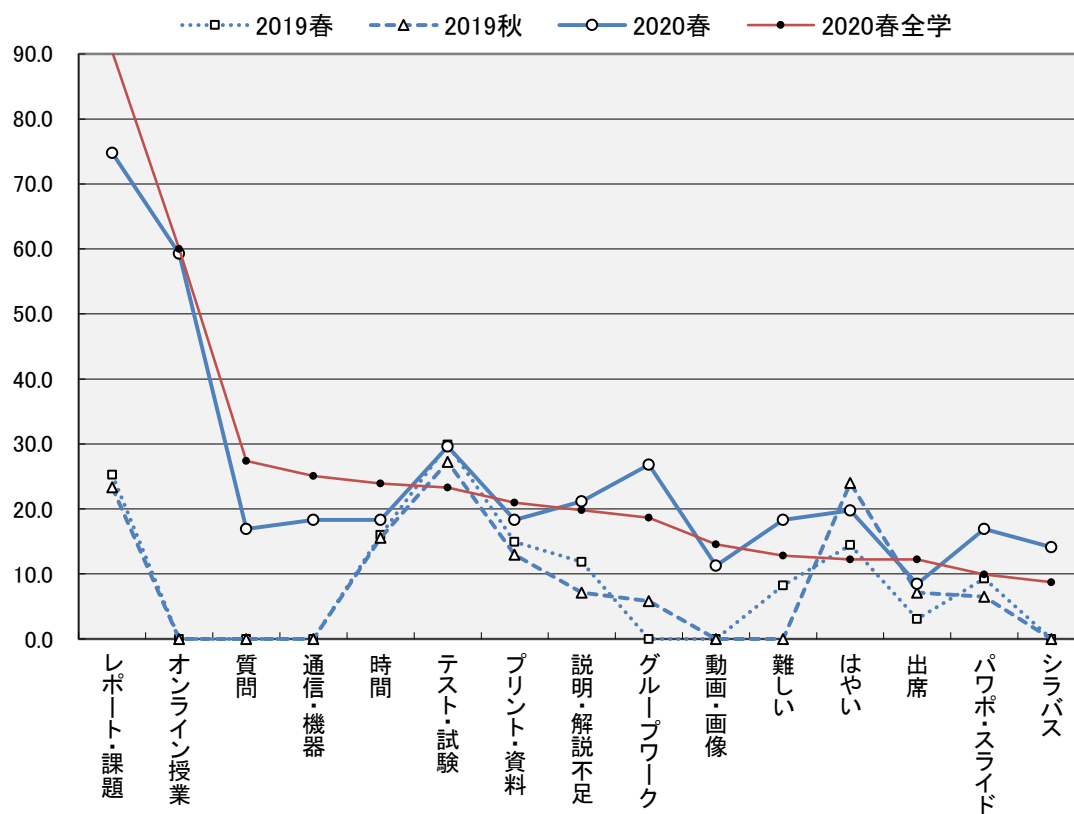


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

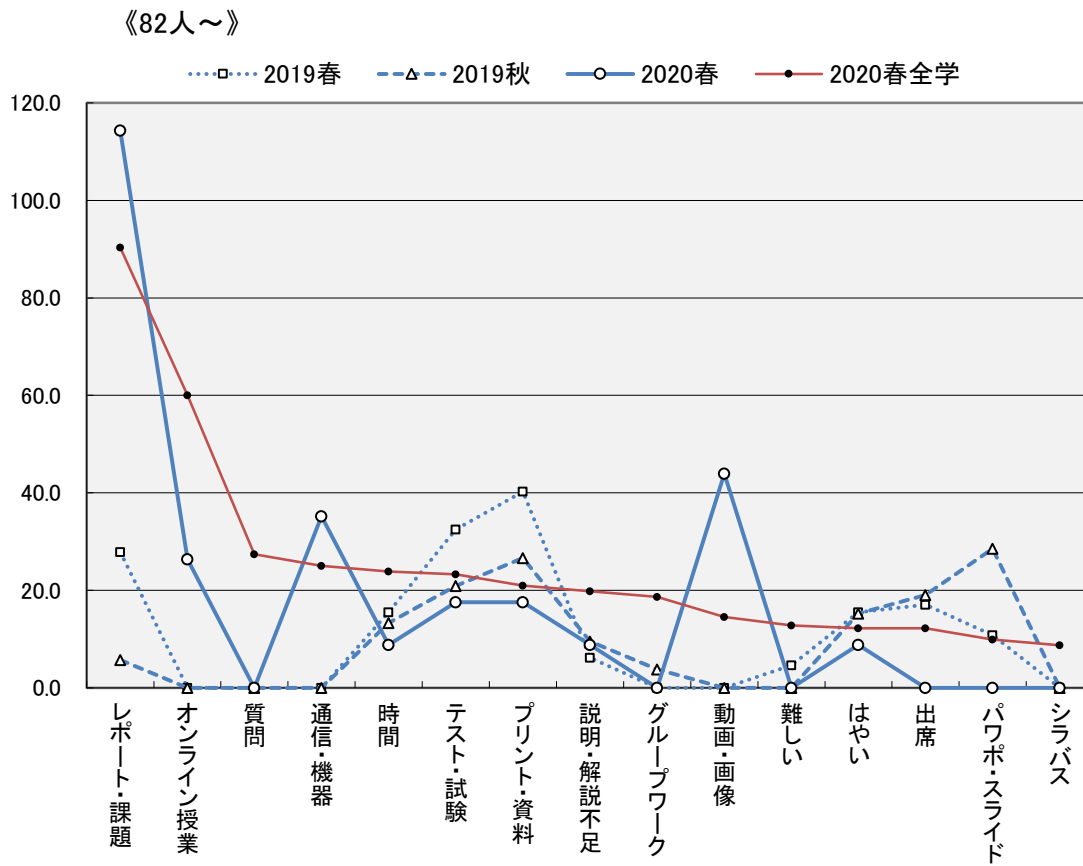
《10~27人》



《28~81人》

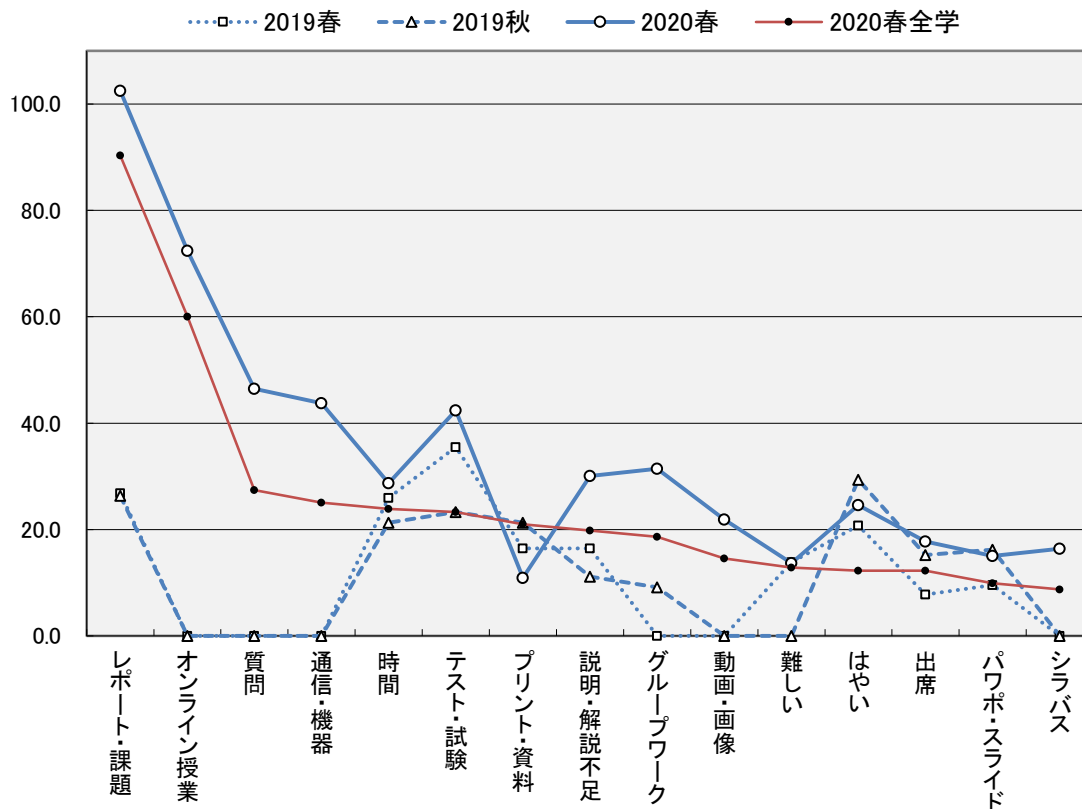


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
 【出現率前回比較】回答人数帯別

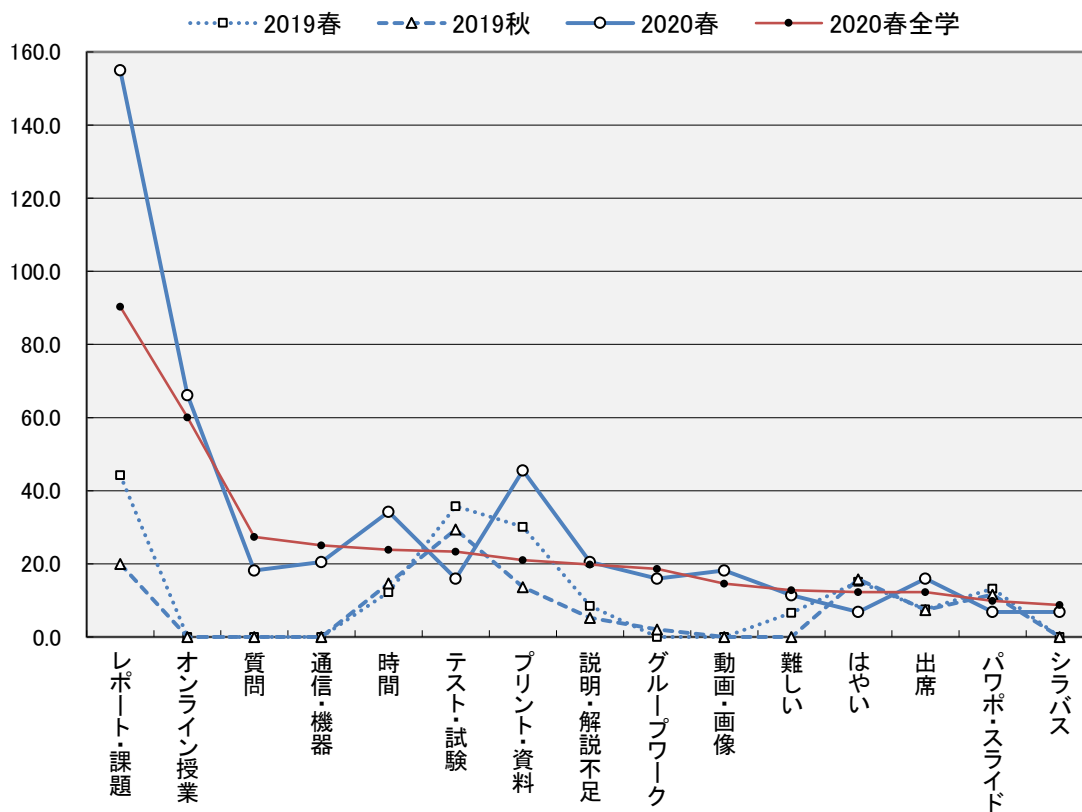


自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

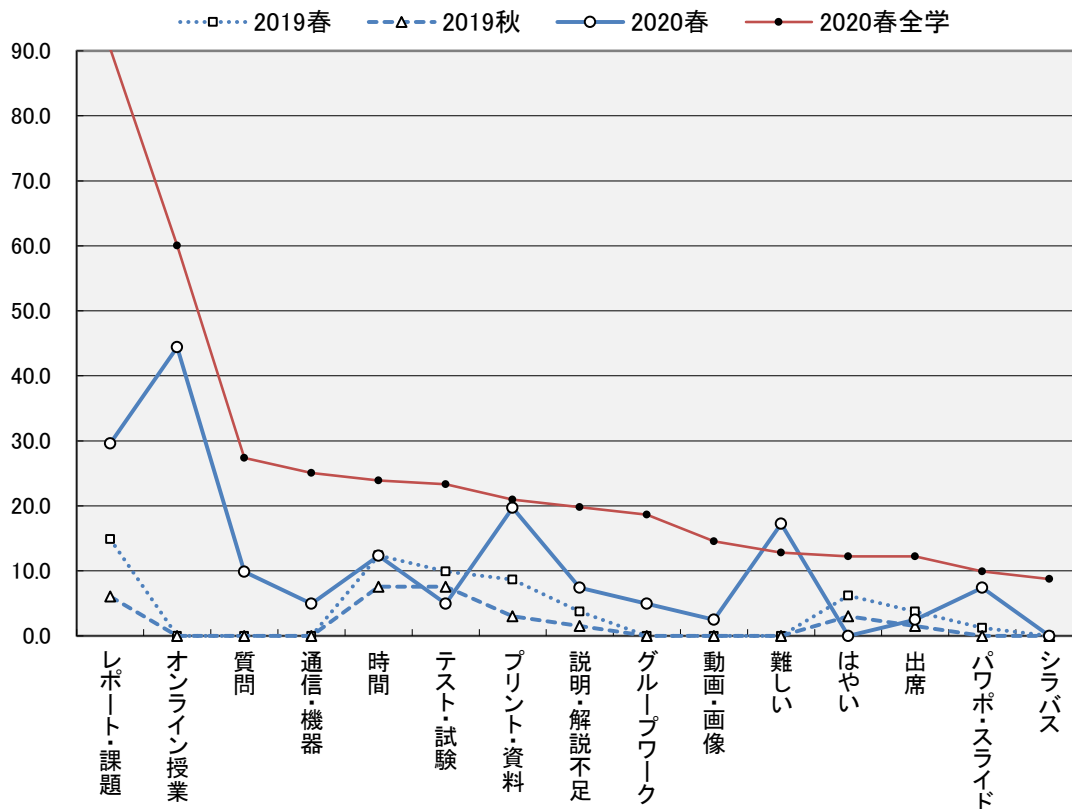


《2年》



自由記述回答 頻出キーワード <改善点>
【出現率前回比較】学年別

《3年》



《4年》

